



重訳の再評価の試みーベトナムにおける日本文学の重訳を中心にー

NGUYEN THANH TAM

(Degree)

博士（学術）

(Date of Degree)

2016-03-25

(Date of Publication)

2017-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6554号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006554>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

重訳の再評価の試み

ーベトナムにおける日本文学の重訳を中心にー

平成 28 年 1 月

神戸大学大学院国際文化学研究科

NGUYEN THANH TAM

博士論文

重訳の再評価の試み

ーベトナムにおける日本文学の重訳を中心にー

審査 教 員：藤濤文子 教授
米本弘一 教授
遠田勝 教授

平成 28 年 1 月
神戸大学大学院国際文化学研究科
NGUYEN THANH TAM

謝辞

本研究を進めるにあたり、お世話になった方々にお礼を申し上げます。特に研究生時代より永年にわたり、終始適切で且つ丁寧なご指導を賜りました神戸大学大学院国際文化研究科の藤濤文子教授に衷心より謝意を表します。翻訳理論という分野の知識のみならず、先生の研究に真摯に向い合う姿勢にも大きな感銘を受けました。

修士課程から研究あるいは授業科目に関し、大なるご指導を下さいました言語コミュニケーション論コースの諸先生方に深く感謝致します。また、神戸大学大学院国際文化研究科の岡田浩樹教授には、研究の進め方について親身になって相談にのっていただきましたこと、深く御礼申し上げます。神戸大学名誉教授合田濤先生は、長年にわたってベトナム人留学生の世話をしてくられ、私も公私にわたり大変お世話になりました。心からお礼申し上げます。

最後に、これまで私を暖かく見守ってくれたベトナムにいる家族、そして日本とベトナムの友人達に心から感謝致します。

2016 年 1 月

目次

第1章 序論	1
1.1 研究の背景.....	1
1.2 研究動機	2
1.3 研究対象と研究目的.....	3
1.4 研究方法	4
1.5 論文の構成.....	5
第2章 文学の重訳：用語と評価	8
2.1 先行研究での「重訳」の定義・専門用語と分類.....	8
2.1.1 定義・専門用語.....	8
2.1.2 重訳の分類.....	11
2.2 文学の重訳についての評価.....	12
2.2.1 読者の印象.....	12
2.2.2 出版社の対応.....	15
2.2.3 先行研究に見る評価.....	16
2.3 まとめ	22
第3章 重訳の背景：ベトナムにおける文学翻訳史と日本文学の位置	
ーポリシステム理論の観点から	23
3.1 ベトナムの文学翻訳の概要.....	23
3.1.1 ポリシステム理論の運用.....	23
3.1.2 ベトナムの文学翻訳の歴史ーポリシステム理論から	24
3.2 ベトナムの文学翻訳の特徴.....	30
3.3 日本文学翻訳の位置づけーポリシステム理論から	32
3.4 まとめ	35
第4章 ベトナムにおける日本文学の重訳：変遷及び特徴.....	36
4.1 ベトナムにおける日本文学の社会背景.....	36
4.1.1 日本語教育と翻訳者の状況.....	36

4.1.2	日本文学の先行研究.....	38
4.1.3	日本文学の重訳の時代区分.....	40
4.2	ベトナムにおける日本文学の重訳の変遷.....	41
4.2.1	1913 年～1944 年の段階.....	41
4.2.2	1945 年～1974 年の段階.....	43
4.2.3	1975 年～2001 年の段階.....	45
4.2.4	2002 年～2012 年現在の段階.....	47
4.3	ベトナムにおける日本文学の特徴.....	49
4.4	まとめ	51
第 5 章	異文化対照法としての重訳の可能性	53
5.1	異文化理解の視点から見直す翻訳・重訳.....	53
5.2	重訳の新分類.....	54
5.2.1	通常为重訳：「二視点の重訳」	55
5.2.2	二つ以上の媒介翻訳からの重訳：「三視点の重訳」	56
5.2.3	起点テキストと対照した重訳：「三視点对照の重訳」	57
5.3	「三視点对照の翻訳法」の概念.....	58
5.4	三視点对照の翻訳法のメリットについての考察.....	60
5.4.1	理論的側面から.....	60
5.4.2	実践の側面から.....	61
5.5	まとめ	63
第 6 章	ベトナムにおける日本文学の重訳の事例分析	64
6.1	事例分析の基準.....	64
6.2	重訳の問題.....	65
6.2.1	直接翻訳に引き継がれる問題：誤訳・省略追加等	66
6.2.2	媒介言語の差異による問題：固有名詞の表記の不統一と漢語の問題.....	71
6.2.3	時代的制約による問題：文化的な概念の改変と不正確な訳	76
6.3	三視点对照の翻訳法のメリットを表す事例.....	77
6.3.1	誤訳やミスを制限できる効果.....	78
6.3.2	文化的に妥当な訳を導く効果.....	80

6.3.3 文学的創造の可能性を広げる効果	83
6.4 まとめ	84
第7章 重訳の再概念化と今後の展望	85
7.1 重訳の再概念化について	85
7.2 重訳及び三視点对照の翻訳法の有効性	86
7.2.1 翻訳者の選択要素	87
7.2.2 有効な言語の組み合わせ	87
7.3 今後の課題：重訳の情報が実務上公開できるように	93
7.4 まとめ	94
第8章 結論	96
引用作品	101
参考文献	102
資料1 ベトナムにおける日本文学の出版書籍作品一覧	109
資料2 アンケート質問票	123

第1章 序論

1.1 研究背景

異なる国家間の政治・経済・文化的交流は、言語の仲介、例えば通訳・翻訳なしには行えない。翻訳は単なる言葉の置き換えだけではなく、異文化の変換でなければならない。人間の歴史上、翻訳は文明・文化が触れ合う手段として重要な役割を果たしてきた。特に、文学翻訳は歴史が長く異国の文化理解に大きく貢献してきた。とりわけ近年になって、グローバル化の波の中にあって、翻訳に対する注目度はさらに増加しつつある。それに伴って、1970年代末に、「翻訳の産出及び記述に関わる問題を扱う」(Lefevere, 1978) 翻訳研究 (Translation Studies) が独立した学問として生まれた。

ただし、翻訳は常に直接的に訳すとは限らない。翻訳史を辿ると、重訳、すなわち媒介言語を経由した翻訳が頻繁になされたことが分かる。経書、科学知識の書籍から古典文学にまで幅広く重訳されて、離れている国々・文化にまで伝えられた。翻訳が文化の橋渡しの役割を果たすとすれば、その中に重訳の存在も否定できないだろう。翻訳史の研究において、しばしば重訳の事例が述べられることがあるが、それは重訳の存在が意識されていることを意味するだろう。しかし重訳は直接翻訳に比べてレベルが低いと考えられて、研究の対象にされない状態が長い間続いた。1990年代に入って、重訳に関する研究が始まったが、重訳という現象自体についての研究・論文は非常に少なく、対立的な観点も存在し (St.André, 2009)、体系的な理論化が進んでいないのが現状である。

また、一般的に重訳は主に翻訳者不足の場合に行われると言われているが、媒介翻訳が実際に使用される事例を見ると、単なる重訳以外にも「媒介翻訳を参考にする」という現象もある。また、グローバル化が進んだ現在でも重訳の存在は消えるどころか、その現代的意義が増しているとさえ言える。

重訳が行われる背景には、起点テキスト (Source Text- ST) と目標テキスト (Target Text- TT) の関係のみならず、起点言語 (Source Language- SL) の文化と目標言語 (Target Language- TL) の文化の交流、そして目標社会の歴史的背景や文化的・政治的な要素までも絡んでいる。このように、重訳の過程・働きを支配しうる要素が様々であり、重訳が発生した背景

も歴史的条件によって異なると考えられる。

一方、重訳が発生する背景には文化・言語の序列的關係の影響も見られる。優勢な世界言語との相対關係から、翻訳の世界的系統を考える Heilbron (1999/2010) は、英語、ドイツ語、フランス語等のような国際的に通じる重要言語は **central position** 「中心部」にあり、他の言語はより狭い範囲でしか使われないため、周辺的な位置 (**semi**) **peripheral position** にあると主張している。その場合は、国際的言語を媒介言語として、現地語の文学等の翻訳が行われることが多いとした。この観点から、重訳が起きる頻度はその SL・TL の普及度に関わると考えられる。英語に比べると、日本語もベトナム語も周辺の少数言語と言えよう。例えばベトナム語は少数言語であるため、他の周辺の地域にある言語・文化（例えば日本文学）との交流を促進しようとする、重要言語を介しての重訳に頼らざるを得ないと理解するのが適切であろう。

重訳について従来の考え方・理論ではこうした現象を説明し切れないところも少なくないため、より深く完全な研究が必要となるだろう。このように重訳は、その過程・働きを支配する要素が様々あり、重訳が発生した背景も歴史的条件によって異なるため、非常に興味深い現象であり、重要な研究テーマだと考えられる。

1.2 研究動機

重訳はベトナムにおいて、長い歴史の中で多発した現象であり、日本文学の受容に大きな役割を果たしてきたという現実が本研究の動機になっている。

ベトナムは中国と国境を接しており、中国文化に強い影響を受けながら、19 世紀から 20 世紀前半のフランスによる植民地化の時期を経て、ベトナム戦争の悲劇を乗り越えて、現在は社会主義の下で改革開放政策を推進している。ホアン Hoàng (1999) が「ベトナムにおける翻訳は歴史の経過と変動と共に変化してきた」と述べたように、こうした激動の歴史によって、ベトナムの翻訳史、及び日本文学翻訳史にも様々な展開がもたらされた。

日本とベトナムは、中国から漢字を借用してきたことから、日本語とベトナム語の語彙には意味も語感も共通するものが多いと思われる。しかも、両国の交易關係は 16 世紀にま

で遡り、文学交流も 20 世紀初頭には始まったと言われているが、その中で、日本との実質的な外交関係が結ばれた期間はそれほど長くはなかった。1990 年前半まで、ベトナムにおける日本文学は殆どが中国語や英語、フランス語等の媒介言語を通して、ベトナム語に翻訳されてきた。2002 年以降、日本文学の直接翻訳が多く行われるようになると共に、重訳は減少する傾向にあるが、まだ数は多い。また、「新しい重訳」（＝媒介言語の翻訳を使いながら、原文も参考にして翻訳を進めるという形式）も何冊か出版されている。こうした現象の理由を説明するためには、ベトナムの特殊な社会的・歴史的要因に言及する必要があるだろう。

さらに、重訳が生じたベトナムにおける社会・文化的背景は、他の小国にも当てはまる可能性がある。したがって、ベトナム語の重訳の事例を研究することが、他の周辺言語に共通する実践的課題に取り組むことになると考えられる。

1.3 研究対象と研究目的

本論文の研究課題は、ベトナムにおける日本現代文学翻訳の具体的なケースを中心に、文学の重訳に関する理解を深化し、重訳の意義と今後の方向性について理論的に検討することである。そのために、通常重訳概念を脱して、現実存在する文学の重訳に関わる現象をより広く扱うこととする。それ故、1つの媒介言語を用いる重訳のみならず、複数の原本に基づいた重訳の変形及び重訳の要素が入る現象をも研究対象とする。

また後述するように、ベトナムの翻訳史はポリシステム理論 Polysystem theory (Even-Zohar, 1978/2000)を用いて検証すると、翻訳文学が主流で中心的な地位を占めるとされる3つのケースの全てが当てはまる典型的事例であることが分かる。したがって、日本文学のベトナム語翻訳の研究は、重訳における翻訳作品の選択及び翻訳法に及ぼす社会的文化的背景の影響、および重訳の歴史的展開を考察する事例として適していると言ってい

いだろう。

本論文の目的は、重訳の諸相を追求する上で、次の5点を明らかにすることである。

まず1点目は重訳についての研究を整理することである。先行研究において、重訳及び

文学の重訳に関してどのような概念規定や批評があるのか整理する。その上で客観的に重訳理論の現状を評価し、問題点を確認したい。

2 点目は、ベトナムにおける日本文学の翻訳のケースを通じて、重訳を取り巻く社会・文化的状況との関連づけを明確に示すことである。ベトナムの翻訳史及び日本文学の重訳史に、小国の言語・文化の成り立ち・展開の過程と共通する特徴があると考えられるため、重訳現象の解明につながると思われる。

3 点目は日本文学のベトナム語重訳版の実状を踏まえて、重訳の形式や特徴を再検討し、理論を展開することである。それによって、重訳について新しい意味づけと分類方法を提案したい。

4 点目は重訳を見直す立場から、重訳のメリット・デメリットを考察することである。先行研究において文学における重訳の価値がしばしば疑問視されるが、これらの実際の問題点を検証する。

5 点目は、重訳の現代的意義と活用の可能性を明確化することである。それを踏まえ、今後の重訳のあるべき形及び意義を考察することとする。

1.4 研究方法

以上の目的を達成するために、次のような手順により研究を進める。

最初に、重訳に関する先行研究を検討し、重訳の定義・専門用語・分類を明らかにする。さらに、重訳の評価を考察する際に、読者アンケート調査の一部も取り入れて、読者の印象、出版社の対応と先行研究に見る批判的言説を論述する。文学翻訳において重訳の果たしうる役割を再検討するに際し、否定的な批判のみならず、肯定的な意見やかつての文学重訳の事例も取り上げ、考察する。

また、重訳をベトナムの文学翻訳で見る際に、ポリシステム理論を援用し、ベトナムの翻訳文学における日本文学翻訳の位置づけを整理することとする。

さらに、日本文学の最初の翻訳が現れた 1913 年以降、日越交流において歴史的・社会的に大きな変動が起きた年代を節目とし、ベトナムにおける日本文学の翻訳の歴史を 4 段階

に分ける。各時代に日本文学がどの程度訳されたかを調べるために、翻訳作品の一覧表を作成する。重訳の問題と新しい重訳のメリットを解明するにあたって、日本文学のベトナム語重訳版と原文からの直接翻訳の訳文及び訳出法を比較分析し、記述する。本論文では、俳句や川端康成、三島由紀夫や村上春樹等の作品の翻訳を事例として分析する。

次に、事例分析の結果を用いると共に、ベトナムにおける日本文学の翻訳に新たな展開があった 2002 年以降の状況を中心に、出版社の編集者のインタビュー調査結果を提示して、重訳に関する問題点、およびその解決法を検討する。これを踏まえ、既存の重訳を再編集し、またこれから行われる重訳の質を向上させるため、実践的な方法を提案する。

最後に、重訳の有効範囲や今後の動向・課題を解明するために、世界文化・言語の相対的な関係に言及する。

1.5 論文の構成

博士論文は第 1 章の序論と第 8 章の結論を除き、各章の内容は以下の通りである。

第 2 章「文学の重訳：評価と用語」においては、重訳に関する基本的な概念を整理し、先行研究で解決できていない理論的課題を明らかにする。主な先行研究における、重訳の定義、専門用語と分類を整理し、確認する。文学の重訳に対する評価では、読者の印象、出版社の対応、及び先行研究に見る評価を検討する。その中で、重訳に対して多く存在する否定的な言説を述べ、それに対する反論として、世界の文化・文学の交流史において行われてきた重訳の歴史、その役割を明確にする。

第 3 章「ベトナムにおける日本文学の翻訳と重訳ーポリシステム理論の観点から」では、まず「ポリシステム理論（多元システム理論）」を紹介する。その理論の観点から、ベトナムの文学翻訳史及び日本文学の翻訳史を整理することを試みる。ポリシステム理論を使うことで、ベトナムの文学翻訳の歴史を概括し、ベトナムの特殊な歴史・社会・文学的背景と翻訳の特徴の関連を検討する。ベトナムの文学システム全体の中での外国翻訳文学の位置付け、そして外国翻訳文学システムにおける、英文学やフランス文学のような主流の文学と比較した、日本文学翻訳の位置付けを明確化させる。次に、その位置づけからベトナムにおける日本文学の特徴を考察する。それに加えて、日本文学の翻訳に影響を与えた日本文学の研究・教育の状況を検討する。

第4章「ベトナムにおける日本文学の重訳の変遷」においては、先行研究を踏まえ、ベトナムの歴史や日本・ベトナムの外交関係の経過に沿って、日本文学の翻訳史を4つの時期に区分し、歴史的な変遷を整理する。それは1913年～1944年、1945年～1974年、1975年～2001年、及び2002年～2012年現在という段階である。各段階での歴史的背景及び日本文学の翻訳事情を明らかにする。詳しくは日本文学の紹介に影響を及ぼした歴史的な出来事を整理し、その時期にどのような作品・文学ジャンルが訳されたか、またどのような翻訳法と媒介言語が使用されたかを見ていく。その中で、日本文学の翻訳において、重訳の果たした役割と時代ごとの変遷を中心に論述する。

第5章「異文化対照法としての重訳の可能性」においては、ベトナムにおける日本文学の重訳という具体的なケースを通じて、重訳の諸相を究明する。まず異文化理解の視点から翻訳と重訳のプロセスを分析する。そのプロセスにおいて原文・媒介翻訳・重訳という三視点の関係に着目し、重訳の新しい分類を試みる。通常为重訳に加え、複数の媒介翻訳を利用する重訳、さらにSTを参照する重訳等のタイプを区別する。そこに関与する視点から、それぞれの優劣を論述する。また、重訳の要素を活用する翻訳法である三視点对照の翻訳法の概念を導入し、その翻訳モデルの有効性についての考察を行う。

第6章「ベトナムにおける日本文学の重訳の事例分析」においては、まず日本文学のベトナム語重訳版の具体例を通じて、重訳における問題点を考察する。重訳の場合は、異文化・言語的要素の変換過程において、直接翻訳の誤訳等から引き継がれる問題、媒介言語の差異による問題（固有名詞の表記の不統一）、及び時代的制約による問題（文化的概念の翻訳の不正確さ）という3つの課題に分けて、事例を分析し、各々問題の克服の方法を検討する。そこで、既存の重訳とこれからの重訳の質を向上させるために、三視点对照の翻訳法の有効性を再検討する。実際に行われた三視点对照の日本文学のベトナム語訳の例を、通常为重訳と直接翻訳版と比較分析しながら、三視点对照の翻訳法の利点を例証する。それは誤訳を制限できる効果、文化的に妥当な訳を導く効果、及び文学的創造の可能性という効果である。

第7章「重訳の再概念化と今後の展望」においては、それまでの考察を踏まえ、文学の重訳の本質を反映する新しい概念を確定する。そして今後の重訳・翻訳のあるべき形式に関して、重訳及び三視点对照の翻訳法の有効性を検討する。その中で、翻訳者の選択要素及び重訳の展開に有効な言語の組み合わせという2つの角度で言及する。また、先行研究で触れてきた世界言語の相関体系を分析し、重訳において、最も頻繁に使われる言語の組

み合わせの傾向を明らかにする。最後に、重訳の情報が実務上公開できない現状から、著作権・翻訳権に存在している問題点をとり上げ、考察する。

第2章 文学の重訳：用語と評価

本章では重訳についての主な先行研究で言及された重訳の用語と評価についてまとめる。まず、日本語及び英語の多様な「重訳」を指す用語の歴史的変化を確認する。それらの用語は重訳の本質の理解を反映したものであり、重訳の分類の基になっている。次に、文学の重訳に絞って、重訳に対する評価を、具体的に読者の印象、出版社の対応と研究界の言説を通じて考察していく。読者の印象を調べるために、アンケート調査を実施した。

2.1 先行研究での「重訳」の定義・専門用語と分類

2.1.1 定義・専門用語

小林が『晋書（宣王記）』には、「正治元年（240）春正月、東夷重訳納献」とある（小林, 2011: 205）と指摘したように、「重訳」という語は中国の古代文献の中に散見される。古代中国と（日本）の交流において、A から B、B から C というように、重訳は何度も重ねた通訳のことであろう。また、日本語辞書の説明によると、『広辞苑第六版』（2008）では、重訳は「〔史記三王世家〕一度訳された語をさらに他国語に翻訳すること。また、通訳を再三重ねることから遠くへだたることをいう。じゅうやく」と説明されている。『大辞泉』（2002）における「原語から直接に翻訳するのではなく、一度他の外国語に翻訳されたものを通して翻訳すること。また、その翻訳したもの」という説明もほぼ同様である。

しかし、これらの辞書による説明では重訳の間接的プロセスを「一度」と限定しているが、実際にはより複雑な状況もある。アンデルセンの作品の場合は、デンマーク語からドイツ語に訳され、また独訳から英語に訳され、英訳を使い、日本語に翻訳され、最後に日本語版は中国語の底本になったと言い、何度も間接的プロセスを経てきた（Dollerup, 2000）。

改めて翻訳理論の立場から、複数の底本を使った場合も含むものとする。Kittel & Frank (1991: 3) によると、媒介された翻訳（Mediated translation）とは、「起点言語または目標言語以外の言語への、翻訳である 1 つ或いは複数の底本に基づいた翻訳のことである」¹とい

¹ 原文：“[A]ny translation based on a source (or sources) which is itself a translation into a language other than the language of the original, or the target language.”

う。これは辞書の解説より普遍的であり、重訳の多様な可能性を許容する定義である。また、Dollerup (2006: 85) は「『リレー』は、原文の言語と異なる言語での訳文が存在していることを前提とした、起点言語から目標言語への媒介である)」²と述べている。より一般的に、St André (2009, op.cit.) では「重訳 Relay とは、翻訳された訳文（文字および口頭）を別の言語に翻訳することである」と捉えている。これは辞書の解説より普遍的であり、重訳の多様な可能性を許容する定義である。

このように重訳の定義は理解しやすいが、その一方で、重訳の概念の内包を表す専門用語を確定するのは容易ではない。中国での重訳の概念について、裴亮 (2011: 76-77) は魯迅³及び周作人⁴の異なる主張を比較した。魯迅は「重訳」という語について、「原作が元々使われている言語から直接翻訳するのではなく、一度他の外国語に翻訳されたものを通して翻訳することである」とし、即ち日本語と同じ意味で使った。これは、魯迅が日本へ留学した時期があるためと考えていいだろう。しかし、周作人は「重訳」という語を別の意味で、つまり「同じ外国書の二回目以上の翻訳」(裴亮, 2011) として用いた。これは現代の再翻訳 Retranslation⁵に当たるものである。そして、魯迅が定義した「重訳」という現象は「間接訳」と称することを提言した。現代中国語では重訳概念には「転訳」という用語が使われている (裴亮, 2011)。このように、同じ漢字を使っても、全く異なる概念を意味する危険性がある。

さらに、英語の研究書で扱われる専門用語も数多い。Kittel (1991) では‘intermediate’(first-hand) & ‘mediated’(second-hand) translation という重訳の形式を区別している。Toury (1995) はその2つを受けて、‘indirect’ と ‘second-hand’ translation という概念も加えて扱っている。Dollerup (2006) は「翻訳の本質」の章で、「Relay リレー」という用語を用い、重訳についての項目を設けた。Koskinen & Paloposki (2010) は‘indirect translation’

² 原文: “Relay is mediation from a source to target language which presupposes a realization of the translational product in another language than that of the original.”

³ (1881-1936) 本名は周樹人。

⁴ (1885-1967) 現代中国の散文作家、翻訳家。魯迅の弟。

⁵ 再翻訳の定義は「すでに翻訳されている作品を同じ言語に翻訳する行為、あるいはその行為の結果であるテキスト自体である」とされている。(Gurcaglar, 2013: 187)

は‘retranslation’（再翻訳）の一部であると主張している。2013 年 8 月末に行われたヨーロッパ翻訳研究学会（European Society for Translation Studies）では、“Indirect Translation: exploratory panel on the state-of-the-art and future research avenues”（間接翻訳：最新の事情と今後の研究方向についての解説）という、重訳についてのパネルが開催された。この学会では、研究者たちは重訳の役割を主張する上で、‘Indirect translation’という概念を中心に検討した (Pieta & Rosa, 2013)。先行研究で使用されている重訳の概念を表す英語の専門用語を表 1 にまとめた（括弧内の日本語逐語訳は著者による）。

Term 術語	Used by 研究者	Period 時期
Chain translation（チェーン翻訳）	Ingo * ⁶	1991
Double translation（ダブル翻訳）	Edstrom *	1991
Mediated translation（媒介された翻訳）	Kittel	1991
	Toury	1995
Indirect/second-hand translation （間接／セカンドハンド翻訳）	Toury	1995
Relay translation（リレー／重訳）	Dollerup	2000
	St André	2009
Secondary/tertiary translation （二次／三次の翻訳）	Lindqvist *	2002
Indirect (mediated) translation 間接（媒介された）翻訳	Ringmar	2007
	Koskinen & Palopski	2010
	Pieta & Rosa	2013

第 2 章・表 1 英語の研究書で扱われる専門用語の一覧

表 1 に示すように、術語が様々であるものの、翻訳の過程での「間接性」を強調し表す共通点がある。

こうした状況を踏まえて、本論文では全般的な Kittel & Frank (1991) の「重訳」の概念規

⁶ * を付けた文献は Ringmar (2007) を参照。

定を採用し、日本語では定着している「重訳」という用語を用いることとする。ただし、事例において重訳の訳出法を直接翻訳と対比させて分析する際には、「間接翻訳」 Indirect translation という用語も使うことにする。これに対して、直接翻訳 Direct translation は著者の原文から直接訳された翻訳を指す。また、誤解を避けるために、文学作品の原文は起点テキスト (Source Text- ST)、媒介言語での翻訳は媒介テキスト (Mediating Text- MT)、及び最終的に産出される重訳は目標テキスト (Target Text- TT) と統一する。

2.1.2 重訳の分類

先行研究では、翻訳プロセスの間接の度合いによる分類方法が一般的である。Dollerup (2000) では重訳を‘indirect translation’ 間接翻訳 (間に入る翻訳は出版目的ではなく次の翻訳の足掛りでしかない) と‘support translation’ 補助翻訳 (新たに翻訳する際に既訳を参考にする) という分け方を提唱した⁷。Marin-Lacarta (2008) は ‘Hidden & marked indirect translation’ 隠された間接翻訳・表示された間接翻訳の 2 種類で重訳を分類した。同様に、重訳であることが明示されたかどうかによって、Rosa (2013) は ‘Overt & covert indirect translation’ 顕在間接翻訳・潜在間接翻訳という用語を用いた。また、異なる観点から、Rosa (ibid.) は起点テキストを ST1、媒介翻訳 MT を重訳された回数に合わせて ST2、ST3 と呼び、次の種類を区別した。

- Translation from a MT/ST2 (1 つの MT/ST2 からの翻訳): Indirect/Second-hand
- Translation from a MT/ST3 (1 つの MT/ST3 からの翻訳): Indirect/Third-hand
- Translation from mediating texts only (MTs)/ST2+ST3 ((複数の)MT のみからの翻訳):
Compilative Indirect
- ST1+ ST2 + ST3 からの翻訳: Compilative and Mixed 等

また、Pieta (2013) は MT の数による分類を提案した。それは 1 つの MT を基に作られた翻訳及び複数の MT を基に作られた翻訳 = eclectic / compilative translation (ST の使用も可能なケースである) である。そして、MT の数が多ければ多いほど間接の度合いは高いと指摘している (ibid.)。

以上の分類法は、用語の確定と同様に、ST から TT までの翻訳手順を描き、それに間接

⁷ 和訳は『翻訳研究のキーワード』(2013) から引用した。

性 indirectness の度合い（回数）を中心に区別を設定する分類である。しかし、上述した重訳の用語・分類では、重訳の過程で行われるはずの異文化転換に触れたものは一つもない。そこで、重訳の本質と特徴が反映できる概念づけと分類が求められると考える。

2.2 文学の重訳についての評価

2.2.1 読者の印象

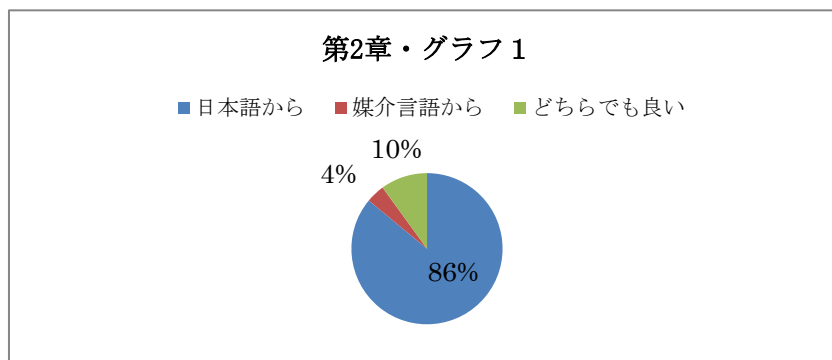
日本文学と重訳についてベトナム人読者の印象を知るためにアンケート調査を行った。

(1) 対象者と調査期間

調査期間は 2010 年の 2 月初めから 2012 年 8 月末まで。調査対象は、次の 2 グループに分けた。まずベトナム国家大学のホーチミン市人文社会科学大学日文学科の 3 年生と教師、すなわち日本文化を専攻している 25 人（グループ A）のアンケートを回収した。さらに、日本語のレベルを問わず、高校生、他専攻の大学生や社会人等日本文学・文化に関心を持つ一般人 25 人（グループ B）の協力を得た。回答のうち「その他」と自由記述は、統計の数に表示されないが、分析の参考にした。

(2) 重訳の問題についての結果と分析は以下の通りである。

問 1 では、「日本語から直接翻訳された本と媒介言語から翻訳された本のどちらを読みたいか」という設問に対し、86%の回答者（43 人）が直接日本語から翻訳された本を好むと回答した（グラフ 1. 参照）。媒介言語からの訳を選んだのは 4%（2 人）であり、「直接翻訳と重訳はどちらでも良い」の人は 10%（5 人）である。

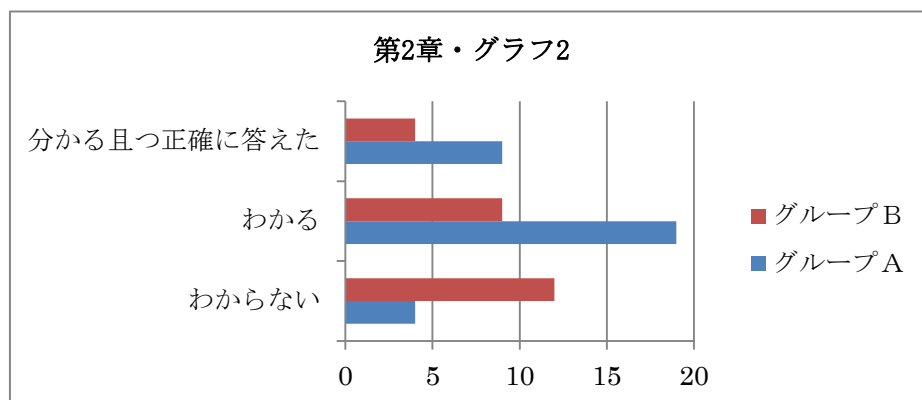


日本語からの直接翻訳を選んだ理由としては、「別の言語・文化を媒介したものより、直接的に翻訳される本の方が忠実かもしれない」や「多言語を通すと、原作の意味を保つことが難しい」といった記述があった。中には、直接翻訳の方を好むのは、「意味のずれが抑制できるから。しかし、**Nhật Chiêu** 先生⁸なら、英語から翻訳しても良い」という回答もあった。また、「どちらでも良い」と解答した人は「問題はよく翻訳できて、内容をベトナム語に伝えられることだから」、「十分に翻訳できていればよい」、「読んで理解できることが大事であるから」とした。特に、重訳を選んだ意見は「英語から翻訳した本は確かにより簡潔で分かりやすいと思う」であった。

次に、「可能ならば、日本語で文学作品を楽しみたいか」という問 2 に対して、日本語で読みたいとする回答が圧倒的に多い (41 人=82%)。「いいえ」すなわち翻訳を読みたいとしたのは 9 人=18%であった。その中で「翻訳を読むほうが早く読めて、翻訳者が日本文化についてよく調べているから十分であるため」という説明があった。

問 3 は、既に読んだことのある日本文学の作品が直接翻訳か、間接翻訳であるかが分かるかという質問であったが、日本語・日本文化の専攻するグループ A では 19 人が「はい、わかる」、4 人が「いいえ、わからない」と答えた (残りの人は回答しなかった)。これに対して、一般人のグループ B では直接翻訳か重訳か分からないと答えた人の方が 12 人と多く、9 人が分かれると答えた。そして、同じ問 3 では「はい、わかる」と答える場合は、「間接翻訳の作品の場合は、○○語から訳された」という記述の答えが求められる質問であった。その回答の正確さを「(作品の) 正しい数/答えた (作品の) 全数」で計算すると、グループ A の「分かる且つ正確に答えた」率は 54.5%、グループ B は 41.5%であった。要するに、日本文化を専攻し、日本語がある程度習得できたグループの方が、やや正確に答えたものの、それでも約半数の人は間違っていることが分かった (グラフ 2. 参照)。

⁸ **Nhật Chiêu** はベトナム国家大学・人文社会科学大学において日本文学の教授であり、長年日本文学を研究している学者・評論家である。1980 年代から英語、フランス語の研究書を介して、日本文学に興味を持ち、研究するようになった。



(3) 調査の結果のまとめ

以上の調査の回答には、一般人の心理が反映されている。それは重訳より直接翻訳が原文を正確に伝えるため、優越するという考えである。そして、可能なら原文で読みたいという考えは当然なことだが、翻訳に対する反感と疑問も示された。また、一般読者は優れた翻訳は大体直接翻訳だと判断しているが、重訳と直接翻訳があまり区別できていないことも明らかになった。このように実際には明確に区別できないまま曖昧で主観的なイメージで重訳を評価していることが見て取れる。このため、読者の大部分はしっかりとした根拠がないままに重訳評価をしているのであって、偏見であるとも言えよう。

さらに現在、ベトナムでは日本に対する関心が高まっており、より原文に近いと思われる直接的な翻訳書が要求されているが、こうした傾向も偏見を強めることにつながるだろう。アンケートの自由記述において、第3言語からの翻訳では、日本人の考え方や文化を伝えきれないという考えが圧倒的であった。その理由は、文学の特徴がオリジナル性と作家の個性であることが認識されているために、重訳への信頼度が低くなっているものと考えられる。そして、近年日本に対して興味を持つようになった人が多く、翻訳文学に日本らしさを求める傾向が増えているためと思われる。

一方、少数であるものの、重訳でもよいと思われた意見は、媒介翻訳を介した翻訳がより簡潔で分かりやすいと言い、或いは好きな翻訳者の重訳を称賛した意見は、重訳に対する好意的な態度と捉えてよいだろう。

2.2.2 出版社の対応

本節は出版社にとって重訳はどのような存在か、それを公衆にどのように見せてきたかを考察する。翻訳書では著作情報の記述のし方に注目する。

多くの出版社はあまり普及していない言語で書かれている文学作品を出版する際に、市場の要求や時間に迫われ、重訳を解決策とした。例えばあるヨーロッパの国では、ノーベル賞の候補者である中国人の作家の作品の出版は、ノーベル賞が公開されるまでに終わらないと意味がないだろうし、早ければ早いほど売れる可能性が高いと考えられる。しかし、直接翻訳は重訳より時間が掛かりコストも高いと言われている。スペイン作家協会の翻訳者部門 (Translators section of Spain Writers' Association-ACett) の規定によると、英語からの翻訳は 10.5 ユーロ／ページ (2008 年度) に比べ、中国語からの翻訳は 18 ユーロ／ページである。また、スペインの現状から言えば、英語版やフランス語版を介した重訳にすると、翻訳者の数も多く、編集作業にも選択肢が増えることになる (ibid.)。重訳はこのような経済的メリットがあるため、出版業界の支持を得て、多く存在している。

その反面、Marin-Lacarta (2008) では、中国の現代作家の Lu Wenfu (陸文夫), Moyan (莫言), Weihui (衛慧), Gao Xingjian (高行健) の 6 作品のスペイン語の重訳では、媒介の翻訳のタイトルと翻訳者が一切触れられずに、中国の原作タイトルだけを示しているという例が挙げられる。このように、重訳であることを明示せず、原作のタイトルや出版年等の曖昧な情報しか記載しないことは、2002 年以前の日本文学のベトナム語訳書にも多く見られた。当時は著作権の記述に関する規則は、何ら定められていなかったことも原因の一つと考えられる。

この現実の原因として、Marin-Lacarta (ibid.) は重訳が「罪」あるいは「病気」と捉えられているためではないかと指摘している。そうした態度を取った出版では、重訳であることが隠され、直接翻訳として偽っている事例が多い。言い換えれば、重訳が「罪」や「病気」のように、隠すべきものとされているのである。出版社や編集者が重訳に対する一般の軽蔑的態度を考慮したため、重訳であることを敢えて記述しないという現象が起きているのであろう。

2.2.3 先行研究に見る評価

A. 批判的言説

a) 文学価値に関わる批判

まず、理論面で重訳を批判する代表的な考え方を述べる。

芸術作品における原作と直接翻訳と重訳の関係について、Benjamin (1968/1996) は「オリジナル言語は芸術作品に、果実の外皮のように密着しているが、翻訳者と芸術作品との関係は、実の回りに掛けた襷のゆるやかなローブのようなものである。言語と芸術作品との間の適合関係が翻訳では異なっており、翻訳を使って芸術作品の更なる翻訳を創ることはできない」と指摘した。これは確かに文学作品の形式と内容の結びつきを強調し、常に直接翻訳しなければならないという主張である。ただし、Benjamin の比喩的イメージによる言説に対して、2 点の懸念を抱かざるを得ない。まず、現実的に言うと芸術作品は果実ではないし、重訳は直接翻訳ともに、自分の文化において独立的な「芸術作品」としての役割を果たさなければならないため、それぞれの訳出において、また ML・TL と MT・TT の間の適合関係が発生するわけであろう。それに加えて、実際に世界の傑作文学の中には、重訳でありながら名訳になったものがある。つまり、「翻訳を使って芸術作品の更なる翻訳を創ることはできない」わけではない。典型例として、『千夜一夜物語』⁹が 8 世紀頃に中世ペルシャ語からアラビア語に訳され、またフランス語 (1704～1717) のガラン版と英語 (1838－1840) のレイン版により、様々な地域へ翻訳・伝播され、古典の名作になったことが挙げられる。

「重訳」についての解説の項目では、St André (2009/2013) は「重訳が不完全な翻訳のまたそのコピーという考えが多く存在している」と指摘している。文学の職業的翻訳者である柴田も「重訳というのはコピーのコピーを取るみたいなもので、...そうすると精度が...やっぱり落ちる。その落ち方はそのコピー機の性能によるということにつきる」とし、「そこから一般論が言えるとすれば、要するにもう、あらゆる翻訳は誤訳であるということで、

⁹ 日本語では『千一夜物語』、『アラビアンナイト』とも呼ばれている。初期の翻訳においては、永峯秀樹訳『開巻驚奇 暴夜（あらびや）物語』や、夏目歌之介訳『壹阡壹夜譚』の題名も見られた。

何らかのノイズは忍び込むことであり、重訳の場合はノイズの増える割合が大きいということ」と説明した（村上・柴田，2000: 84）。これらの意見は確かに文学が特殊な翻訳であるという認識につながっているだろう。文学というのは美的言語で書かれているため、言語の「内容」のみならず「形式」にも価値があり、作品の全体に影響を及ぼしている。

以上の3つの批判は、オリジナルな文学に比べ翻訳（直接翻訳）は劣っており、また直接翻訳より重訳は劣等であることを前提にできたものである。しかし、原文への忠実さという基準が極端に求められると、平子が指摘したように、翻訳は成り立つことができなくなり、翻訳不要論を招いてしまう危険がある（平子，1999: 176）。

その反面、文学の翻訳すなわち美的テキストの翻訳の場合は「美的言語を創造することで訳されるほかない」とされた（平子，op.cit. : 166）。それ故、文学の翻訳はほぼ創造の仕事に近く、訳者の才能に任せる部分が大いという点は重訳の作業にも当てはまるだろう。その意味で、重訳がプラスになる可能性が全くないとは言えない。むしろ重訳の訳者は原文と離れる距離があるからこそ、より自由裁量の余地を持つようになるのではないかと考えられる。

b) 言語間の差異に関わる批判：翻訳者の言語能力への疑い

藤岡（2000: 29-30）は、チャーホフの『ワーニャ伯父さん』と『三人姉妹』が英語訳から新しく日本語に訳されたことを批判している。それは、シェイクスピアの全訳をしたがロシア語ができない「O氏」¹⁰という翻訳者に対する疑問である。

チャーホフの戯曲は無駄のない洗練された言葉のやり取りで、ロシア語のよくできる人でも、ロシア語の微妙なやり取り、呼吸が分からないと嘆いていたが...

ここで触れた翻訳者O氏は、日本の英文学者、演劇評論家の小田島雄志のことであろう。他にも小田島は、チャーホフの『桜の園』と『かもめ』を、英訳本を底本として日本語に

¹⁰ 確かにこの批判の対象は小田島雄志訳『ワーニャ伯父さん ベスト・オブ・チャーホフ』白水社、1999年（英訳本を底本とした上演用訳書）である。

訳した。翻訳者 O 氏は自分の翻訳について、英国の劇作家マイケル・フレインの英訳を下訳にしつつ、ロシア語から訳された日本語訳を参考にしながら、上演用台本として原稿を作成したと解説した。しかし、厳しい批判が続く。

ロシア語と英語がまったく異なるシンタックスを持つ言語であり、ロシア語を英語に近く訳すことができても、またその英語を限りなく日本語に近く訳すことができても、ロシア語から日本語に訳したものと比較することはまったく無意味であるといつてよいでしょう。

そして出版社にも「O 氏のチェーホフを出版した出版社がわざわざ重訳を商品とした見職も、疑わざるをえません」と批判した。そして、「O 氏にはチェーホフを翻訳する資格はなかったのです」との結論に至る（藤岡, op.cit.: 32）。

この意見の根拠は、英語とロシア語には大きな差異があり、英語版を底本にした日本語訳を信頼することができないということである。換言すると、例えばロシア語の系統に近い言語に訳したばあいは、日本語訳、英語訳等の離れている言語への翻訳より、原文に忠実に質の良い翻訳になるという論理に至るだろう。しかし、実際の翻訳分析を行わずに、単なる言語の組み合わせで評価することには疑問がある。これは、翻訳言語の組み合わせの多様性及び翻訳者の能力を、かなり低く評価することである。

c) 英語の文化的帝国主義に加担するとの批判

自分の作品の英語版からの重訳を奨励する村上春樹の姿勢について、日地谷＝キルシュネライト（2001: 197-198）は次のように批判している。

改変されたアメリカ版がドイツ語訳の基礎となったのだが、批評家を含めたドイツ語圏の読者は、ドイツ語訳は日本語のオリジナルと異なっているという事実を全く知らなかった。[...] 村上春樹にとって出版の時期の方が翻訳の正確さや質よりも重要なのだろうか。[...] しかし、もしこの声明の内容が村上の意志を正確に伝えているならば、

彼は自らの作品の英語版を他の言語に推奨することにより、日頃我々が批判し抵抗している、英語圏の文化的帝国主義を自ら体現してしまうことにもなる。彼はアメリカ人の好みを基盤として、自らの文学の“グローバル化”を実現しようとしているのだろう。

この意見は、重訳の質、及び重訳が与える文化的影響について2つの問題を提起している。まず、日地谷＝キルシュネライトの批判した事例のように、英語版でかなりの編集がなされるケースがあるという点だ。その場合、重訳では、最初の翻訳の編集・改変を引き継いで、原文からより離れていく、あるいは媒介翻訳の訳漏れを受動的に受け入れるという恐れがある。しかし、よく考えて見ると、問題は最初の翻訳（＝直接翻訳）の段階で発生したと考えられるだろう。適切な直接翻訳を選べるなら解決できるのではないかと思われる。次の問題は英語圏の文化的影響についてである。英語を介した重訳が非常に多い現状から考えれば、どの原語の文学作品でも英語訳に沿って、同化される危険がある。これを解決するには、英語訳のような唯一の媒介翻訳に偏ることを避ける必要があるだろう。方法として、底本の言語を多様化すること、即ち ST 或いは他の言語の媒介翻訳も使い、翻訳を行うことが良いと考えられる。

B. 肯定的な評価

重訳に良い評価を与えている意見について、作家の代表である村上春樹の意見と文化・文学の交流史の観点からの研究者の評価を分析する。

a) 周辺的な言語の文学の推進

Heilbron (1999/2010) の言語レベルの体系に基づけば、英語やフランス語等は、公用語とされ、国際的に広く使われているため、**major languages** メジャー言語と呼んで良いだろう。逆に、日本語やベトナム語は国内等狭い範囲でしか使われない **minor languages** マイナー言語である。Dollerup (2000: 86) によれば、重訳は、メジャー言語間よりマイナー言語の間でよく普及しているという（メジャー言語では、話者数と翻訳者数が多いためである）。

言い換えると、メジャー言語を介した重訳を通して、マイナー言語による文化的・文学的な書籍は国境を越え、世界に知られてきた。この機能については、アンデルセン童話の重訳は典型的な例であろう。

言語の地位を重訳に関連づけたのは作家兼翻訳者の村上春樹である。村上は重訳を肯定する立場から、以下のように述べている。

僕は実を言いますと、重訳ってわりに好きなんですよ。[...] 正論で言えば、もちろん日本語からの直接翻訳がいちばん正確だし、またそうであるべきなんだけれども、正論ばかり言うてはいられないという状況はずいぶん出てくるだろう...現実的に言うて、日本語からの直訳を世界じゅうの国に対して要求できるほど、日本語の地位は今のところ高くないです。 [...] 僕の小説がそういうふうに重訳をされているということから、書いた人として思うのは、べつにそれでもいいじゃないかって (笑)。多少誤訳があっても、多少事実関係が違っても、べつにいいじゃない、とまでは言わないけれど、もっと大事なものはありますね。僕は細かい表現レベルのことよりは、もっと大きな物語レベルのものさえ伝わってくればそれでいいやという部分はあります。 [...] たとえば僕がいま本を書いて、それが十五年後にひょいとノルウェイ語に訳されたとして、それはそれでももちろん嬉しいんだけど、それよりは二年後、三年後にいくぶん不正確な訳であつても出てくれたほうがありがたいですよ。正確さというのは大事だけど、速度というのも決して無視できないことです。...これは賞味期限の問題だと思うんです。小説には時代的インパクトというものがあるし、同時代的に読まなくちゃいけない作品も、やはりあると思いますよ。(村上・柴田, op.cit.: 82-85)

村上春樹が作家として、重訳、具体的に英語の翻訳からの重訳に賛成する態度を取ったのはかなり興味深いことであるが、これは彼の作品が世界中に普及するのにつながったと考える。作品の英語版を通して、村上春樹は国際的な名声を博し¹¹、「グローバル作家」¹²と

¹¹ http://ajw.asahi.com/article/cool_japan/style/AJ201305150070 を参照、2015 年 10 月 30 日最終閲覧。

なって、現在 50 言語に翻訳されている¹³という。恐らく村上春樹が言う文学作品の「賞味期限」とは、自分の著作を早い時期に様々な国の読者に届け、味わわれるようにという願望を意味するだろう。また、この意見の前提となっているのは、ニューヨークが現在の出版業界の「中心軸」であり、言語的にも英語が業界のリング・フランカになっていることである(ibid.)。つまり翻訳の実践的状況に沿ったコメントと考えられる。

b) 文化伝播や文学交流における重訳の役割に関する研究

上述した批判があるにもかかわらず、歴史的現象から見る重訳の役割についての研究が増えていく傾向にある。「文学的交流を特に歴史的に考察するには、重訳という現象抜きには考えられない」(Ringmar, 2007) とある通り、近年重訳に対して注目が集まっている。重訳の重要な役割を肯定する立場から、先行研究が次々に発表されている。Dollerup (2000) は『アラビアンナイト』の例をあげた。最初 J.A.Galland によってアラビア語からフランス語に翻訳され、その後フランス語を経由して他の言語に訳された。そして、Idema (2003) は東洋についての知識の書物は中国語からラテン語、英語、フランス語とドイツ語を通じて他の西洋語に訳されたと論じて、重訳されたことが多いと述べている。一方、St André (2006) はイギリス人が東洋や東南アジアについての知識を形成するのに重訳が大きな影響を与えたと指摘している。また、Ringmar (2007) はフィンランド語の小説がスウェーデン語を介して、アイスランド語に間接的に訳されたケースを考察した。

Delbastita (2009) によると、18 世紀から 19 世紀のヨーロッパでは、シェイクスピアがよく重訳された。具体的にはフランス語訳を介して、オランダ語・イタリア語・ポーランド語・ポルトガル語・ロシア語・スペイン語・トルコ語に翻訳され、さらには植民地へと伝えられたということである。さらに、最近まで中国現代文学はフランス語と英語を介して、スペイン語に重訳されるのが当然のこととされている (Marin-Lacarta, 2008)。

以上のケースを通して、重訳は、世界の広い範囲の各時代に多く発生しており、知識・文化の伝播の過程に非常に重要な役割を担ってきたことが理解できる。即ち、重訳に依ら

¹² <http://www.nippon.com/en/column/g00144/>を参照、2015 年 10 月 30 日最終閲覧。

¹³ <http://www.curtisbrown.co.uk/news/haruki-marukami-now-available-in-50-languages#%23SITEURL%23%23haruki-murakami%2F>を参照、2015 年 10 月 30 日最終閲覧。

なければ、以上述べた有名な文化・文学的作品が、現在のように普及するまでに、さらに時間を要したと言っているだろう。また、それらの実際のケースを検証することは重訳の多様な分類の可能性を示唆することになると考えられる。

また、少し違う話題に触れた時、村上は「バルザックを英語で読んだりとか、ドストエフスキーを英語で読んでいるとね、結構おもしろいんですね。不思議な味わいがある。」というコメントをした（村上・柴田, 2000: 84）。このコメントは重訳の潜在的な面白さを示唆したいのではないかと考えられる。

2.3 まとめ

以上重訳に関する先行研究について整理し、問題点を指摘した。翻訳研究では、重訳についての単独の研究はそれほど多くなく、定義・用語と分類は統一されていない。重訳の定義はあるものの、単純過ぎていたり、重訳の現象を述べることにとどまっていたりで、重訳の本質・特徴を明確化したものとは思われない。また、英語だけでも重訳の専門用語は多く存在しており、殆どは重訳の間接性に基づいているものであることが分かった。

重訳を巡る評価を、読者、出版社や研究者に分けて検討した。これを通じて、読者は重訳を十分に理解しないまま、ネガティブな印象を持っていることが明らかになった。その帰結として、出版社は文学翻訳本が重訳である事実を隠すことになる。先行研究では文学の重訳に対する評価は殆ど消極的批判であり、詳細な根拠と事例の研究が欠けていると考えられる。多くの批判は、文学翻訳では作者のオリジナリティーを大切にすべきだという一般読者の意見と共通している。つまり、重訳では文学作品の芸術性を低下させる可能性があるという見解と考えられる。また、それらの批判は一定の説得力を持つ一方、重訳現象がなぜ多く存在してきたかの原因と動機には目を向けずに、重訳の欠点についての詳細についても明らかにしていない。

したがって、重訳というテーマ自体は深く全体的に分析され評価されているとは言えない。そこで、以下の章で異文化・異言語間の理解に貢献してきた重訳の役割について詳述する。

第3章 重訳の背景：ベトナムにおける文学翻訳史と日本文学の位置

ーポリシステム理論の観点から

本章ではポリシステム理論 Polysystem theory を援用して、ベトナムの文学翻訳および日本文学翻訳の特殊な歴史を遡って、経過と特徴を概括する。さらに、ベトナムの翻訳文学システムにおける日本文学翻訳の位置づけと特徴について検討する。また、日本文学翻訳の背景の一部である日本文学の教育と研究の状況を概観する。

3.1 ベトナムの文学翻訳の概要

3.1.1 ポリシステム理論の運用

ポリシステム理論 (別名：多元システム理論)は、1970 年代にイーヴン＝ゾウハーにより提示されたもので、社会・文化規範という全体的なシステムとの関連のもとで、翻訳文学の役割を特定し評価する理論である。「ポリシステム」という概念はロシアフォルマリズムの思想に由来するもので、イーヴン＝ゾウハーのモデルでは、異質な要素から成り立つ階層的なシステムの集合体を意味する。この全体のシステムは、成分の各システムが支配的な位置をめぐる常態に競っているため、変化しながら展開することになる。同様に、社会文化の状況の中で、ある国の文学は、文学のジャンルや様式等という複数の小さいシステムから構成される階層的なポリシステムであると捉えられる。全体のシステムの中では、中心部にある「正統」の文学は、周辺にある他の文学ジャンルに影響を及ぼすとした (Even-Zohar, 1978/2000: 193-194)。その結果、翻訳文学の特徴とその役割も、大きな文学システムの中の位置づけによって変わるものである。Shuttleworth (2009/2013) はこのシステム概念が様々なレベルの現象に適用可能であると述べている。また、イーヴン＝ゾウハーによると、翻訳文学は多くの場合周辺的な位置にあるが、常に周辺的な位置にあるとは限らず、中心的な位置になり得ることもあるとし、以下の 3 つの状況を挙げている (Even-Zohar, loc.cit.)。

状況①：「若い」文学が成立途上の時。ポリシステムが完全に形成されていないため、新しい文学が外国文学の既存のモデルから多様なテキストタイプを導入することで始まる。

状況②：小国の文学が他の大国の文学に圧倒されているような時期は、その小国の文学がシステム内で「周辺の」で「弱い」地位にあり、翻訳文学が中心的位置を占めることになる。

状況③：文学の危機的時点、またはポリシステムの転換期。確立された古いモデルが持ちこたえられなくなって、翻訳を通して新しい思想が流入することになる。

本論文ではポリシステム理論を援用し、ベトナムにおける外国の翻訳文学、とりわけ日本文学翻訳の位置づけに影響を及ぼした要素を歴史的論理的に説明する。具体的に、ベトナムの事例に応用する際に、ベトナムの文学全体、及びベトナムの文学翻訳という2つのレベルを別の集合体のシステムとして捉えたい。以下、ベトナム文学全体のポリシステム、そしてベトナムの外国翻訳文学だけのポリシステムのそれぞれに、ポリシステム理論を適用し、日本文学翻訳に関わる歴史的出来事を具体的に論述する。

3.1.2 ベトナムの文学翻訳の歴史—ポリシステム理論から

まず、ベトナムの文学全体を一つのポリシステムと捉えれば、そこにはベトナム人作家が書いたベトナム文学の各ジャンルやベトナム語に訳された外国文学がある。その中での各成分、例えば外国文学翻訳やベトナム語の児童文学の間には相互的な関係があり、中心部を占める正統な文学ジャンルからの影響を受ける。本節はベトナムの文学の翻訳史を概括する。同時に、イーヴン＝ゾウハーが指摘した翻訳文学が中心的な位置を占め得る3つケースをベトナムの翻訳史への適用を試みる。

ベトナムにおける文学翻訳の歴史は、ベトナムの社会変動・文化交流の歩みと緊密な関係がある。ホアン Hoàng (1999) は「ベトナムの地理的な状況から、ベトナムにおける翻訳は歴史の経過と変動と共に変化してきた」と指摘し、ベトナムにおける文学翻訳の歴史を概観している。また、グエン・ヴァン・ヒュー Nguyễn Văn Hiệu (2007) は、ベトナム文学翻訳の歴史を文化的意識と結び付けた。アジア大陸の東南に位置し、海上交通の要所であるベトナムという国は、様々な経済・文化の交流が行なわれた場となった。その反面、外国の軍事勢力から侵略の危機にさらされた国でもあった。そのような特殊な地政学的な条

件で、翻訳の歴史は如何に展開してきたか。本節では Hoàng (1999) に基づいて、ベトナム翻訳史の概要を文学翻訳、特に日本文学の翻訳に関わる出来事を中心として簡潔に述べ、その特徴について考えてみる。

A. 中国の北方封建国家に服従していた時期における翻訳文学（紀元前 1 世紀～937 年）

紀元前 1 世紀まで遡ると、古代のベトナム人は中国の南方地域で生活し始め、文字はもちろん、文明そのものがまだ形成されていなかった。その後すぐに中華帝国の軍事的侵略を受け、政治・経済・文化的に従属する時期に入った。中国の封建王朝に服従していた 1000 年の間は（紀元前 1 世紀～937 年）漢字、社会の仕組み、論理や宗教の思考等の漢民族文化が、最初は「同化政策」として強制的にベトナムの社会に導入された。漢字を用いる際に、ベトナム語はオーストロアジア語派のモン・クメール系言語の中の一派であり、中国語とは違う系統に属しているため、「越音読法」、すなわちベトナム語の音で漢字を「翻訳」する方法を使わねばならなかった。

漢字の音・意味の面は徐々に越化され、ベトナムの漢語、いわゆる「漢越語」¹⁴を完全に形成して、外来文化の要素の「翻訳」が大きな機能を果たしたと考えられる。それ以前は口承文芸しか存在しなかったが、中国の漢詩・漢文を模範にした漢字で書かれるベトナム文学の作品が徐々に現れてきた。『禪苑集英語録（Thiền Uyển Tập Anh Ngữ Lục）』というベトナムの仏教史には、6 世紀頃にベトナムにおける仏教の經典の翻訳があったとの記述がある。恐らくこれはベトナムの最も古い時代の翻訳であると考えられる。唐代以降、仏教の經書は主に中国からベトナムに導入され、漢越語に翻訳口述され、より多くの民衆に普及した。この時期は「若い」文学が成立途上にあったため、イーヴン＝ゾウハーの状況①に対応すると言えよう。

B. 独立政権を持ち、自立していた時期における翻訳文学（938 年～19 世紀半ば）

この段階では、中国の政治的支配に抵抗しながらも、生まれたばかりのベトナムの学問・

¹⁴ 漢越語とは中国の漢語の要素を借用し、ベトナム語の発音で読まれた語彙であると定義される。現代のベトナム語の語彙の約 7 割を占めている。例：「越南」は漢越語の読み方にすれば＝[viet] +[na:m] (Việt Nam)。

文学が大国である中国の強力な影響を受け続けていた。938 年にベトナムは中国からの自立を果たし、属明期（1406 年- 1428 年）を除き、19 世紀の半ばまでかなり長期的な独立政権を維持することができた。この自立時期には、国家・民族の意識が高まり、中国の政治的支配に抵抗しながら、中華文化を積極的に受け入れるという傾向が主流であった。王朝の官僚や知識層は、中国の古典の漢詩と漢文を読み、民族の文学の基礎を築いたと言える (Nguyễn Văn Hoàn, 2007)。

一方、自国の言語を維持する努力として、13 世紀になって、国字のチューノム *chữ Nôm*（「字喃」）¹⁵が成立した。中国の文学作品をチューノムに翻訳することが勧められ、ベトナム人の作家によるチューノムで書かれる著作も増加したが、主題や書き方には中国文学の影響が依然として大きかった。19 世紀前半にグエン・ズーが、中国の通俗小説『金雲翹伝』から翻訳したチューノムでの長編叙事詩である『キュウ物語』（別名：金雲翹）はベトナム文学の金字塔と言われている¹⁶。しかし、王朝の交替等という社会的状況の変化もあり、結局チューノムは庶民に広く普及せず、漢字を完全に置き換えることができなかった。全体的には 20 世紀の初頭まで、漢字・漢文が引き続き広く正式に用いられていた。この時期は小国ベトナムの文学がまだ弱く、大国中国の文学に圧倒されており、イーヴン＝ゾウハーの状況②に対応すると言えよう。

C. 植民地時期・西洋文明文化と接する初期における翻訳文学（1867 年～1930 年）

1867 年に鎖国の政策を進めた最後のグエン王朝がフランス軍に敗北した結果、ベトナムはフランスの植民地になった。フランスに支配された時期、フランス語の教育がベトナムで強制的に導入され、フランスの文化や報道が普及した。これはベトナムの社会が西洋文明・文化に接し始めたきっかけともなった。長い間中国の影響を受けていたベトナムの社会は、完全に異質な西欧文化と接し始め、「ショック」を受けざるを得なかった。同時に文

¹⁵ 漢字の知識を使って、ベトナム語の民衆の話し言葉や細かいニュアンスを表現するため作られた文字である。その起源は不明だが、多くの資料によると「喃越語」は 10 世紀から「漢越語」と共に、存在していて、13 世紀に字喃を使った詩が現れたという。例：「チューノム字」という言葉はチューノムで書けば「字字喃」であり、クオックグー字にすれば「*Chữ Nôm*」になる。「喃」＝「口」＋「南」は南（国）の人の（話す）言葉だという意味である。歴史上では、胡李聲執政期間と、西山（タイソン）朝の阮恵（グエン・フエ）の時期に漢字・チューノム混じり表記のベトナム語が中央の公文書に正式言語として採用された。

¹⁶ ベトナム阮朝の文人グエン・ズー（阮攸。1765～1820）が、『金雲翹伝』（清・青心才人編述）から翻案した 3,254 行の長編叙事詩である。

字についても大きな移行があり、先祖が信頼して使っていた文字の「漢文」か、或いは西洋の響き強い新しい「クオックグー字」 chữ Quốc ngữ（国語字＝ローマ字表記）を選ぶのかという選択を迫られる危機的時点であった。

クオックグー字は宣教・植民地化の一つの政策として導入され始めたが、その後クオックグー字の有効性が知識層に理解され、短期間のうちにベトナム全土に普及することになった (Nguyễn Văn Hiệu, 2007)。このクオックグー字の勝利は、後のベトナムの文化・文学の近代化を西洋的に進める時期を開いたと言えるだろう。その後、不便性と非効率性を理由に漢字とチューノムは排除されるようになった。

それに加えて、Hiệu は文学翻訳と文化背景の関係を肯定する立場から、1900 年代までのベトナムの文学翻訳を概括した (Nguyễn Văn Hiệu, loc.cit.)。19 世紀末まで、漢字とベトナム語の独自の字喃の書籍をクオックグー字に「翻訳」した。次には、「東西文化の混合」が進んだ時期という 1930 年代に、「開民智、振民氣、厚民生」¹⁷の方針が掲げられた。Hoàng (1999) は 20 世紀初頭に翻訳の領域での先駆者ファン・コイ Phan Khôi¹⁸を引用して、次のように述べている。

「この国の文化と文学を確立するためには、やるべき仕事は三つある。第一は国語の話し言葉・書き言葉、文章構造のルールを研究して、体系化して、本を作ること。第二はローマ字表記のクオックグー字を早く普及させて、同胞に知識をもたらすために、話し言葉で本を書くこと。第三は古今を問わず各国の本を出来る限り多く翻訳したら良い...何故なら、わが国には、わが言葉で書かれる本は何もないくらい少ないから...」¹⁹

その運動をきっかけとして、洋学の知識者は中国の新書²⁰とフランス語の書籍をはじめ、外国作品をクオックグー字に翻訳し、それらの書籍が出版され始めた。この時期は、新しい西洋文学の流入による転換期であり、イーヴン＝ゾウハーの状況③に対応するのである。

¹⁷ 1906 年にベトナムにおいてファン・チュー・チンを始め、知識層によって発動された維新運動の標語である。この運動は伝統的にベトナムを支配してきた儒教からの脱却を目標として、その中で主に近代化や西欧思想の普及、民族の文明開化、社会の全面的改革、クオックグー文字による教育の奨励、商・工業及びその技術の復活が唱えられた。

¹⁸ ファン・コイ (1887－1960) は魯迅等の中国作家の著作やスターリンの『マルクス主義と言語学』を初めてベトナム語に訳した。

¹⁹ Phụ nữ Tân văn 雑誌 (1930)

²⁰ ベトナム語での用語。西洋の文明や文化すなわち「新しい学」の書籍のことである。

D. 独立運動・戦争の時期における翻訳文学（1930 年～1975 年）

1930 年代に入ってから、ようやくベトナムの現代文学が成立したが、外国翻訳文学は、引き続きベトナム人の精神生活の大切な一部を担った。

20 世紀以前のベトナムには、封建的な社会の悪い結果としての低い識字率（漢字が読める人が少ないこと）、及び経済的な理由で、本当の読者という階級がなかったと言われている²¹。しかし、20 世紀の初頭からフランス保護政権のクオックグー字の普及政策の下で、識字率の上昇や印刷業の発展等により、ベトナムの近現代文学の伝統が築かれ始めたのである。結果として、1930 年以降、初めて文学読者の問題が本格的に取り上げられるようになった。したがって、ベトナム人が翻訳文学を読む時、内容と主題に対してどのようなこだわりがあるかが注目されるようになり、出版社はどこの国の文学や作家の作品を選んで、読者に依頼するかを慎重に判断した。

1930 年から 1945 年にかけて、新学²²の知識人の読者は都市の文化や西洋風の新しい生活様式が反映される新しい文学作品を要求した。フランスや旧ソ連（ロシア）等の文学はベトナムの作家たちの一つの参考資料になったようである。また、作家たちの中には、翻訳した人も多い。1945 年に第二次世界大戦が終わると、ベトナムはこの年にフランスの植民地統治から開放された。1945 年 9 月 2 日にベトナムの北部でベトナム民主共和国²³が誕生した。それ以降、マルクスとレーニンの基本的な理論書やプロレタリア文学作品が多く翻訳された。対フランスと対アメリカの戦争から 1980 年代まで（1946 年～1987 年）は、ベトナム、特にベトナム北部では国营出版社が圧倒的に優勢の位置を占めた。計画的な選択によって、当時ベトナムの政治に合うイデオロギーや、社会主義の思考を反映する作品や、社会主義国の作家の作品しか翻訳出版されないという時期でもあった。殆どの翻訳者たちは軍隊か革命派に属する作家や知識人である。同じく社会主義国の旧ソ連や東欧の国々の文学が特に重視され、主にベトナムの北部の読者に人気が高かった。他には、世界

²¹ Cf. Hoài Thanh (1942)

²² 漢学や儒教等の古い学問と区別して、西欧学という意味である。

²³ ベトナムの「8 月の革命」の勝利の後

の知られていない文化・文学を紹介するために、古代ギリシア文学、イギリス文学、アメリカ、フランスその他南米、アジア、アフリカの文学作品も多少は翻訳されたようである²⁴。

その後、ベトナムは冷戦による東西分断の争いに巻き込まれた。ディエンビエンフーの戦い²⁵で勝利を得た後、1954年のジュネーブ協定の調印によって、北緯17度線を境にし、ベトナムは南北に分断された。そのため、ベトナムの北部と南部はそれぞれ異なる政治システムによって支配され、文化・文学の発展も異なる道を辿った。特にベトナム南北両部の運営方法と出版界の実態には色々な相違点があった。北部では国営の出版社が主であるため、選択される文学翻訳も計画的に、厳密に検閲された。それに対して、南部では私営の出版社が多くあり、より緩やかな検閲の制度であったといえるだろう。

E. 国家統一及びドイ・モイ時期の翻訳文学（1975年以降）

ベトナムは1975年に統一され、完全な独立を得た。1975年から1980年代前半までは、ベトナムは国内経済をはじめ、国際関係等様々な困難があった。長年の戦争の余波を受け、産業が少なく弱体化していたため、復興には主に旧ソ連の援助に頼った。その状況はドイ・モイ Đổi mới (1986) という維新政策を促した。ドイ・モイ以降、ベトナムは経済・社会・文化的な面で様々な成果を上げ、文芸においても大きな変化があった。海外との文化交流の自由化・多様化に伴い、文学翻訳は、量・質、思考の広さ・深さの面で大いに進展した。世界の古典の傑作をはじめ、それ以前の時期に「タブー」²⁶とされたテーマの作品も、少しずつ翻訳され、読者に紹介された。1975年から1988年までは一時的に文学翻訳の盛んな時期であった。しかし、ベトナム全国出版の会議(1989年)以降、ベトナムの出版業は、それまでの国からの援助がなくなり、自立を余儀なくさせられたため危機的状况に陥った。紙の価格上昇や市場の変動等により、多くの出版社が廃業していった。文学翻訳に対する読者の態度も変わって、それまでの熱気も冷めることになったという。結果としては、ロ

²⁴ 正確な統計の記載がない。

²⁵ 1954年3月から5月にかけてベトナム北西部のディエンビエンフー（Điện Biên Phủ）で起こった、抗フランス戦争中最大の戦闘。ベトナム軍とフランス軍合わせて約1万人の戦死者を出した。同戦争の大きな転機となり、フランスはベトナム撤退を余儀なくされることになる。

²⁶ 社会主義に対する批判等の政治に関わる作品や性的表現が多く、不道德だと思われる作品を意味する。

シア文学は徐々に消えていき、その分で欧米文学の人気の高まって多く翻訳されることになった。イギリスの探偵文学、フランスとアメリカのベストセラー等が多く翻訳されることになった (Hoàng, 1999: op.cit.)。

1989 年から現在にかけて、文学翻訳の環境が徐々に改善され、安定的な発展期に入った。出版社は読者の好みや要求により多く応えることを重視するようになった。

ベトナムは 2002 年に文学的及び美術的著作物の保護に関するベルヌ条約²⁷に加盟した。ベルヌ条約によると、外国人の著作物（文学作品等）を保護する義務、著作権の表示等が規定されている。それが契機となり、翻訳本の著作権に対する関心が高まり、同時に翻訳のプロセス・評価に注目が集まった。ベトナム出版局の統計によると、ベルヌ条約に加盟して以降、文学翻訳の出版は再び盛んになり、国内文学を圧倒する傾向が現われた²⁸。各出版社の間で、外国のベストセラー作品の著作権を獲得する競争が激しさを増している。また、この時期はベトナムにインターネットの普及ブームが起きた時期でもある。したがって、外国文学の本の広告・PR 作業が促進されつつある。

3.2 ベトナムの文学翻訳の特徴

(1) 外来文化の広い影響

前述した通り、ベトナム文化は独自性を持てなかった千年間に成長はしたものの、中国文化の影響は深く根を張っていた。ベトナムの初期翻訳文学は明らかに中華文化を吸収する経緯と密接な関係がある。政治的に常に独立の立場を肯定し続けていたベトナム人は、文化面では中国と繋がりを実感している。近代化の時期に入り、ベトナムはフランスの植民地になり、西欧文化・思想の要素を受け入れ始めた。その後、1975 年まで起きた戦争、及び特定の外交関係の下で、ロシア語及び英語は中国語、フランス語に次いで普及した言語となった。それ故、それらの言語の文学が多く翻訳されたのは、当然の帰結であろう。

繰り返すことになるが、20 世紀初頭以前のベトナムにおける文学翻訳の特徴は、ベトナム

²⁷ 「ベルヌ条約は、一八八六年（明治十九年）にスイスのベルヌで著作権を国際的に保護し合うためにヨーロッパ諸国を中心として創設された条約で、著作権の発生に登録等の手続を必要としない無方式主義を条約上の原則としています」。(日本文化庁の HP : http://chosakuken.bunka.go.jp/naruhodo/tpx_detail.asp により、2014 年 10 月 20 日閲覧)

²⁸ Cf. <http://dichthuat.pro.vn/noi-buon-van-hoc-dich-thuat/>を参照、2013 年 9 月 1 日最終閲覧。

ムと関係があった国の文化・言語に深い影響を受けていたということである。歴史的時期によって、中国文学、フランス文学、あるいはロシア文学、さらに英米文学が翻訳文学のポリシステムを中心部にあつたと言えよう。

(2) 文学システムにおける重要な役割

上述のように、ベトナムの翻訳文学の変換と過程を5つの時期に分けてみると、ポリシステム理論でいう翻訳文学が中心位置を占める3つのケースが、ベトナムの1930年代までの時期に全て当てはまることが分かった。つまり、ベトナム社会において、特に20世紀初頭までの時期に翻訳は非常に重要な役割を演じてきたということである。ベトナムの翻訳史は、植民地化や戦争という歴史的・文化的要因の影響を強く受けたが、このことはベトナムに限られた唯一の現象ではなく、小国の文化の成り立ち・開花の過程に共通する特徴と考えられる。

ベトナムにおいて、20世紀の半ばまで翻訳文学は文学ポリシステムの中心部を占め、一番重要な部分であることも確認できる。一つの理由はベトナムの文化的要素にあると思われる。前述したように、儒教思想の影響の下で、漢文・漢詩は、学問の規範になった。「文」に対するベトナム人の認識では、「文化」、「文明」、「文学」等は「漢字」と当然の関連があるという考えが浸透していた。さらに、詩を作ることが科挙制度の試験の科目に組み込まれ、文学的な仕事は社会的・政治的な地位の上昇、立身出世と深く結びついていた。それ故、ベトナムの封建王朝の官僚や儒学者は、殆ど文学者であつた。近代化の時期、古い漢学の知識層は「文（文学）」を道具として、全体社会の改革を行うと呼びかけた。次に、フランスとアメリカとの戦争の時期も、文芸・文学は「戦う武器」と定義され、作家・詩人も「戦士」であり、祖国を守る事業に貢献したとされる。平和を得た1975年から現在にかけて、文学に関わる本は翻訳書籍の出版の大きな割合を占めている。

勿論、文学を味わうことは普遍性があると考えられるが、ベトナム人の「文学」に対する特異な意識は、「何故この国の翻訳の中で、文学翻訳が主流であり得たのか」と言う問いの答えとも言えるだろう。

(3) 政治的背景との関わり

ベトナムにおける文学翻訳のジャンルの選択は政治的出来事に大きく支配された。ベトナムの歴史では、社会主義政権と親アメリカ政権が分断されるという特殊な事情があった。そのため、その読者の興味・選択が、逆に出版社側に支配された時期もあった。例えば、対フランスと対アメリカの戦争（1955 年）から 1989 年までの時期には、社会主義のベトナム北部では国营出版社が圧倒的に優勢な位置を占めた。具体的には、計画的な選択によって、当時ベトナムの政治に合うイデオロギーや、社会主義の思考を反映する作品や、社会主義国の作家の作品しか翻訳出版されないという時期でもあった。この時期に社会主義国である旧ソ連の国々をはじめ、東ヨーロッパ（チェコスロバキア、ポーランド等）、ラテンアメリカ等の文学作品やプロテリア文学の作品が優先され、多く翻訳された。それに加えて、外国文学の翻訳者には解放軍の小説家、詩人が多い。しかし、その時期が終わると、政治的な理由で選ばれたような作品はベトナムの本の市場から徐々に消えていった²⁹。

3.3 日本文学翻訳の位置づけ—ポリシステム理論から

翻訳文学が長い歴史のなかで重要な役割を演じてきたベトナムにおいて、日本文学の翻訳はいかに展開していったのか。それを明確にするために、ポリシステム理論の立場から、日本文学翻訳がベトナムの大きな文学システムの中で、正統の翻訳文学に対して、どのような位置づけにあったかを見ていく。この節では、改めてポリシステム理論を用いて、重要な節目の各時期において、日本文学翻訳の位置づけとその特徴について考察する。

ベトナムの外国翻訳文学を一つの集合体のシステムと見れば、そのシステムは、中国文学、欧米文学、ロシア文学、日本文学等から形成されと考えられる。その大きなシステムの中心部に位置し、社会的規範の役割を演じて、他の翻訳文学のジャンルに影響を及ぼす「正統」の翻訳文学は、時代や歴史的背景によって変化していく。ベトナムの翻訳文学のシステムで中心部に位置し得る外国翻訳文学は、19 世紀の直前までは文化的影響が大きかった中国文学であり、植民地時代に主流になったのはフランス語、英語等の西洋文学へと変化していったのである。これらも、ベトナムとの文化的・言語的交流の歴史と緊密な

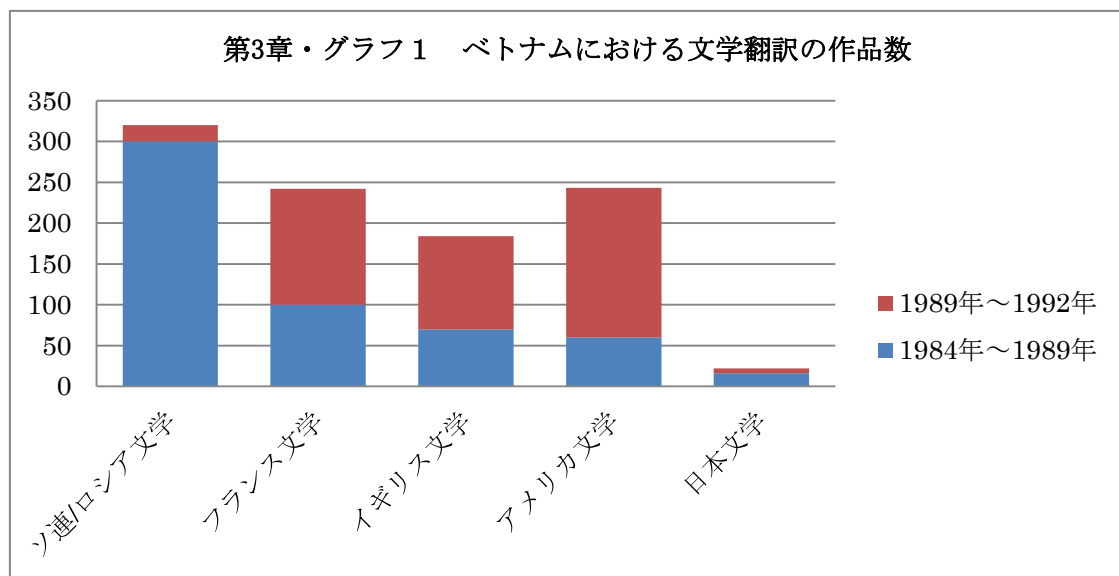
²⁹ Cf. Hoàng Thúy Toàn (1999)

つながりがある言語・文化であると思われる。

それに対して、ベトナムと日本の交流は早い段階に始まったものの、安定した関係が築かれるには時間がかかったと言える。古くは 8 世紀頃に、阿倍仲麻呂の船がベトナム中部に漂着したという記録があり、この時期に両国の交流が始まったと言われている。16 世紀から 17 世紀初頭にかけて、日・越の貿易関係が一時盛んになったが、徳川幕府の鎖国令により終了した。20 世紀の初頭に明治維新をはじめとして、特異な国民気質をもった日本に憧れ、ベトナムの反仏独立民族運動いわゆる「東遊運動」^{ドンズー} (1906~1909) ³⁰が盛んになった。しかし、その後、戦争等により日本との交流は中断し、しばらく進展しなかった。このようにベトナムと日本の関係には阻害要因が多く存在し、幾度か中断された。その結果、日本の言語・文化の研究はあまり進展せず、日本語の翻訳者は非常に少なかった。以上述べた歴史的背景はベトナムにおける文学翻訳の事情にも影響を及ぼしたと見受けられる。ベトナム語に翻訳された日本文学は少数であり、周辺的なジャンルに留まった。

その事実、翻訳の作品数に現れている。1970 年代以前の文学翻訳の作品数の詳しい記述はないが、Hoàng (1999: 27-30) によると、グラフ 1 に示すように、1984 年～1989 年の間、ソ連文学は 300 作品（タイトル）、フランス文学は約 100 作品、イギリス文学は 70 作品、アメリカ文学は 60 作品が出版された。それに対して、日本文学が出版されたのは 16 作品のみであり、まだ「紹介されたばかりの段階」にあったという。さらに、1989 年から 1992 年にかけて、文学翻訳の統計の 837 冊の中で、アメリカ文学は 183 作品、フランス文学 142 作品、イギリス文学は 114 作品、その他中国文学は 41 作品、ソ連・ロシア文学は 20 作品であったが、日本文学はわずか 6 作品しかなかった。

³⁰ 第 4 章で詳述。



それに加えて、Hoàng & Đoàn (2002)の中には業績が大きい代表的な267人の翻訳者の情報、業績そして（可能な限り）その翻訳者の感想や意見が記録されている。その中で、日本文学を翻訳した人は10人ぐらいしかいないと見受けられる。すなわちベトナムでは、中国語・フランス語・ロシア語・英語の文献の翻訳者が最も多く、日本文学の翻訳者は非常に少ないことが分かる。

一方、Hà (2003: 15-16)によれば、1945年から2001年にかけて、媒介言語を介した日本文学のベトナム語訳の数が増えることによって、文学システムにおける日本文学翻訳の位置は上がっていった。日本文学は翻訳の伝統が長い中国文学、フランス文学、英文学、ロシア文学に比べれば数は少ないが、それらに次ぐ地位にあり、南米や北欧、アフリカ地域の文学と比べれば、かなり作品数は多くなっている (ibid., 16)。

即ち、ベトナムの翻訳文学のシステムにおいて周辺的な位置にあり続ける日本文学の翻訳は、「中心部」を占めるジャンル（時代によって、中国文学や仏・英語文学が交替してきた）に支配され、翻訳方法に規範的にも内容的にも影響を及ぼされた。そして、特筆すべき特徴として、20世紀末までのベトナムでは、日本文学の受容は重訳に大きく依存したと言えるだろう。また、ベトナムにおける日本文学の重訳は、用いた媒介言語や、時代ごとの政治や思想の影響により、翻訳する作品に偏りが出たこと等、特殊な展開をはっきりと

示している。その偏りについては次章で詳述する。

3.4 まとめ

ここまで説明したように、ポリシステムを援用することで、ベトナム史では初期から1930年まで、文学のシステムにおいて、翻訳文学は長期にわたり中心的な位置を占め、大きな役割を果たしたことが確認できた。その中で、中国の北方封建国家に服従していた時期（紀元前1世紀～937年）、並びに独立政権を持ち、自立していた時期（938年～19世紀半ば）においては、漢字の公的な使用と共に中国文化・文学の影響力が非常に強かった。さらに、植民地時期・西洋文明文化と接する初期（1867年～1930年）の段階でクオックグー字の誕生の後、フランス文化・文学をはじめ、欧米文化・文学のインパクトが広がった。この長期の歴史段階においては、文学システムにおける翻訳文学の位置が中心を占めるといふ、イーヴン＝ゾウハーの指摘した3つの状況の全てが該当する。こうした背景は、翻訳文学の一つである日本文学翻訳にも必然的に多様な影響を与えたと思われる。

さらに、ベトナムにおいては、翻訳された日本文学は他の外国文学に比べ、未だかなり劣位にある。ポリシステム理論の観点から見ると、日本文学翻訳はベトナムの翻訳文学のシステムにおいて周辺的な位置にあり続けており、「中心部」を占める要素（時代によって、中国文学や仏・英語文学が交替してきた）に支配され、影響を及ぼされたことが明らかになった。

戦争や政治的イデオロギーの違い等歴史問題によって、ベトナムと日本の文化・言語交流が何度か中断され、日本語の翻訳者・専門家が著しく不足していることが日本文学の普及度が低い理由の一つであると考えられる。現在においても、欧米文学や中国文学等他の外国文学に比べると、ベトナムにおける日本文学翻訳の出版部数はまだ比較的少なく、かなり劣位にあるという状況は否めない。

第4章 ベトナムにおける日本文学の重訳：変遷及び特徴

前章で述べた通り、歴史的出来事はベトナムの文学と翻訳に大きな影響を及ぼした。日本翻訳文学も、ベトナムにおける文学システムの一つとして、その時代の変動に関わっている。本章は時代を遡り、ベトナムにおける日本文学翻訳・重訳の歴史の変遷を4つの段階に分けて辿る。それぞれの段階に、ベトナム翻訳史に関わる出来事を中心として述べ、ベトナムにおける日本文学翻訳・重訳の背景と特徴を明確にする。また、ベトナム人の日本文学研究・教育レベルは日本文学の作品を訳す動機につながっているため、日本文学の受容を理解するために日本文学の研究・教育の現状にも触れる。その中で、翻訳作品の一覧および翻訳者の前書き等に基づいて日本文学の作品がどのように選定されたか、またどの言語から翻訳・重訳されたかに焦点を当て、考察していく。本節では、外国文学研究雑誌、翻訳書等に掲載されている翻訳者によるコメント、前書き・後書きを手がかりに日本文学の翻訳者の翻訳観や意見を整理する。

4.1 ベトナムにおける日本文学の社会背景

4.1.1 日本語教育と翻訳者の状況

ある国の文学の翻訳はその国の言葉の教育と緊密な関係がある。例えば、ベトナムにおける日本文学の翻訳では、重訳が主流で、直接日本語から訳された本は少ない事実は日本語教育の状況から理解できよう。その日本語教育と翻訳の状況は以下の通りである。

第3章で述べたように、1990年以前のベトナム・日本の関係は非常に薄く、変動が多かった。その時代背景に影響を受け、ベトナムにおける日本語教育もかなり遅々とした展開であった。1960－1970年代、主に南ベトナムから、日本へ留学する若者は多く現れた³¹。北部では、日本語教育はハノイ外国語大学において、1973年にスタートした。20世紀の最後の10年から現在にかけて、ベトナムと日本の経済・政治・文化的な関係が飛躍的に発展するにつれて、日本語・日本文化の知識を提供する大学が急速に増加している。貿易大学（1993年から）や、ホーチミン市の人文社会科学大学（1994年から）等国立大学から、私

³¹ 日本政府の奨学金受給者と自費留学者がいて、一番多い時期は1000人に至ったと言われている。

立大学まで日本学科が開設されている。その他、全国で約 10 の公立大学と私立大学でも日本語学科を開設した。加えて、日本語の学習者の要求に応え、ホーチミン市、ハノイ市やダナン市では多くの外国語専門学校も日本語学科を開設している。ジャパン・ファウンデーションの海外日本語教育機関調査結果によると、2012 年時点のベトナムにおける、日本語学習者は約 5 万人、機関数は 180 という³²。

これは日本語ができる人材、及び日本語の通訳翻訳者が増加している一因とも考えられる。しかし、日本文学の翻訳者はまだ少ないというのが現実である。

従来の日本文学の翻訳者はどのような人物像であったろうか。前の時代の翻訳者は、業績が高く Hoàng & Đoàn (2002)で紹介された翻訳者は Phạm Mạnh Hùng , Đỗ Khánh Hoan, Thái Bá Tân, Nhật Chiêu 等がいる。このうち、殆どは元々フランス語、英語、ロシア語の文学の研究者・評論家、教師、翻訳者・編集者でもある。日本語が出来ないにもかかわらず、これらの媒介言語を介して、日本文学の作品や研究書を訳した彼らは、ベトナムにおける日本文学の基礎を築いてきた人たちと言える。2000 年代に入ってから、日本文学を翻訳し始めた訳者には Hạnh Liên, Dương Tường、Trần Tiền Cao Đăng、Lương Việt Dũng 等がいる。これらの翻訳者は主に英語とフランス語文学の分野において有名で権威の高い訳者たちである。

一方、日本語からの直接翻訳者では Phạm Vũ Thịnh, Nam Trân, Văn Lang Thất Phương 等という 1960 年代に日本に留学していたベトナム人たちがいる。彼らは海外に在住しており、様々な分野で活躍しながらも、日本の古典文学を中心に訳して、翻訳をウェブサイト³³に掲載したり、自費で出版したりしている。それに加えて、大学で系統的な日本語教育を受けた若い世代の翻訳者たちの代表は Cao Việt Dũng (ペンネーム : Uyên Thiễm), Trương Thuý Lan (ペンネーム : Mộc Miên), Hoàng Long 等がおり、現在の日本文学の翻訳の分野で活躍している。

³² 『2012 年度 日本語教育機関調査 結果概要抜粋』、
https://www.jpfr.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2012/2012_s_excerpt_j.pdf、2015 年 9 月 1 日最終閲覧日。

³³ <http://ertc.com> や <http://chimviet.free.fr/vannhat/Avannhat.htm> , 2012 年 9 月 10 日最終閲覧日。

4.1.2 日本文学の先行研究

現在までのベトナムにおける日本文学に関する研究書は未だわずかな数に留まる。1990年以前は日本文学の翻訳と研究論文は文学専門の雑誌でしか読めなかった。殆どの研究資料は主にロシア語と英語から訳したものである。2000年代以降では大学の教科書や書籍の形式等で一般に紹介されるようになった。日本文学に関する研究書は、外国文学専門の雑誌のエッセイ投稿等、ごく限られた範囲で見られる。その中で、2000年にニャット・チェウ *Nhật Chiêu* による *Văn học Nhật Bản từ khởi thủy đến 1868* (『起源から 1868 年までの日本文学』) という本が出版された。それは日本語、英語とフランス語の様々な先行研究資料に基づいて、日本文学の古代から近代の前までの長い歴史を概観し、主な作家と作品を紹介したものである。この研究書は、大学の文学部と、日本学科の日本文学で用いられる教科書や教材として用いられており、日本文学や翻訳作品に対する多くのベトナム人の興味を喚起したと思われる。他にも、チェウは日本の文学と文芸を紹介する専門書である *Nhật Bản trong chiếc gương soi* (『鏡の中の日本』) (1994)、*Thơ ca Nhật Bản* (『日本の詩』) (1998) 等を執筆している。さらに、チェウはベトナム国家大学・ホーチミン人文社会科学大学・文学部の日本文学担当講師であり、教材を作る傍ら、日本文学の短歌、俳句をはじめ多くの特色ある作品を翻訳し、作家と日本文学の事情についても解説している。最初は主に英語やフランス語の研究資料と翻訳を用い、徐々に日本語の原作も参照するようになった。ベトナムにおける日本文学の専門家の第一人者と見なされている。

2000 年以降、ベトナムにおける日本文化・文学の普及のために、日本の国際交流基金 (The Japan Foundation) は、日本文学の研究・翻訳のプロジェクトを支援しはじめた。その助成を受けて幾つかの研究が行なわれ、成果をあげた。そのうち、Hà (2003) と Nguyễn (ed.) (2008) を紹介する。

Hà (2003) によれば、ベトナムにおける日本文学の受容は、早い段階では中国語 (漢語と現代中国語を含む) とフランス語を介して行われ、次の段階はロシア語や英語を介した重訳を経て、ようやく日本語から直接翻訳されるようになったと述べている。そのため、様々な言語の重訳を通してベトナムに受け入れられた日本文学の特徴は、多種多様で統一

性がないと指摘している。Nguyễn (ed.) (2008) *Văn học Nhật Bản ở Việt Nam* (『ベトナムにおける日本文学』)、特に分担執筆者であるニャット・チェウによる第二章「日本文学の翻訳」では、ベトナムにおいて日本の文学作品が翻訳・出版されてきた実情についてその概要が述べられている。この本も15世紀から日・越の貿易関係が始まった時に遡って、日本の明治維新とベトナム人留学を進める「ドンズー運動」³⁴との関連を説明した。ベトナムにおける日本文学の翻訳について Xuân は3つの段階(20世紀の初頭～1945年、1945年～1975年、1975年～現在)に分れると主張した (Nguyễn ed., op.cit.)。

また、日本の立命館大学のシンポジウムで発表した「ベトナムにおける日本文学の翻訳・出版・教育・研究」という論考で、Tran (2010) は、20世紀初頭から現在に至るまでのベトナムにおける日本文学翻訳の節目の年について述べている。「文芸・文化的な立場から選ばれた文学作品というよりも、当時の民主主義の思想を宣伝する目的で選択され、紹介された」と評価した。Tran も日本文学に関する研究の状況、及び高校・大学での日本文学教育の現状に簡潔に言及した (Tran, ibid.)。

しかし、上に述べた研究は、日本文学の翻訳をベトナムの外国文学の翻訳史において、どのように関係づけるべきか、及びどのような位置を占めるかということについて詳しい記述に欠けており、解説に物足りなさを感じる。また、ベトナムにおける日本文学の書籍の一覧を作成するにあたっては、Hà (loc.cit.) や Nguyễn (ed.) (loc.cit) では単行本としての出版物は約60作品について報告がある。しかし、重訳版の情報や出版年等の情報が抜けているものが多く、最近の情報は更新されていないようである。

さらに、ベトナムの歴史的時点に対応する日本文学作品の翻訳の歩みや、読者の受容のあり方については触れられていない。前述の研究は全て文学を教える研究者の立場から見た翻訳のため、主に翻訳に関する歴史的事象の記述と、ベトナムにおける日本文学の発展の経緯について大まかな記述や解説しか挙げられていないため、主観的な印象を与える。

以上のように、現時点でベトナムでは日本文学について体系的にまとめた研究はまだ少

³⁴1883年以来、フランスの保護国であったベトナムでは日露戦争に刺激され、1904年ごろ、ファン・ボイ・チャウらによって反仏運動の結社が組織された。

ない。また、上述の先行研究では、殆ど事例の分析は行わずに、或いは作品の引用に留まっているため、論拠の説得力には弱さが見られる。加えて、ベトナムにおける日本文学の著作が、今日までどのくらい翻訳されているかという具体的な統計もなく、また随所に作品名が挙げられるものの、出版や日本語原文の情報も不十分である。

4.1.3 日本文学の重訳の時代区分

この節では、先行研究を踏まえ、日本文学の重訳の歴史を4つの時期に分け論述する。先述のように、日本文学作品の翻訳の歩みについては、ベトナムの歴史および文化的背景の変動と緊密な関係があることから、Nguyễn (ed.) (ibid.) は、1945 年以前、1945 年～1975 年、1975 年～現在という3段階の区分を主張している。本論文では、グエン (2013) に基づいて、その区分に加えてベトナムの出版界に大きな変化があった2002 年³⁵を節目とし、その年から現在にかけてというさらに一つの段階を補充し、歴史的に4つの主な段階に分けて考察する。また、初めて日本文学のベトナム語訳ができた1913 年も区分に入れ、重なった節目を除き、①1913 年～1944 年、②1945 年～1974 年、③1975 年～2001 年、④2002 年～現在とする。

ベトナムにおける日本文学の受容は、Hà (loc.cit.) によれば、早い段階では中国語（漢語と現代中国語を含む）とフランス語を介して行われたという。次の段階はロシア語や英語を介した重訳を経て、日本語から直接翻訳されるようになった。

また、ベトナムにおける日本文学の翻訳出版状況について、先行研究の成果や様々な資料を調査してまとめたものを、単行本の作品一覧として作成した（巻末添付資料参照）。Hà (ibid.) や Nguyễn (ed.) (2008) の先行研究では約60 作品について報告があるため、それを参考にしたが、重訳版の情報や出版年等の情報が抜けているものは、可能な限り補充した。また出版社のインターネットのサイト等から新たに90 作品ほどを追加し、(2011 年末時点までの) 141 作品の一覧表を作成した。しかし、現段階においても不明あるいは未確認の情報もあるため、それらは空欄のままとし、これを出版年の順に並べたリストを資料

³⁵ 詳しくは3章の3.1.2を参照。

1 として巻末に添付した。以後の考察において、この作品一覧を適宜使用することとする。

4.2 ベトナムにおける日本文学の重訳の変遷

4.2.1 1913 年～1944 年の段階

A. 歴史的背景

1883 年以来、ベトナムは正式にフランスの保護国となった。ベトナム社会は中国文化の影響が主流であった長い歴史からフランスの文化に影響される時期に転じた。一方、日本との重要な文化交流は 20 世紀初頭に開始された。当時、中国を含め殆どのアジアの国々は西洋列強の植民地になったため、日露戦争においての日本の勝利、および明治維新は、ベトナムの愛国の知識層に大きな刺激と勇気を与えた。その中の一人であったファン・ボー・チャウ（漢字：潘佩珠）は 1904 年頃に「東遊運動」^{ドンズー}を組織した。この運動はフランス植民地支配からの脱却を目指し、独立運動の若い指導者を育てるために、優れた青年らを日本に送ることを主張した。ここで言う「東」は日本のことを指す。「東遊運動」の下で 300 人ほどのベトナム人が留学のために訪日した。しかし、フランスと日本の政権の協定で、東遊運動は短期間で（1909 年まで）終了を迎え、ベトナム人運動家と留学生が日本から追放された。これらが原因でベトナムと日本の交流は再び中止された。1941 年～1945 年 8 月まで、太平洋戦争中に、日本はベトナムを含むフランスの植民地であるインドシナに侵攻した。日本軍隊が米を強引に徴収する等という経済的搾取の残酷な政策を実施した結果、ベトナム北部を中心に多数の餓死者³⁶を出したとされる。それ故、この時期に、ベトナム人にとって日本は非常に悪い印象を与えることになった。また、文化的な面で日本の影響はあまりなかったと言える。

B. 日本文学の翻訳事情

この時期、ベトナム語に訳された日本文学についての統計はないが、わずかな数であると考えられる。1913 年頃、東遊運動のリーダーの一人であったファン・チュ・チン Phan Chu Trinh³⁷ は、初めて日本の政治小説の『佳人之奇遇』³⁸（東海散士著）の中国版を翻案し、ベトナム語版の *Giai nhân kỳ ngộ* を執筆した。このきっかけは、1906 年にファンが訪日し

³⁶ ベトナムの歴史教科書では、死者数は約 200 万と言われている。

³⁷ （漢字：潘周楨、1872－1926）。漢文の素養に優れたベトナムの知識人・民族家でもある。

³⁸ 全 16 巻ある。1885 年～1897 年刊行された。

た時、梁啓超の『佳人之奇遇』の中国語訳と出合ったこととされている (Vĩnh Sinh, 2000)。Sinh によれば、ファンがその小説の最初の 8 巻を選んで訳したのには特別な意味があった。何故なら、『佳人之奇遇』の最初の 8 巻は日本の維新運動の愛国精神を称揚しており、ファンはそのテーマを絶賛し、中心的に扱いたかったと言われている (ibid.)。残りの後半の 8 巻は日本が軍国主義に進む段階を描き、極端に国家主義の響きが強かったため、ベトナム語版では省略された。さらに、この作品を翻訳したと言っても、ファンはベトナム人に対する伝統的で馴染みが深い *thơ lục bát*=「(詩)六・八言」という詩の形で話を再現し、ベトナム文学の伝統的要素と入れ替えた。『佳人之奇遇』は、文学作品としてではなく、政治についての“新作品”として、当時のベトナム人に革命の知識を広げる目的で翻訳・紹介された。確かにその政治的目的で、*Giai nhân kỳ ngộ* は 1926 年に印刷されたが、すぐにフランス植民地政府に没収され、1958 年にサイゴンで再出版・発行された (Nguyễn (ed.), op.cit.: 248)。

1930 年代の段階に入ると、ベトナムの北部で、数は少ないものの日本文学に触れた文学評論の投稿が現れ始めた。その中で、ハン・マック・ツー *Hàn Mặc Tử* というベトナムの有名な詩人は“*Thi văn Nhật Bản với phong trào Âu hóa*” (日本詩と欧米化の運動) で、短歌、俳句、都々逸、及び新体詩を紹介し、川路柳虹と萩原朔太郎等の日本の詩を幾つか翻訳した。また *Tri Tân* (=知・新) という文化の週刊誌には 1941-1945 の間、日本の漢詩に関する *Bách Thảo Sương Tiên Nữ*³⁹ の連載もあった (Cf. ibid.)。

政治小説の一冊と日本の詩の概要を紹介したものも幾つかあるが、日本文学と接する過程の始まりに過ぎず、その紹介は簡単なもので入門程度であったが、まだ馴染みの無い日本文学のイメージを知るためには、ベトナム人読者にとっては大変重要なものであった。

1940 年代に、大東亜戦争あるいは太平洋戦争で、日本軍はベトナムを含む東南アジアに侵攻した。「新亜雑誌」や「大東亜戦争」等という日本の支援を受けた新聞では、日本文化の武士道や茶道だけではなく政治の話題を多く掲載した。文学の紹介は演劇の幾つかの翻訳に過ぎなかった (ibid.)。1944 年から 1945 年にかけて、*Trung Bắc chủ nhật* 誌 (「中・北

³⁹ 記者のタイ・テイ・ウック *Thái Thị Úc* のペンネーム。

日曜」誌)の連載として、小松清⁴⁰によるフランス語で書かれた小説の『再会』(ベトナム語のタイトルでは *Cuộc tái ngộ*) がグエン・ヤン Nguyễn Giang によってベトナム語に翻訳された (Cf. Phan Mạnh Hùng)。

4.2.2 1945～1974 年の段階

A. 歴史的背景

1945 年から 1975 年にかけてはベトナム人の抗フランス・抗米戦争の時期である。この時期は、ベトナムと日本の関係は非常に複雑で障害が多かった (Nguyễn (ed.), 2008: 33)。1945 年 9 月ベトナム民主共和国は独立を公布した後、ベトナムは冷戦により東西分断の争いに巻き込まれ、フランスの 2 回目の植民地に対抗する時期に入った。1954 年以来、ベトナムは南北に分断され、北部と南部にはそれぞれ別の政治体系ができた。日本はアメリカの支援で作られた「ベトナム共和国」(南ベトナムの政権)のみを認め、サイゴン政権に対する戦争賠償と援助・投資を行った (Shiraishi, 1994)。北ベトナムの「ベトナム民主共和国」との正式な関係は 1973 年に至るまで存在しなかった。しかし、1954 年から 1973 年にかけて、ベトナムと日本の民間機関間の関係や、ベトナム人民に対する日本人の応援活動は存在していた。ベトナムの外務省の資料によると、抗米戦争の時期に、日本はベトナムに対する民間の援助運動が(資本主義の国々中で)最も強い国であった (Nguyễn (ed.), op.cit.: 250)。ようやく 1973 年にベトナム民主共和国(北ベトナム)政府と日本政府は、正式な国交を樹立することで合意に至った。

一方、こうした政治の影響により、ベトナムの南北では文化・文学の発展も異なる道を辿ることになった。北部においては、マルクスとレーニンの基本的な理論書やプロレタリア文学作品が多く翻訳された (Hoàng, loc.cit.)。同じく社会主義国の旧ソ連や東欧の国々の文学が特に重視され、主にベトナムの北部の読者に人気が高かった。ロシア語は馴染みのある外国語になり、学校で教えられた。それに対して、サイゴンの政権はアメリカとの繋がりが強かったため、アメリカの文化を普及させ、南部では英語を教育制度に導入した。

⁴⁰ 小松清 (1900—1962) は日本の評論家・フランス文学者である。ベトナムの古典傑作の『金雲翹』(グエン・ズ Nguyễn Du 著、東宝発行所 1942) を、フランス語訳を介し訳した初めての人物でもある。

このような状況が 1955 年～1975 年の間続いたこともあり、ベトナム文学のシステムの中で、ロシア語、英語の文学翻訳が主流になった。さらに、南北ベトナムにおいて出版の運営方法と事情には様々な相違点があった。北部では国営の出版社が主であったため、選択される文学翻訳も計画的に、厳密に検閲された。一方、南部では私営の出版社が多くあり、北よりは緩やかな検閲の制度であった。

B. 日本文学の翻訳事情

この時期に、ベトナム語に訳された日本文学は約⁴¹ 32 作品あり、その中で直接に訳された作品は 5、重訳は 27 であった（作品一覧参照）。作品数は前の段階よりかなり増加したと見られるが、日本文学の翻訳はベトナムの北部ではソ連、中国の文学の翻訳よりかなり少なく、南部では欧米文学の翻訳数とは比較にならない (Hà, loc.cit.)。前述したように、ベトナムでは分断された背景下で、それぞれの文芸全体の傾向を受けて、この時期の日本文学の研究や翻訳も南北で異なる方向で展開された。

北部では、日本文学の作品は主にロシア語、あるいは中国語を経由し、全て間接的にベトナム語に訳された。とりわけ 1958 年に小倉豊文の『絶後の記録—亡き妻への手紙』、1961 年に徳永直の『太陽のない街』、1963 年に小林多喜二の『蟹工船』、1964 年に宮本百合子の『播州平野』等というプロレタリア文学の代表的な作品を中心に翻訳され、ベトナム人読者に紹介された。

南部においては、サイゴン政権がアメリカの同盟国である日本と 1950 年代に正式な外交関係を樹立した。その結果、様々な文化交流活動が進み、日本文学の傑作（プロレタリア文学は対象外）の出版に関心が高まった。とりわけ芥川龍之介（『河童』、『羅生門』）、川端康成（『伊豆の踊り子』、『雪国』、『千羽鶴』等）と三島由紀夫（『真夏の死』、『宴のあと』等）といった作家の作品が訳されて出版され、人気が高かった。特に『羅生門』と『千羽鶴』には複数の翻訳があった。また、他の日本の代表的な作家の作品集を系統的に紹介しようという計画もあった。戦争でその計画は中止されたが、夏目漱石の『心』、安部公房の『砂の女』、大江健三郎の『飼育』等出版に至った作品もあり、「ある程度、日本文学の魅力的な特色を紹介することができた」(グエン, op.cit.:55)。この時期は英語、フランス語を

⁴¹ このデータは巻末の作品一覧に基づき計算されたもののため、近似の数字であり、実際に存在した本がこの統計に入っていない可能性がある。

介した重訳がまだ主流であった。しかし、日本語から直接に翻訳された本が現れたのは南部の日本文学翻訳の特徴である。それは三島由紀夫の『金閣寺』・『午後の曳航』・『潮騒』、夏目漱石の『こころ』及び川端康成の『千羽鶴』という5つの作品である。それらの作品は Đỗ Khánh Hoan (フランス語・英語の翻訳者) と Nguyễn Tường Minh (日本語の翻訳者) のコンビによって、英訳を参考にしながら、原文から翻訳されたものである。1960年代に Đỗ Khánh Hoan は日本現代文学の約24作品⁴²(Nguyễn Tường Minh と協力したのは4作品) をベトナム語に訳した。この実績を振り返って、Hoan は以下のように説明している⁴³。

「(ベトナムの南部の) 学校等では、フランス・イギリスやアメリカの文学しか勉強できなかった時代だった。だから、私は他の国の文学はどうだろうと思いついた...

紹介・翻訳した動機は当時(1960年代)日本の小説家は数が多いし、感動させる作品が多かった。本当に才能があり、文学的価値が高い作品であった。その反面、日本文化は(ベトナム文化と) 近く類似点があるため、ベトナム人読者は日本文学を読む時、英・仏・米の文学と違って、違和感を覚えないだろう。」

Hoan は日本文学作品の選定について、「古文より現代文学」、「東が前－西が後」というように優先するべきと主張し、当時国際的に有名な作品を選び、主に英語版からベトナム語に訳した。

このように、1945-1974年の間、ベトナムでは北か南かによって、プロレタリア文学かそれ以外という特定の文学ジャンルしか翻訳されなかった。また、日本文学はおおよそベトナムの北部ではロシア語・中国語の翻訳、南部ではフランス語・英語の翻訳を介して、重訳されたという傾向があった。ベトナムが統一された1975年まで、翻訳において南北間の交流はあまりなかったようである。

4.2.3 1975～2001年の段階

⁴² 多くの作品の原本は戦争による紛失で現在残っていないため、巻末の翻訳作品の一覧表に述べてない。

⁴³ Dịch giả Đỗ Khánh Hoan: hơn nửa thế kỷ vác đá leo đồi! (翻訳者ド・カイン・ホアン: 石を持って坂を登った半世紀)

[Online] [http://thaihabooks.com/tin-tuc/916/DICH-GIA-DO-KHANH-HOAN:-HON-NUA-THE-KY-VAC-DA-LEO-DOI!/,](http://thaihabooks.com/tin-tuc/916/DICH-GIA-DO-KHANH-HOAN:-HON-NUA-THE-KY-VAC-DA-LEO-DOI!/)

2015年9月1日閲覧。

A. 歴史的背景

1975 年は抗米戦争、いわゆる「ベトナム戦争」が終わり、ベトナム史の大きな転換点となった年である。統一ベトナムが実現され、1976 年 7 月 2 日に「ベトナム社会主義共和国」、が成立した。「ドイモイ政策」(1986) のきっかけで、ベトナムが世界の国々との外交関係のみならず文化・文芸の交流を広げ、文学翻訳も、大きく進展した。その成果として、この時期には、統一されたベトナム政府と日本との間に、政治・経済・文化的な協力の関係が成立することになった。ベトナムでは 1978 年に日本からの輸入額が(旧ソ連に次いで)最大第 2 位に達した。ベトナムを再建するため、日本政府は資金援助も行った。しかし、1979 年から、カンボジアの問題で、両国の関係はまた悪化し、1991 年まで非友好的な期間が続いた。1993 年になってようやく両国関係が正常化し、経済・文化という多面での交流が進んでいく状況に至った。その後、すぐ日本はベトナムのビジネス上の最大のパートナーとなり、個人投資が第 5 位の国となった(1993 年のデータ)。日本政府はベトナムとアメリカの正常化を支援し、ベトナムがアジア開発銀行 (ADB)、世界銀行 (WB)、国際通貨基金 (IMF) 等の国際的な財務機関に加入することを勧めた。同時に文化・教育・科学的な協力も促進され、日本政府の奨学金を得て日本に留学するベトナム人学生や研究者が増加する傾向にある。

B. 日本文学の翻訳事情

この時期には、日本文学の翻訳作品数が約 46 あり、前期に比べ増加した。その中で、重訳は 44 作品であり、直接翻訳の 2⁴⁴ 作品より圧倒的に多数を占めた(作品一覧参照)。この時期にも日本文学は主に英・仏・露訳版を介した翻訳されたが、その特徴は古典から現代までの作品、さらに小説と詩等ジャンルが多岐にわたっていると言えよう。

日本古典文学の『万葉集』(ただし、万葉集の中、100 短歌だけの詩集である)、『平家物語』、『源氏物語』、『雨月物語』が英語、フランス語訳を介して、ベトナムの国営の文学出版社の企画により、複数の翻訳者の協力を得て、初めて読者に紹介された。日本現代文学については、前の段階で名前が知られるようになった作家の作品も引き続き翻訳された。川端康成の『古都』、『片腕』、『眠れる美女』、芥川龍之介の『藪の中』、夏目漱石の『それから』、谷崎潤一郎の『鍵』、安部公房の『他人の顔』等が挙げられる。

⁴⁴ その中の 1 つ (『金閣寺』の訳) は英語版を介して原文と参照した翻訳である。

一方、初めて翻訳された作家では島崎藤村（『家』）、開高健（『裸の王様』）、三浦哲郎（『忍ぶ川』）や遠藤周作（『わたしが棄てた女』）等があった。また、日本現代文学の受容について、日本の現代短編の翻訳書の“Đóm lửa lạc loài Truyện tình Nhật Bản（場違いの点在する火-日本のロマン・ストーリー）”（1988）の前書きでは、「我々の中の日本は安定しないイメージです。その同文化の国に大変関心を持って、私たちにはわずかな情報しか手に入りません【中略】文学の作品は「スーパー（優れる）情報」の一種類に違いありません。それは日本人の心、痛みや世間に対する悩みです。（日本文学の）本を読んで、『なるほど。日本という著しく豊かな国の一人一人には、淋しい心が存在していて、私たちに近い』と気が付くでしょう」と書かれている。

このように、1990年代までの段階において、国際関係が限られたベトナムにとって、日本文学は日本文化・日本のことを知る可能な手段の一つとして、訳された。それ故、媒介言語の訳を介しても日本文学の重訳は広く読まれ、高く評価された。

1980年代末からは、日本の現代文学のベストセラーである黒柳徹子の『窓ぎわのトットちゃん』（1989）、村上春樹の『ノルウェイの森』（1996）、吉本ばななの『キッチン』（2000）等が英語を介して、ベトナムで紹介された。これらの作品はベトナムの文学界や愛読者という狭い範囲で話題になったが、文化的な効果は期待されたほどではなかった。三島由紀夫著『金閣寺』は1993年に英語を介して再翻訳された（前は1970年版）。

4.2.4 2002年～2012年現在の段階

A. 歴史的背景

2002年にベトナムがベルヌ条約に加盟した事柄は日本文学の出版にも変化を起した。21世紀以前のベトナムでは、原作の内容を伝えることのみを重視し過ぎ、また著作権への関心が薄かったため、どの言語から訳されたかも明記されず不明なものが多く、翻訳の功罪もほとんど言及されていなかった。しかし、2002年から現在まで、読者がより正確な翻訳を求めていることを考慮して、原文から直接翻訳を行う傾向が主流になってきた。

著作権を得ることが必須になったため、翻訳作品は重訳または直接翻訳であるかを明らかにし、記述することが義務付けられた。これはベトナムにおける日本文学の重訳にとって、重大な節目である。この時期に、欧米と日本で新しく話題になった文学作品に出版業

の注目が集まりはじめた。

一方、インターネットの普及と共に、翻訳本のマーケティングにも大きな変化が訪れた。例として、『ノルウェイの森』は（再び英語版を介して）、『キッチン』（2000）は（日本語から）再翻訳され、改めて出版される。今回、出版社はその作品の著作権を交渉できたため、インターネット等を通じて翻訳本を強く宣伝した。その結果、この2つの作品は大衆の注目するところとなり、ベトナムの翻訳文学の市場で「売れる現象」になった。

他方、21世紀に入ってから、前の段階で回復された日・越関係が経済面のみならず、社会・文化面での協力関係が盛んになり、大きな成果を見せ始めてきた。ベトナム社会に経済強国であり、文化的伝統が豊かな日本のイメージが伝えられてきた。現在、ベトナムでは日本語の学習者数が増加の一途を辿っている。数多くの日本語学校も出来ており、大学等で本格的な日本語教育を受けた成果が現れ始め、日本文学の翻訳者の人材育成が進んだ。結果として、日本文学を原作から直接翻訳できる人材が増えてきた。

B. 日本文学の翻訳事情

この時期は日本文学翻訳の作品数も質も飛躍的に上昇した時期である。日本文学の翻訳、特に直接翻訳の出版が著しい発展を遂げてきた。2002年～2012年という僅か10年間（作品の統計は2011年現在まで）に62作品が出版された。そのうち、約60%（36作品）は日本語から直接に訳されたものである（重訳は26作品ある）。日本と世界でベストセラーになった代表的作家はベトナムで翻訳され、読者の注目が集まったと見られる。多くの作品が翻訳された作家として村上春樹（8小説）、吉本ばなな（6小説）、村上龍（4小説）、山田詠美（3短編集）、小川洋子（2小説）等ある。

また興味深い例として『ノルウェイの森』を挙げたい。2回の訳版ともに英語訳からの重訳であるが、最初の1997年版はあまり知られることはなかったが、後の2006年版（チン・ルーTrịnh Lữ訳）は読者と評論家に温かく受け入れられた。Trịnh Lữの他には、ズン・トウン Dương Tường やカオ・ベツト・ズン Cao Việt Dũng 等は英語／フランス語の翻訳者であるが、日本文学を重訳した。彼の重訳は高く評価され、購読者も多いようである。

2006 年以降になると、「<http://ertc.com>」や「<http://chimviet.free.fr/vannhat/Avannhat.htm>」のようなサイトに載っている文献の多くは、著作権の期限が切れた日本の小説や短編であり、日本の特色のある戦前文学（芥川龍之介、谷崎潤一郎、太宰治等）の貴重な資料の一つになっている。

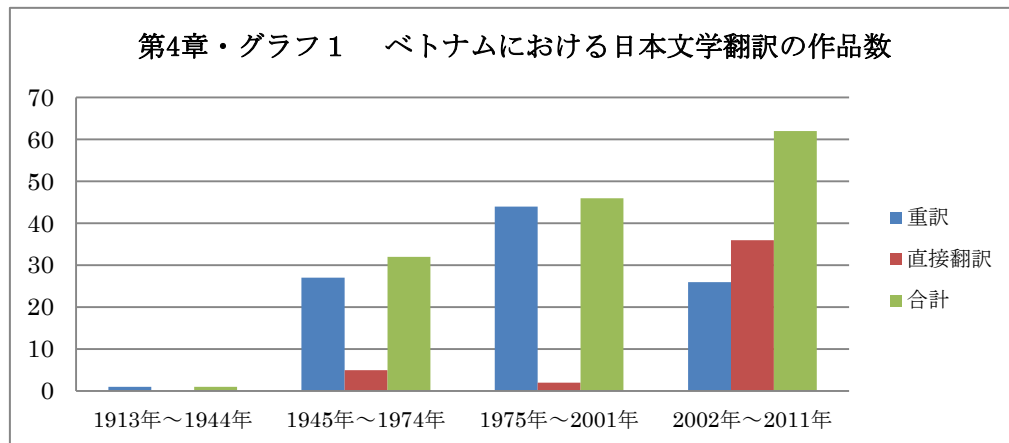
近年、より多様な文学ジャンルの日本作品が翻訳されつつある。例えば、鈴木浩司のミステリー文学作品（『リング』、『らせん』）や新人作家である金原ひとみの（『蛇にピアス』）等である。同時に、日本のライトノベルや純愛の文学は何冊もベトナム語に訳され、若者の間で人気が出た。例えば『世界の中心で、愛をさけぶ』（片山恭一著）（2009）や『電車男』（中野独人著）（2011）等である。一方、『坊ちゃん』『心』『それから』といった夏目漱石の作品のような古典文学の傑作は再出版され、新しく翻訳されることになった。

要するに、選ばれる文学の対象は欧米や日本の本市場で話題になった作品、文学賞の受賞者の作家等であることが多いという。この段階に出版された日本文学の書籍の表紙の帯には、欧米（主に英文）のブックレビュー（書評）の引用がたくさん載せられていることが目立つ。この現象は、確かに出版社は読者に作品の威信が既に外国で好評を得ていることを PR し、購買意欲に訴えているものと思われる。

また、重訳については、直接翻訳されるものが急速に増加しているにもかかわらず、英語をはじめ媒介言語からの重訳も多く存在する。とりわけ、村上春樹の最新長編小説の『1 Q 8 4』（2012-2013）と東野圭吾の『白夜行』（2014）は中国語を媒介言語とし、原文を参照し訳されたものである。

4.3 ベトナムにおける日本文学の特徴

以上ベトナムにおける歴史的社会的背景を辿りながら、日本文学の重訳の経過及び成果について論述してきた。それらを通して、重訳の経過は歴史的背景と緊密に関係付けられることが明らかに示せた。ベトナムと日本の交流関係が少しずつ形成されていく中で、重訳が必然的に生じて、徐々に大きな役割を果たしてきた。一覧表に基づき、日本文学翻訳の出版状況を以下のグラフ 1 にまとめた。



グラフ1から、1945年～2001年までにベトナム語に訳された日本文学では重訳の占める割合が多いことが見て取れる。翻訳日本文学作品の一覧によると、この期間の日本文学翻訳の総数は78作品あるが、その中で直接翻訳はわずか7作品であり、残りの71作品が重訳である。この数字から、2001年以前は、重訳は日本文学の翻訳において、圧倒的である（全体の約91%）ため、中心的な位置を占め、重要な役割を演じていたということが明らかである。次の2002年～2012年段階⁴⁵には、初めて直接翻訳の割合が重訳を上回った。それでも、合計では、重訳された作品は99あり、日本文学の翻訳の70%を占めている。換言すると、ベトナムにおける日本文学翻訳史が、重訳の歴史であったと言っても過言ではないだろう。

また作品の一覧から、日本文学翻訳について、作品の構成が不均衡であるという特徴も確認できる。古典文学より近現代文学（明治時代から）、また韻文や劇より小説と短編が優勢であることが分かる。古典作品では、『源氏物語』や『平家物語』の一部のように英語を紹介したものがわずかにある。1990年代から現在にかけて、詩や戯曲というより広い文学ジャンルの日本の作品も翻訳されつつあり、日本語の原文から直接翻訳されるものが優先され、徐々に増えていく傾向が見られる。

さらに、近年翻訳書の新しい特徴の一つは多言語の翻訳を用いる翻訳であることが強調

⁴⁵ 作品の一覧表は2011年時点までのデータである。

され、明示されている。もちろん、複数の原本を使って訳された作品もあったが、特に 2002 年以降、その手段を用いた作品が多く見受けられる。例えば『眠れる美女』は 2012 年に再翻訳され、今度英語版とフランス語版を同時に用い、訳されたという情報は本の表紙に示されている。また、村上春樹著『国境の南、太陽の西』(2007) と『海辺のカフカ』(2012) は、英語版とフランス語版を底本として、日本語 ST を参考にしながら訳されたという。逆に、夏目漱石の『草枕』(2013) は原文に基づきながら、英語の *Kusamakura* (2008) を参考に訳されている。つまり、多言語の翻訳はベトナム人の日本文学の翻訳者によって、様々な形で活用されていると言えよう。

4.4 まとめ

ベトナムにおいて日本文学を重訳する歴史的必然性があったことは上述した理由により明らかである。特に戦争や政治問題が起きた 1946 年から 2001 年にかけて、重訳の作品は直接翻訳より圧倒的に多い。それ故、重訳の現象を抜きにしては、ベトナムでの日本文学の翻訳の歴史を考察できない。

また、ベトナムにおける日本文学翻訳の特徴を見出すことが出来た。日本文学の翻訳、出版と受容はベトナムの社会的、政治的背景の変動に支配された。時期ごとに、翻訳された文学書のジャンル、翻訳の方法等が変化している。日本文学作品を翻訳する際の選定基準は、初期の政治的イデオロギーを宣伝する目的から、次の時期には日本文化を知る手段として、近年では読者の文学的ニーズに応えるため、と時代によって変更されてきた。

現在、より広い文学ジャンルの日本作品が翻訳されつつあり、日本語の原文から直接翻訳されるものが増えていく傾向にある。また、重訳に関しても、複数媒介翻訳と同時に日本語の原文を使用した重訳等という新しい形式も次々に現れ、興味深い展開を見せている。

一方、ベトナムにおける日本文学の再翻訳の傾向を考察すると、翻訳と重訳についても興味深い傾向が見られる。日本作家の中で、最も多く翻訳されているのは川端康成の作品であろう。『雪国』は 3 回翻訳され (1969 年、1988 年と 1995 年⁴⁶)、『眠れる美女』は 2 回

⁴⁶ 今後の数字はベトナム語版の出版年になる。

翻訳され（1990 年と 2012 年）、全て英語からの重訳である。他の再翻訳された作家は、安部公房の『砂の女』（1962 年と 1989 年）、村上春樹の『ノルウェイの森』（1996 と 2006 年）等はいずれも英語から訳された。黒柳徹子の『窓ぎわのトットちゃん』（1989 年と 2014 年）や『キッチン』（2000 年と 2006 年）は初版が英語を介した翻訳であるが、新しい版は直接日本語の原文から訳された。例外として、三島由紀夫の『金閣寺』は 1970 年に直接翻訳が出版されたが、1993 年に英語版からの重訳も現れた。『坊ちゃん』は 2004 年に直接翻訳が出たものの、英語版からの重訳は 2011 年に出版された。この後の翻訳はかなり読みやすく、面白くなったと評価されている。要するに、移り変わる時代背景により、日本文学の翻訳・重訳は、徐々に改善されレベルアップされ、形式が変化してきた。翻訳者たちも、多言語の媒介翻訳を使うこと等で、TT をより ST に近づけようと努力していることが分かる。この変化については第 6 章で翻訳の事例により詳細に分析する。

第5章 異文化対照法としての重訳の可能性

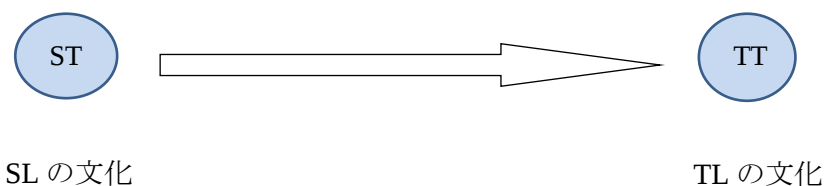
第4章でベトナムにおける日本文学の重訳の変遷を遡って、重訳がベトナムの社会・文化的背景と日越の関係と共に変動してきたことを示してきた。本章では、歴史・文化的な観点から重訳のプロセスを改めて見直すこととする。また、ベトナムの現実を踏まえながら、重訳の新たな分類を試みる。そこで、重訳を使用する翻訳の形式への示唆が出てくる。

5.1 異文化理解の視点から見直す翻訳・重訳

言語は文化の一部であり、文化の慣例化した伝達・思考手段として使用される（Reiss & Vemeer, 2013: 24-25）ものであり、翻訳の文化的側面を無視することはできない。起点テキスト ST は起点文化の具体的状況の下で（テキスト作成者に）語られた内容だと考えられよう。そうであれば、翻訳者の役割はこの内容を目標文化の具体的状況とどのように関連づけるか、また目標文化への翻訳である目標テキスト TT でどのように変化させるかということであろう。また、「翻訳の問題は二言語間の問題であると同時に、往々にして二文化間の問題でもある」ため、翻訳で行われる他文化に合わせた文化的転移を判断するために、翻訳者は起点文化と目標文化という二つの文化に精通した人でなければならないという（Osgood *et al.*, 1975: 171, Reiss & Vemeer, *ibid.*参照）。以上の引用から次のように言うこともできよう。

翻訳は起点言語（Source Language: SL）の文化を解釈し、その内容を目標言語（Target Language: TL）の文化で受け入れられる形を再現することと考えれば、翻訳は異文化理解・伝達の手段の一つであると考えられる。即ち、翻訳する過程で、翻訳者はまず SL の文化の立場を取り、ST の内容を理解し、また TL の文化的観点から TT を作成するものである。本論文で使われる「視点」とは、翻訳者が文学作品の物事すなわち著者の文化を見たり考えたりする時の立場を示し、言語・文化的視点を意味する。その言語・文化的視点と関連づけて、以下に翻訳と重訳の概念を捉えることとする。

ここで、通常「翻訳」のプロセスを単純化し、図式化すると、以下の図1のようになるだろう。矢印は翻訳行為が行われることを表す。網掛けした円形は、TT 作成に直接関与する文化的視点を示すものとする。



第 5 章・図 1 ST と TT の基本的関係：「二視点翻訳」としての通常翻訳

翻訳者は SL の文化か TL の文化かどちらかの「視点」に立つことによって、TT での伝達される内容と形式が変化し得る。例えば、ある小説では、日本の「白足袋」が英語で「white gloves（白い手袋）」と翻訳された。確かに欧米文化（イギリス、アメリカ等）の読者に正式な服装のイメージを伝えるため、「白足袋」から「白い手袋」への転移が必要だと考えられたためである。それ故、このような例は適切な訳であるとみなすことも可能であり、ST と等価の文化的意味・機能をする単語に置き換える翻訳法であると判断できる。

以上確認できたモデルでは、本質的には ST と TT という二者間の関係となる。また、このようなプロセスは直接翻訳であり、文化的な二視点に関連するため、「二視点翻訳」と呼んでいいだろう。

一方、翻訳の特殊な種類としての重訳においては、ST と TT のみならず、媒介言語の翻訳が登場する。ベトナム人の翻訳者がロシア語訳を使って、日本文学の作品を訳す例で考えてみよう。原作の文化的な背景は日本であるものの、ロシア語翻訳者が理解し、ロシア語・ロシア文化の背景に合わせて訳した内容になるだろう。そしてこのロシア語訳がベトナム重訳の底本になる。最終の TT での日本文化のイメージは、おそらくロシアとベトナムの言語・文化的なフィルターで写し取った日本文化となるはずである。その場合は、ST の文化理解の視点はどのような形で現れるのかを次の節で論述する。

5.2 重訳の新分類

重訳の過程では、ST 以外に、媒介テキスト MT での理解を参考にして、TT で受け入れられる形を再現するという作業が行われるものと見ることができる。また、重訳の有り様

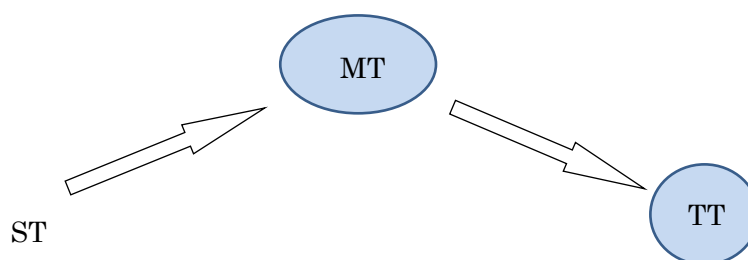
は原文あるいは最初の媒介翻訳との関係によって、様々な種類がある。種類によって文化の転移や価値の変化が違ってくると考えられる。

この節では、ST と TT のみがある二視点翻訳のモデル（図 1 のモデル）を基にして、ベトナムにおける日本文学の重訳史の事実（4 章を参照）から、重訳の変形を検討し、新しい分類法を提案することを試みる。これは重訳プロセスの間接性の度合いに基づいた先行研究と異なり、文化的視点からの分類である。また、それぞれの種類に該当するメリットとデメリットを説明する。

5.2.1 通常の重訳：「二視点の重訳」

まず、SL と TL の言語・文化的な関係が存在しない時、ST からではなく、MT から TT に訳される。これは重訳の一般的なイメージであり、一つの媒介言語の翻訳（MT）から訳される TT のことである。MT の使用を図示すると、図 2 の通りである。図では ST と TT の間に矢印はなく、翻訳作業は行われず、直接には関係がないことを表している。網掛けの円形は、TT 作成、すなわち重訳作成に直接関与する参照点を表すものであり、ST は該当しない。

図 2 によると、ST から MT、MT から TT というそれぞれ独立した翻訳プロセスが行われる。それぞれのプロセスでは明らかに二つのテキスト、言語・文化しか関わらないため、それぞれが二視点の翻訳プロセスであると考えられる。このモデルは「二視点の重訳」と言えよう。



第 5 章・図 2 一般的な重訳：「二視点の重訳」

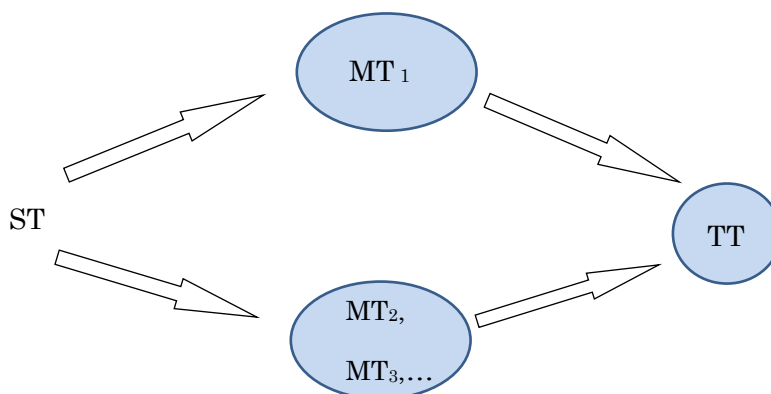
図 2 で見たように、ST と TT 間で直接の関係がないため、ST から MT への翻訳でどの

ような変化が起きたか、最終の TT では全く見えてこない。これにより ST と非常に薄く緩やかな関係しか持たないことは、重訳の信頼度を低くさせる点でもあり、最も非難されているところではないかと思われる。それに加え、MT の誤訳や訳漏れはそのまま重訳に持ち込まれることにもなる。ベトナムにおける日本文学史の最初の 2 段階には、このような二視点の重訳が多く見られた。

この一般的な重訳のモデルから、MT の数及び原文 ST と関わる程度により、いくつか異なる重訳の種類が次の通り確認できる。

5.2.2 二つ以上の媒介翻訳からの重訳：「三視点の重訳」

通常の翻訳すなわち一つの媒介翻訳を使った重訳より進化した形として、二つ以上の媒介版を参照する重訳である。それは「三視点の重訳」と呼び、図 3 のように表示できる。



第 5 章・図 3 二つ以上の媒介言語の翻訳：「三視点の重訳」

図 3 に示したモデルは、最終の TT が、MT₁ と MT₂ という二つの底本から訳されるケースである。この重訳の種類は、2 つの底本の重視の仕方により、さらに細かいタイプ分けをすることもできるが、ここではその区別はしない。複数の底本を用いると言っても、実際には、その内の一つを主たる底本として翻訳者が最も頼りにするのであり、それは翻訳者に最も馴染みがある言語の翻訳版と考えられる。

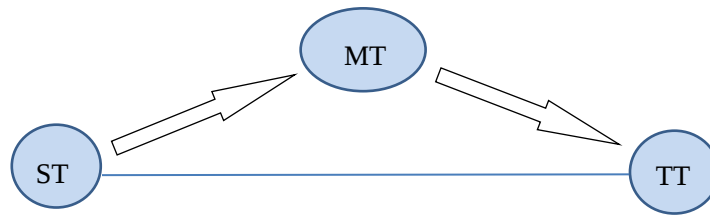
このモデルの利点はもし MT_1 で不明な点があれば、それを MT_2 で確認できるという点である。それ故、翻訳者がより客観的に翻訳作業を行えることが TT への助けになると考えられる。これは二視点の重訳のモデルより優越するだろう。ただし、複数の媒介版を使う場合は、例えば MT_1 と MT_2 で訳出法が異なっている時に、どちらにしたがって訳すべきかの判断に翻訳者は迷うことになるかも知れない。これは ST との参照が欠けることにより起こる問題であり、このモデルの弱点と考えられる。

一方、ベトナムの日本文学の状況から見ると、三視点重訳は 1980 年代以降（第 3・4 段階に相当）現れた。この時期には日本文学の直接翻訳が行われるようになったため、重訳を実行する必要性が弱まった感がある。『眠れる美女』（川端康成）のベトナム語訳の *Người đẹp ngủ mê* (2010) の表紙には、この翻訳は英語訳をメインの底本として使用すると共に、フランス語訳を参考にして訳されたという記述がある。このような多言語の MT を使用することは重訳の信頼度を高める取り組みと考えても良いだろう。また、この情報を表紙に明記することが有益であると、出版社（または翻訳者）が判断したものと推察する。

5.2.3 起点テキストと対照した重訳：「三視点对照の重訳」

一般的な重訳が図 2 の形であるとすれば、さらに ST を直接参照することができれば ST と MT という二つの参照点から TT を作成することができる。つまり、翻訳者は MT 、 TT 、そして特に ST からの三視点を対照することができるわけである。重訳の要素がありながら、 ST との関係が成り立つこのような翻訳のモデルは新しい翻訳の方法の誕生につながる。詳細は次の節で記述する。

重訳の分類に含めるのは、 ST が参考程度に用いられるパターンである。このパターンは通常の重訳のモデル（図 2）を基にして、それに ST 参照を加えたものであるため、重訳の一種として「三視点对照の重訳」と名づけ、図 4 で表示する。この図では、直線は「参考にする」という関係を表すものとする。



第5章・図4 三視点对照の重訳

三視点对照の重訳は原文との直接の繋がりがあるため、翻訳の正確さはかなり期待できると考えられる。通常の二視点の重訳に比べ、どのような優越点があるのかは、次節で具体的事例により検討する。なお、このパターンの眼目は、MTにSTの参照を加えることにあるため、MTが複数あるもの、つまり「三視点の重訳」(図3)にST参照を加えたものも含むものとする。

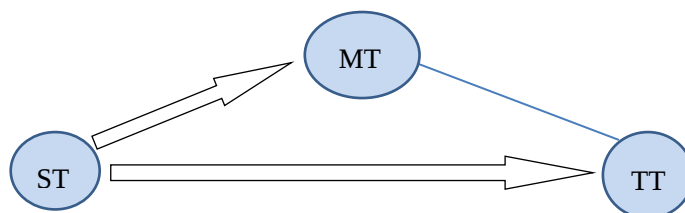
実際には、このパターンは比較的数量が多い。ベトナムにおいて、2002年以降になって、こうした重訳の形式が多くなっている。原因は日本との経済・文化的関係が強まっている時期であり、翻訳者は日本人と日本語ができる人と接するチャンスが増加してきた結果と推測する。日本の現代小説を訳した例として、『国境の南、太陽の西』のベトナム語版の *Phía Nam biên giới, phía Tây mặt trời* (2007) が挙げられる。この本は、フランス語訳を主たる底本として、英語版と日本語STを参考にしながら訳された。また、『海辺のカフカ』のベトナム語版 *Kafka bên bờ biển* (2012) は、英語版とフランス語版を介して訳され、両者にズレのある箇所はSTを確認するという方式で行われた。この二つの例では、STの参照は訳者の日本語話者の知人によって行われたと記述されている。

5.3 「三視点对照の翻訳法」の概念

上述したように通常の重訳(図2)に加えてSTを直接参照する関係を加えれば三視点を対照する翻訳が成り立つ。このような、STとMTの両者を用いている翻訳の方略を「三視点对照の翻訳法」と呼ぶことにする。このような翻訳方法は、STの使用の程度によって、さらに2タイプに分けられる。一つ目は重訳の一種でもある「三視点对照の重訳」である。三視点对照の翻訳法の二つ目のタイプとして、STをTTの主な底本とするものである。後者ではSTから直接翻訳する作業に、MTの参照を加えるという方法である。これは重訳を用いる翻訳という点からすると、三視点对照の重訳の変形ともみなせる可能性があるが、

「直接翻訳」に近いので、あえて重訳という語は避けて「三視点对照の翻訳」とする⁴⁷。

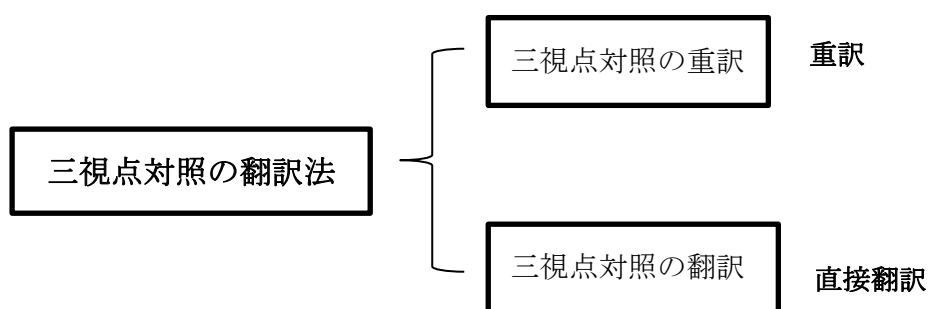
三視点对照の翻訳は、図5のように図示できよう。



第5章・図5 三視点对照の翻訳

三視点对照の翻訳の例はそれほど多くはないが、例えば *Gói đầu lên cỏ* (2013) が夏目漱石の『草枕』を、原文に基づきながら、英語の *Kusamakura* (2008) を参考にして訳している。1990年代の後半から現在にかけてのベトナムでは、日本語の学習者が急増しているが、2002年以降、本格的な日本語教育を受けた世代が成長した結果、日本文学の直接翻訳が多く行われているという。その中で、著作権が切れた古典文学の作品を選び、翻訳する傾向も見られた。こういう場合は、他の言語での翻訳がすでに存在していることが多いので、直接日本語原文から訳されるものの、既存の他言語の翻訳をも参考にすることが可能になった。この三視点对照の翻訳は基本的に直接翻訳のモデルと重なるものであり、重訳の分類には入れ難いため、別の種類に分けた。しかし、この翻訳方法も、重訳を利用することによって可能性を広げる有用な翻訳法であると考えられる。

つまり、本節で論述した「三視点对照の翻訳法」は以下の図のように表される。



第5章・図6 三視点对照の翻訳法のモデル

⁴⁷ ただし、巻末の日本文学翻訳の作品一覧表において、三視点对照の重訳は重訳にし、三視点对照の翻訳は直接翻訳にして統計した。

三視点对照の翻訳法は複数の原本を用いる翻訳だけではなく、その中に必ず ST・MT・TT との 3 つ文化視点を考慮し、成り立つ翻訳のモデルである。このように、文化的内容の転移を最も徹底できる翻訳法として、次節で三視点对照の翻訳法の利点を検証する。

5.4 三視点对照の翻訳法のメリットについての考察

5.4.1 理論的側面から

例えば日本文学のフランス語訳とベトナム語訳は、それぞれフランス人による日本文化の解釈、及びベトナム人による日本文化の解釈である。日仏から仏越へと重訳すれば、それぞれの翻訳は二視点翻訳である。その場合には原典に当たって誤訳を見つける作業は容易にはできない。しかし、日本語・フランス語ともに出来るベトナム人の翻訳者なら、日本語の原文とフランス語の翻訳からという 2 つの方向から、作品を見て調整することは可能である。それ故、通常の 1 つの方向からの視点と比べると、TT では作品について理解を深めることが期待できるであろう。また、訳出表現の面でもかなり参考にすることができ、TT の多様な表現につながる可能性もあると考えられる。

同様に、複数の言語が出来る翻訳者であれば、ST を含む二つ以上の底本の表現と文化的視点を合わせて対比し、TT での表現と文化を整理することができるようになる。つまり、この場合、ST、MT 及び TT という三視点の文化を対照した翻訳が成立し、前節で論述した「三視点对照の翻訳法」の 2 つの形式 (図 4 と図 5 を参照) に相当する。

ここで、三つの視点を用いた比較研究法としての「文化の三角測量」(川田, 2008) という考え方を紹介する。川田はある文化を判断するとき、別の視点として他の文化が、それも二つあれば、主観性をかなり補正できるとした。例えば「日本のことを考えるときには、フランスとアフリカを参照点にして考える...というふうにこの三地域の二つを参照点にして、他の一つを考えるということが習い性になりました。地測の三角測量もそうですが、二つの参照点から、他の一点を測る方が、他の一つを相対化、対象化しやすいわけです」と指摘している。また、この方法が、どんな異文化を研究するにも有効だと主張している(川田, op.cit.: 18)。

従来、比較・対照は文化研究において、不可欠な方法である。川田の新しい発想は、二つの事物間の比較だけではなく、研究対象の事物と他の二つの参照点と合わせて三つの視点から成り立つ三角関係を強調した点が特徴的である。こうした文化研究に三つの視点を取り入れることの有効性は、三視点对照の翻訳法にも当てはまるのではないだろうか。

さらに、翻訳事例を分析する際に、藤濤（2007, 11）は ST とひとつの TT だけの比較より、別の TT との「第三視点」の使用という方法論は「絶対化・固定化に堕ちなく...、全く異なる解決法を占めていることがよくあり、相対化を測る上で極めて有効である」と述べている。この考え方は重訳に応用するにも妥当と考えられる。複数の翻訳原本（ST と MT）を用いることで、翻訳の難点を解決する際の有効なヒントを見出すこともあるだろう。すなわち、通常の翻訳・重訳に比べると、重訳を利用するこのタイプの翻訳法では ST と TT の間に、媒介訳が介在するため、通常翻訳の過程にもうひとつ別の「参照点」が加わることになる。つまり、ST の文化的な背景の視点以外に、ST についての MT の文化的要素が混じった視点を考慮しながら目標テキスト TT を作成することになる。したがって「文化の三角測量」を重訳研究の場合に当てはめると、ターゲットである TT に、ST と MT という二つの参照点を合わせて「文化の三角関係」が成り立つ可能性があると考えられる。

重訳がこの利点を持ち、三視点对照の翻訳法を解説すれば、翻訳者は ST のみ、あるいは MT のみに頼るのではなく、複数のテキストを用いることによって、より客観的立場から、他の解釈を開く、創造的な TT を作ることが可能になるだろう。

5.4.2 実践の側面から

他方、翻訳の実践の場からの声として、ベトナムの日本文学の研究者であるニャット・チェウは、原作以外に媒介翻訳を利用することの有用性について以下のように述べている。

他の翻訳が全く存在しない時は、最初から原文を直接訳さなければならないが、もし第3言語での翻訳版があれば、それを参照することで、よりよい直接翻訳が期待できる。（Nhật Chiêu、インタビュー）

これは翻訳の過程で、対照・参照が非常に重要な作業だという主張である。ニャット・チェウは自身が翻訳する際、日本語能力が不十分なため、英語やフランス語の複数の媒介翻訳を用い、作品に関連のある情報を調べると共に、日本語の原作を参照した。この原作参照は、漢字の意味を確認し、できればベトナム語の漢語、いわゆる漢越語に訳すことに限定したものであった。さらに、ただ一つの訳ではなく、複数の底本を使用して訳すメリットについてニャット・チェウはインタビューにおいて以下の三点を挙げた。

第一に、他の言語の翻訳や ST を参照することが可能なら、前の翻訳者たちがどのよう

に作品を理解し、優れた訳し方をしているかが分かる。どのように訳せるか、大事なポイントが何かについて参考にできる。底本に曖昧なところがあったり、他の媒介翻訳とくい違ったりした場合は、ST と照合して訳文を修正することができる。

第二に、文化対照ができれば、異文化理解の視点が深まると考えられる。例えば欧米人の日本文化に対する視点を参考にした上で、翻訳者独自の理解を加えて訳すことができる。

第三に、対照は差異を強調する効果がある。それ故、参考・参照の作業が行われた翻訳は間違いを最小限にする効果をもち、最も「良い」翻訳に繋がる。

また、『海辺のカフカ』のベトナム語版の *Kafka bên bờ biển* (2012) の訳者ズン・トゥン Dương Tường は「訳者の後書き」で、次のように述べている。

個人の経験から言うと、(文学)作品を重訳する時は、異なる二言語の訳版を基にして、意味不明の箇所は (ST を) 対照して参考にすべきだ。これは翻訳の誤りを抑える助けになる。(*Kafka bên bờ biển*, 2012:534)

要するに、三視点对照の重訳のメリットは、理論的に説明できるだけではなく、実践の専門家にも公認され称賛されている。ただし、三視点对照の重訳を実現する際に、媒介テキストが多ければ多いほど良いというわけではない。「三視点」の対照にした理由について、まず「三つ」の要素から成りたつ情報の比較・交換のモデルは理論的にバランスが良いものと判定できる。この発想は川田 (2008) の文化人類学の研究での「文化三角測量」という方法論、そして『Triangulating Translation』(Alves ed., 2003) 翻訳の認知過程についての研究から発展させたものである。三つの対象があるのは客観的に比較するのに最低限の数であるだろう。また、翻訳の実践から見ても、3 言語のできる翻訳者は 4、5 言語の人より確実に多いと予想される。すなわち、四・五視点对照より「三視点对照の翻訳法」は実現しやすいのではないかと考えられる。ベトナムの話に戻すと、前に挙げた例で『海辺のカフカ』のベトナム語版でも、英語訳とフランス語訳と日本語原文を使ったと言っても、実際に英語が主な底本として扱われ、フランス語訳と日本語原文を参考するだけであった。その場合も三視点を対照した翻訳と考えても良いだろう。

三視点对照の翻訳法の効果を明確化するには、出版の方針や翻訳者の選択等関連する要素をよく検討しなければならない。特に、どの媒介翻訳を使い、どの国の文化視点を対照すればよいのかという問題は出てくるだろう。こうした視点間の類似・相違関係の原因と

影響については、第 7 章で論述する。

5.5 まとめ

重訳の分類法を整理して提案し、異文化理解という観点から重訳の利点について実例を用いて検討してきた。本章の論点は、次の 2 つにまとめることができるだろう。

一つ目は、翻訳の特殊な種類である重訳は異文化理解の一手段として認めることができる。TL 文化と参照点の関係に基づき重訳の分類を検討したところ、二視点の重訳、三視点の重訳及び三視点対照の重訳という三つの変形が確認できた。また、直接翻訳と通常重訳の隣接形式として三視点対照の翻訳も発見できた。三視点対照の重訳・翻訳は「三視点対照の翻訳法」という総称で呼ぶことにする。

二つ目は、異文化を解釈して表現する時の誤解や訳漏れ・誤訳を改善するには、三視点対照の翻訳法という種類がひとつの有用なモデルとして推奨できるのではないかという点である。三視点対照の重訳では ST と媒介翻訳という二つの参照点があるため、最終的な重訳の質がかなり補正でき、他の種類の重訳より優越することが考えられる。この点は、第 6 章で実例分析により検証する。

第6章 ベトナムにおける日本文学の重訳の事例分析

様々な背景の下で、異文化要素がどのように翻訳されているかという問題を慎重に検討することは、翻訳をより正確にするためにも重要だと考えられよう。本章は、重訳の問題点を発見していくために、ベトナム語重訳の事例に見られる誤訳や訳漏れを取り上げて分析する。また、重訳の優れたモデルと思われる三視点对照の翻訳法の利点を具体例で検討する。

6.1 事例分析の基準

1945年から2001年の間に、ベトナムで紹介された日本文学は、その殆どが近現代文学の作品であり、その中でも散文の小説・短編というジャンルが圧倒的に多い（グエン, loc.cit.）ため、本章では、現代の日本文学の散文を主な分析対象とする。これまで述べてきたように、ベトナムでは中国語、ロシア語、フランス語、英語を媒介言語とする重訳が多かったため、重訳の具体例分析の対象として、中国語訳を介した『氷点』（三浦綾子）の Liêu Quốc Nhĩ 訳（1972）、ロシア語を介した『無影燈』（渡辺淳一）の Cao Xuân Hạo 訳（1986）、『雪国』（川端康成）のフランス語版から訳された Ngô Văn Phú & Vũ Đình Bình 訳（1995）、『山の音』（川端康成）の英語版から訳された Ngô Quý Giang 訳（1989）、『ノルウェイの森』（村上春樹）の英語版から訳された Trịnh Lữ 訳（2006）を中心として分析する。さらに三視点对照の翻訳法の事例として、『金閣寺』（三島由紀夫）の原文と英語版から訳された Đỗ Khánh Hoan & Nguyễn Tường Minh 訳（1971）、『海辺のカフカ』（村上春樹）の英語版とフランス版から訳され、原文を参照した Dương Tường 訳（2012）を取り上げる。これらの作品は日本の代表的な小説家の作品であるか、またはベトナムで有名な翻訳として知られている作品である。その他、古典文学の『源氏物語』や俳句等英語版からのベトナム語訳も一部、事例を出して分析することにする。

また、TT が重訳である場合は、ST から離れることが懸念されるため、実際には ST の内容が如何に移転されているかに注目する必要がある。その反面、この重訳の TT は TL の一般読者にとって、アクセスできる原文の唯一の「代わり」であるに違いない（Dollerup, 2006: 76）ため、文学作品或いはせめて芸術的文章として機能することが期待されるだろう。そのため、日本文学のベトナム翻訳作品から例文を抽出し、分析する際に、次の2つの観点から評価する。

第一の観点としては、TT は形式的に ST とどの程度類似しているかを見ていく。ここでは、形式的な忠実性とは、日本語の単語の綴り・音韻や日本語特有の表現を出来るだけ再現しつつ訳すこととする。Koller (1989: 100-104) の分類では「形式的等価」である。

第二の観点としては、内容的に ST が TT の読者にどのように理解されているのかを考察すると共に、TT の読者に対する文学的効果を評価する。これは Nida (1964) の「動的等価」、ないしは Koller (1989: 102) の「語用論的等価」に近い側面である。詳しくは ST の意味内容が正確に伝わるかどうかを見ていく。また、TT のベトナム語に不自然さや無理な表現が見られないか、文学的であるかどうかということも評価する。

そして、三視点对照の翻訳法の事例では、さらに MT の役割にも注目する。具体的に MT が TT にどのような影響を与えるか、ST の内容を伝えるためにどの程度役立っているかを検討する。

ベトナム語訳の事例を分析する際、便宜上、日本語原作を ST、ベトナム語訳を TT、また中国語、ロシア語、英語、フランス語から重訳したベトナム語訳を TT_中、TT_露、TT_英、TT_仏 とする。また、日本文化がベトナム語版でどう伝わっているかを調査するものであるため、媒介言語版の底本は基本的に分析の対象には入れない。ただし、部分的に英語訳だけは参照する。さらに、分析対象は単語とフレーズのレベルのみに絞って論じる。原文に注意が必要な部分は下線部で示す。ベトナム語の引用文には（ ）の中に参照のために執筆者による直訳も付加する。

6.2 重訳の問題

重訳の問題点を、その要因により整理し分析しておく。まず、先行研究での批判（第 2 章 2.2 を参照）、及びベトナムにおける日本文学の実際の重訳（第 5 章を参照）に基づいて、重訳の問題を確認すると、先行研究に見る批判的言説では「最初の翻訳での間違いは重訳に持ち越され、原文から離れるほど間違いとゆがみが加わる」という考えがあった（St André, 2013 :181）。そこから、重訳の第一の問題点として、直接翻訳の誤訳等が引き継がれるという問題が存在することが確認できる。次に、第 4 章で論述したベトナムにおける日本文学の重訳の全体状況から生じる重訳の問題点としては、様々な媒介言語を介するこ

とにより固有名詞の表記が不統一になっている問題、及び時代的制限により文化的な概念を改変して不正確に訳してしまう問題がある。この二つの問題は重訳のみに起こる問題とは限らないが、ベトナムの日本文学の重訳の実践に残っている課題である。

6.2.1 直接翻訳に引き継がれる問題：誤訳・省略追加等

先行研究において指摘されているように、重訳では媒介翻訳から、誤訳・変更や省略・追加が受け継がれるという問題がある。

A. 誤訳・変更の問題

すでに述べたように、通常翻訳の基本モデルはSTとTTに関わるものである。その翻訳、いわゆる直接翻訳の本質はSLの文化的視点とTLの文化的視点を取り、二視点翻訳である。しかし、直接原文から訳したとは言え、完全に誤訳・訳漏れを排除できるわけではない。むしろ、完璧な翻訳はないと考えることが妥当ではないだろうか。日本語原文から訳され、英語圏でかなり好評であった *South of the Border, West of the Sun* (1998) や *Norwegian Wood* (2000)⁴⁸でも塩濱(2007a, b)が指摘しているように、STからの「誤訳・変更」が数多く含まれている。直接翻訳が常に最良の訳出法であり、間接翻訳より優越するという見方には疑いが出てくるだろう。ただし翻訳では、翻訳者の意図による変更があり得るため、誤訳であるかどうか判断しきれないこともあるが、ここに取り上げる例文ではSTからどのように外れているかを検討する。こうしたズレを含んだ直接翻訳に基づいて訳される重訳は、問題が一段深刻になると考えられる。

英語訳を介した『ノルウェイの森』(Birnbau 訳, 1989)のベトナム語訳(Hai Thanh & Hanh Lien 訳, 1997)は英語訳の欠点を受け継いだ。例えば塩濱(2007b: 293-296)は漢字の間違いが原因と思われる誤訳として、STの石田玲子という人物が英語版でReiko Ishiiと訳されている点を指摘しているが、このMTに基づいたTTでもReiko Ishiiとなっている。

また、以下の例では作品の内容を理解するのに障害と思われる「誤訳」が起きている。

《例1》ST: はじめて直子に会ったのは高校二年生の春だった。(ノルウェイの森, 上 40)

MT: I first met Naoko when I was in the sixth-form at school. (Rubin 訳, 26)

TT 英: Tôi gặp Naoko lần đầu tiên lúc còn học lớp Sáu trung học. (2006, 58) (私が直子にはじ

⁴⁸ 村上春樹著『国境の南、太陽の西』『ノルウェイの森』の英訳。

めて会ったのは中学校の6年の時だった。)

これは主人公の人生を変える大事な出会いであるが、TT と ST の間に大きなギャップが生じた。ベトナム語訳は「中学校の6年」となっており、主人公の年齢が12～13歳ごろと理解されてしまう。確かに日本、イギリス（英語訳はイギリス版）とベトナムの教育体制の違いによる誤解と考えられる。イギリスの「the sixth-form」というのは、日本の高等学校に当たるため、ST と同様に16～18歳の学生であることがわかる。多分ベトナム語の訳者はMTを解説し間違えて訳したのかも知れない。また、STにある「春」という時間の表現は訳がなくMTとTT_英にも消えている。こうしたほんの小さなことではあるが、人物について誤解を招く芽になると考えられる。

B. 省略・追加の現象

省略は重訳で多く発生する問題である。具体的な一例を以下に示す。

《例2》ST：水田は温泉宿で頓死をした。[葬式の時に、旧友たちは鈴本のいわゆる極楽往生だとささやき合った。しかし、若い女を連れこんでいたからと言って、水田の死はどうしてそうと推量されるのか、後で考えると少し怪しい話しだった。でもその時は、相手の女が葬式に来ているか等と好奇心を働かせたりした。女は一生いやだろうと言う者があり、もし男を愛していれば、女も本望だろうと言う者があった。]（『山の音』p.202）

TT_英: Mitzuta đã chết ở khách sạn trong khi an dưỡng - một cái chết "điện" / như bạn bè của ông ta bình phẩm. [省略された文章]（水田は休み中にホテルで「電気」的死をした／彼の友だちたちが噂していたように。）

“một cái chết "điện"”というのは当時のベトナム語の俗語と判断できるが、現在のベトナム語では意味が不明な言葉であるという。

ここで、[]の中は水田という人物の葬式でのうわさを述べる4つの文章であるが、ベトナム語版では完全に省略された。よって、どうして水田が死んだか、読者には理解できないだろう。性行為の最中の死を意味していたため、検閲によって削除されることを恐れ

て自主規制したのかも知れない。あるいは、媒介言語版 MT_露で省略された部分である可能性も考えられる。同作品で他の箇所でも、会話の省略はよく見られる。また、ベトナム語訳 TT で波線を引いた部分は日本語の原文にはない追加された部分である。

とりわけ、ベトナム語版の『山の音』(川端康成)の第二節の「蟬の羽」と第三節の「雲の炎」だけで省いた文と段落を合わせると、58 行もあった。これらは、地名(東京駅)や物事の陳述(魚屋での話)、それに人物の感想の描写である。そのように数多くの省略を行っても、作品全体の内容を理解するのに大きな影響はないとみられるが、微妙に個別の人物、物語の挿話等、特に原文に対する印象や感想を変えることになるだろう。

以上の例では、省略問題は媒介言語の翻訳に依存することによる制限であると考えられる。ベトナム語の他の重訳書でも、省略現象と追加において、明らかな翻訳の誤り、あるいは混乱が見られる。

次に、追加の現象を観察していく。文法的補足を示す典型的な例として、日本語に義務的ではない単数・複数の区別は、ベトナム語訳では英語訳と同様に原則的には明記しなければならない。

《例 3》ST: 「もちろん、時間さえかければ僕は彼女の顔を思い出すことができる。小さな冷たい手や、さらりとした手ざわりのまっすぐきれいな髪や、やわらかい丸い形の耳たぶやそのすぐ下にある小さなホクロや…」(『ノルウェイの森』: 9-10)

MT: True, given time enough, I can remember her face. I start joining images - her tiny, cold hand; her straight, black hair so smooth and cool to the touch; a soft, rounded earlobe and the microscopic mole just beneath it; (Nowergian Wood, 2000 : 5)

TT 英: Nói thật là nếu có thời gian, tôi vẫn có thể nhớ lại gương mặt nàng. Tôi phải chấp nối các hình ảnh vào với nhau- bàn tay lạnh tí xíu của nàng; mái tóc đen và đuôi thẳng của nàng, sờ vào thật mịn và thật mát; một cái thủy châu tròn trịa mềm mại và một nốt ruồi bé tí tạo ngay bên dưới... (Rừng Na-uy: 20) (実は時間があれば、彼女の顔が思い出せる。私はイメージを連結しなければならない。彼女の冷

たい小さい手。彼女の真っ黒いストレートの髪の毛。触るとさらさらすずしい。一つのや
わらかい丸い形の耳たぶ、一つのホクロ)

下線を引いたところは、MT と TT_英で情報の補充が見られる項目である。ベトナム語は原則的には数、代名詞という文法的範疇を明らかにする必要があるが、実は英語やフランス語等の西洋言語ほど厳密な条件でもない。文脈によっては省略しても意味が通じることもある。この箇所は日本語の原文そのままを補足なしにベトナム語に訳しても、読者の理解に支障はないと思われる。しかしベトナム語への重訳では、単数形の文法的明示化と補足説明の追加が盛り込まれた英語版の解釈と表現法がそのまま引き継がれた。また、英語訳で波線を引いたところは、ST にない追加の箇所であるが、それがそのままベトナム語にも持ち込まれている。英語版のみに依存したベトナム語版翻訳者には、想像力が英語版の解釈に限定されることになり、他の解釈の可能性が閉ざされる。こうした制限を越えるには、ST と対照することが重要な作業であると考えられる。

媒介言語の翻訳に依存することによる文法的補充のみならず、原文にない説明を加えることがある。次の文章は意味的補足についての例である。

『ノルウェイの森』では、日本社会の背景について触れた文章は以下の通りである。

《例 4》ST: 修学旅行っていや京都の高級旅館を借りきって塗りのお膳で懷石料理食べるし、年に一回ホテル・オークラの食堂でテーブル・マナーの講習があるし、...私の学年の百六十人の中で豊島区に住んでる生徒って私だけだったのよ。私一度学生名簿を全部調べてみたの。みんないったいどんなところに住んでるんだろうって。すごかったわねえ、千代田区三番町、港区元麻布、大田区田園調布、世田谷区成城.....もうずっとそんなのばかりよ。(ノルウェイの森, 上 111-112)

日本事情に関する部分（下線部）は英訳において、解説を補充し次のように訳された。

MT : For instance, if we went to Kyoto, they'd put us up in a first-class inn and serve us tea

ceremony food on lacquer tables, and they'd take us once a year to the most expensive hotel in Tokyo to study table manners... Out of 160 girls in my class, I was the only one from a middle-class neighbourhood like Toshima. I looked at the school register once to see where the others lived, and every single one of them was from a rich area. (Nowergian wood, 78-79)

そして、英訳を介してベトナム語訳は以下のようなものである。

TT 英: Ví dụ nếu chúng tớ đi Kyoto, họ sẽ đưa chúng tớ vào một nhà hàng hạng nhất và bung ra những món ăn trà đạo bày trên bàn sơn mài và năm nào họ cũng đưa chúng tớ vào khách sạn đắt tiền nhất ở Tokyo để học cũng cách ứng xử trong bữa ăn... Trong số một trăm sáu mươi đứa con gái cùng năm, tớ là đứa duy nhất sống trong một khu trung lưu như Toshima. Đã có lần tớ lục danh sách học sinh ở trường để xem bọn nó sống ở đâu, hoá ra đứa nào cũng ở những khu giàu có cả. (Rùng Na Uy p.377) (例えば京都に行くなら、彼らは一流のレストランに連れて行って漆のテーブルで茶道の料理を出すこと、そして私たちがテーブル・マナーを学ぶために、毎年彼らは東京の一番高いホテルにも連れて行って...百六十の同級生の中で、私は豊島みたいな中流の地域に住んでいるたった一人である。みんなどんなところに住んでいるのかを調べるため、一度学生名簿を全部調べてみたが、やっぱりみんなはお金持ちのエリアに住んでいる。)

以上の例では、日本文化特有の物事に解説を追加する訳法が見られる。「旅館」は英語訳では「inn」だが、ベトナム語訳で nhà hàng (=「レストラン」) になった。また、「懷石料理」を「(漆のテーブルで出される) 茶道の料理」に変えたのは日本文化らしい度合いを強調するためではないかと思われる。Franco (1996) の訳法分類によると、英訳もベトナム語訳も明らかに「旅館・inn・nhà hàng」では Absolute universalization (普通名詞で代用する法)、「懷石料理・tea ceremony food・món ăn trà đạo」では Limited universalization (TL の文化内の知られた語で代用する法) を使用している。逆に考えれば、ここでは、日本(正確には『ノルウェイの森』の背景になった 1960 年代の日本)の事情がよく理解できる人でな

ければ、原文に現れる日本の伝統的高級な料理や東京の地域の名前が出てきても人物の台詞の含意が全く伝わらないだろう。それに代わり、その含意が伝わるように明示的に説明するのは効果的で妥当な訳出法ではないかと考えられる。しかも、単に訳法の選択という問題と見られるが、このようなプロセスでは、重訳と原文の間のズレが段々大きくなる危険は否定できない。

こうした問題は、重訳の翻訳者が媒介翻訳に完全に依存して、他の選択の余地がないことから生じるものである。誤訳だけではなく、訳漏れ・省略・追加という問題も受動的に受け継ぐことが回避できない恐れがある。

6.2.2 媒介言語の差異による問題：固有名詞の表記の不統一と漢語の問題

前述したように、ベトナムにおいて、日本文学の重訳が文化の伝播において重要な役割を演じてきたことは歴史的な事実と認められる。この節では、異文化要素の翻訳方法に着目し、文学作品の中から文化を伝えると思われる箇所を比較分析する。

異文化要素のうち、固有名詞と日本文化特有の名詞に絞って具体例を抽出する。それらの項目が、ベトナム語への重訳と直接翻訳において、いかに訳されているのかを考察する。分析する目的は、誤訳等を指摘して批判することではなく、そこで翻訳者が用いた翻訳方法を解説すること、さらに時代に関わる日越の翻訳の顕著な問題も視野に入れて、重訳の現状を確認することにある。

A. 固有名詞の翻訳

最初に文学作品の重訳版と直接訳版の中で、固有名詞の翻訳を考察する。具体的に、中国語、ロシア語や英語の媒介言語を使った『氷点』、『無影灯』、『山の音』、『雪国』のベトナム語版では、日本の人名、地名がどのように翻訳されたかを見ていく。

上記の5作品から、登場する人名及び地名等の表記の例を抽出し、表1にまとめる。類似の度合いを比べ易くするために、ベトナム語訳（漢越語の部分だけ）の発音をカタカナで明記する。表中の(?)印をつけた箇所は、原作における名前の発音と大きく異なるため、重訳での名称の正確さが問題となることを示す。そのずれが重訳であることから生じたのか、あるいは印刷作業中のミスによるかのいずれかであると考えられる。そして、(*)印の箇所はベトナム語の綴りではなく発音し難いものである。

重訳版の訳出法を比較分析する際に、漢字活用の有無で翻訳法を大きく 2 種類に分ける。前者の 2 項目で頻出する訳出法として、まず、日本語の音を「Tokyo」や「tatami」のように漢字を活用せずローマ字表記するケースがある。本稿では日本の名詞のローマ字表記を保持する方法を便宜上、翻訳法①とする。また、現在ベトナム語は漢字を使わず、アルファベットの表記を使用しているものの、漢字のベトナム語の音、いわゆる漢越語は定着しており日常のベトナム語にも通じる。ゆえに、日本語の漢字の名称は、(かつて漢字を使用した)ベトナム語の翻訳では、漢越音に置き換えることが可能である。このような日本語の漢字をベトナムの漢越語の音に適応させる方法により、漢字を活用する翻訳法②とする。

第 6 章・表 1 固有名詞の訳出比較一覧

作品名	底本の言語	翻訳年	日本語 (原文)	ベトナム語訳	参考
『氷点』	中国語	1972 年	辻口啓造 辻口夏枝 北原邦雄 辻口ルリ子 村井靖夫 京都	ライ コイ タオ Lại Khôi Tạo ハ チ Hà Chi バツク グ ン Bắc Nguyên ベ レ bé Lê ラム テイン フ Lâm Tịnh Phu キン ド Kính Đô	= 「頼 (ライ)・啓 (コイ) 造 (タオ)」→②+「口」を削除 = 「夏・芝」→②+削除 = 「北・原」→②+削除 = (ちゃん) + 名前→②+ベトナムの名称の呼び方に変更 = 「林」? + 「靖夫」→? + ②+削除 →②
『無影燈』語	ロシア語	1986 年	宇野かおる 志村倫子 花城純子 石倉由蔵 行田祐太郎 道玄坂	Kaôru Unô Nôrikô Simura Đzyunkô Hanadzô* Yôsidzô* Isikura Yutarô Ghyôda* Đoghendzuka*	→①+ベトナム語の声調 名字の順番が変わる
『山』	英語	1989 年	尾形信吾	Singo Ogata	→①

の音』			谷崎英子 幸四郎 羽座衛門 菊五郎 品川	Ayco Tanizaki Cosinp* (?) Utzacmon* (?) Kikuguro Siganava	名字の順番が変わる
『雪 国』	フランス 語	1995 年	島村 駒子 東京	Shimamura Komako Tokyo	→①

表 1 に見るように、ベトナム語版で日本の固有名詞の訳し方が定まっていないことが明らかになった。それぞれ媒介言語によって様々な綴りと表記があり、原文と様々なずれが出るという大きな問題が発生している。

中国語を介した『氷点』の訳で、固有名詞が全て漢越語で置き換えられた例では、京都が *Kinh Đô*、すなわちベトナム語で単なる「みやこ」を意味する言葉になった。ただし、日本人の名前は、4 文字である場合は、ベトナム語訳で 1~2 文字を省略し、3 文字か 2 文字の漢越語になってしまうこともある。例えば辻口啓造の「口」がなく、*Lại Khởi Tạo* になり、北原邦雄の「邦雄」がなく、最初の 2 文字の *Bắc Nguyên* だけ残された。村井靖夫の「村井」は *Lâm* (林) + *Tĩnh* (靖) + *Phu* (夫) になった。「頼」や「林」という中国的な姓になったのは確かに中国語訳から受け継ぐ問題だが、「辻口ルリ子」が一文字でのベトナムの人名の呼び方に適応される *bé Lê* へと訳されたのは興味深い例である。

上の例で述べたように、人名・地名を漢越語で全部、または一部を置き換え、変化させる訳法は、音の面で日本語の読み方とまったく異なる音になっただけでなく、ベトナム人の感覚からすると中国語らしい名前になってしまった。これでは、日本のことが徐々に分かるようになっている現在のベトナム人読者に、違和感を与える可能性が高いと考えられる。

次に、ロシア語から重訳された『無影灯』では、日本の人名・地名の表記に“ô”や“d”というベトナム語の特有の声調と文字を加えるという工夫がなされた。しかし、*Dzyunkô Hanadzô**、*Doghendzuka** 中の“Dzy”や“dzu”という特殊な組み合わせは一時ロシア語の学習のため、通用していた表記である。今のベトナムでは、ロシア語がそれほど普及していないため、これはベトナム人には馴染みの薄い表記だと確認できる。ゆえに、以上の

例は現在ロシア語や外国語が出来ないベトナムの一般人にとって、発音し難く違和感を抱かせる箇所（(＊)で表示した所）である。

これに反して、英語とフランス語を介したベトナム語訳、及び日本語から直接訳されたものでは、日本の人名・地名の発音はローマ字化され、保存される傾向がある。ただし、以下のことには注意が必要である。

欧米文化の媒介言語版では、人名の場合は、名と姓の順番で、例えば尾形信吾が *Singo Ogata*、谷崎英子が *Ayco Tanizaki*、宇野かおるが *Kaôru Unô* のように訳される。実は、ベトナムの人名の順は姓と名前であり、日本や中国と同様である。したがって、上の順番で訳されると、読者は日本人の姓と名前を逆に理解してしまう可能性がある。

また、同様に英語版からの重訳である『山の音』のベトナム語訳と言っても、人名・地名の訳し方にずれも見られた(*Ayco Tanizaki, Siganava*)。これは元々、ベトナム語訳の翻訳者の綴りの間違いか印刷作業のミスと判断されるだろう。

以上、様々な媒介言語から間接的に訳されたものと直接日本語原文から訳された固有名詞を見てきたが、文学著作において、人名と地名という固有名詞は内容の面であり影響を与えるものではないものの、作品世界または作品のストーリーで描写される社会背景や雰囲気を想像するには大きな影響力があると考えられる。例えば『氷点』のベトナム語訳の場合のように、登場人物と地名が全部漢語の音で置き換えられ、日本の雰囲気があまり残らないと、読み手はそれを中国の文学作品だと誤解する可能性がまったくないとは言えないだろう。

これまで見てきたように、媒介言語の違いによって、最終のベトナム語訳で日本の固有名詞の統一的印象が生まれにくいという状態が明らかになった。このため、異なる媒介言語から訳された重訳で日本文学を観賞する際に、読者は日本文学か他の文学かについて混乱が生じる可能性がある。

B. 漢語の翻訳の活用に関しての問題

これはベトナムの特殊な問題と言える。第3章で述べたように、紀元前1世紀から、漢字は中国の社会諸制度や宗教的な思考と共に、文化的「同化」政策として、ベトナム社会に導入された。ベトナムは漢字文化圏に属する国の一つである。漢語の翻訳は、英語、フランス語等という非漢字圏の言語を介して訳す時の代表的問題である。また、日越語間では、漢字の要素がある語彙が多いという共通点がある。ベトナム語の語彙において、漢語

要素は優位な部分を占めているからに他ならない。しかし、ベトナム語は中国語とは異なる系統に属しているため、漢字を用いる際に、ベトナム語の音で発音するという「越音読法」を使わなければならなかった。これはベトナム漢語、いわゆる「漢越語」の誕生に繋がっている。現代のベトナム語の語彙の約7割は漢越語であり、その中の大部分は漢字表記が可能であるという（ファム, 2001）。こうして、日本語とベトナム語は文字が共通していないにもかかわらず、漢語が多い点は共通の特徴であると言えよう。漢語があるからこそ、欧米言語より、日本語とベトナム語の間には、漢字の言葉の意味と語感が共通する箇所が多いと判断できるだろう。そこで、この節では、ベトナム語訳における日本の漢語に注目し、考察する。

『山の音』の「島の夢」(二) という節では、能の仮面を描写する文章がある。

《例5》 ST:「これが、慈童、こちらが喝食と言うんだそう。両方とも子供だ。...前髪が描いてあるだろう、銀杏型の。元服前の少年のわけだよ。」 (『山の音』 pp.203)

TT 英: “- Đây là một chiếc “Djido”, còn đây là chiếc “Casiki”. Cả hai đều là mặt nạ trẻ con...

Hình chiếc lá cây gbinco, anh có thấy không? -Nghĩa là để diễn tả một cậu bé chưa đến tuổi thành niên.” (Tiếng rên của núi, p.38) (: これが、慈童、こちらが喝食と言う。両方とも子供だ。...gbinco*の葉の形だと見える? というのは未成年の男を描いた。)

ベトナム語の重訳では、能の面の「慈童」(ローマ字=Jidou) は“Djido”になり、喝食(ローマ字=Kasshiki) は“Casiki”になった。確かに訳者は原文(この場合は媒介言語の英語版)の音を模倣してベトナム語の表記にした。それもベトナム人にとって、発音し難い上に、原語の漢字の名前が持つ連想がなくなってしまう表記法である。

この場合は、もしベトナムの漢越語の音素を用いて訳した場合、より良い効果が期待できるだろう。具体的に、「慈童」(jidou) を“^慈Từ ^童Đông”(Đông は「子ども」という意味の漢越語)と訳し、「喝食」(kasshiki)を“^喝Hát ^食Thực”(“thực”は「食べる」という意味)と訳す際は、必ずしも言葉の意味を正確に判断することが簡単になるとは言えないものの、能という劇芸術の伝統的な古さを読者に伝えることになるだろう。さらに、銀杏(ローマ字=ichou) はベトナム語版で“gbinco”(これもベトナム語の綴りで発音できない言葉である)になった。この植物は中国の漢方薬として、漢越語音で“ngân hạnh”ガン・ハインという通称でよく知られている。恐らくベトナム語の翻訳者も媒介言語に訳出された植物名を充分

に理解できず、わざわざ“gbinco”という音を使用したと思われる。その結果、読者がその植物のイメージを想像する妨げになる可能性が高くなった。

また、『源氏物語』のベトナム語訳 *Truyện kể Genji* (1991) は英語の Seidensticker 訳を介した訳である。ニャット・チェウ (Nguyễn ed., 2008: 65-68 参照) はその訳において、最初の章のタイトルの訳し方を「作品の東洋的な雰囲気壊した」と指摘した。

「桐壺」の章の英語訳「The Paulownia Court」に依じて、TT: *Triều đình Paulownia* であった。ベトナム語の訳語は「Paulownia 王朝」を意味し、英語の単語を残しながら部分的に Court をベトナム語訳で置き換えた。この訳し方は意味的な面で不明であり、さらに元作品の古典的雰囲気を消してしまった。読者の文化的理解に全く役に立たないと考えられる。訳者は日本の平安時代と『源氏物語』をはじめ、日本文化についての知識が不足していたことを示す一例である。

要するに、東洋的な文彩を保とうとする翻訳者の意識を読者が理解するためには、漢越語を使うことが有意義であると考えられる。この操作は、ヨーロッパ言語の英語やロシア語を媒介した訳では若干運用し難いと思われる。その場合は、日本（東洋）の色彩を再現するのは、翻訳者にとって難題に違いない。

その反面、中国語から翻訳する時には十分に発揮できるが、漢字の多用の危険性も潜在している。上述したように『氷点』の中国語を介したベトナム語訳では、地名と登場する人物の名前は漢越語の音で訳され完全に置き換えられた。日本の小説であると気づく手がかりとしたのは2箇所しか残っていない。一つ目は、訳書のカバーに「AYAKO MIURA」という著者名を表示することである。二つ目は夏枝という人物の服を描いた段落で2箇所に出た“kimono”という言葉であった。そのため、作品の中の日本らしさが減り、読者は原作の背景（土地と人物の名）を想像し難くなるだろう。

このように、（通常）重訳の場合は、どれが文化的事物でそのまま音を訳すべきか、また漢越語の要素を活用するのかを判断することは翻訳者を悩ませることになるだろう。

6.2.3 時代的制約による問題：文化的な概念の改変と不正確な訳

日本の文化的概念を表現する語彙としては固有名詞だけではなく、日本語の普通名詞にも言及しなければならない。コタツ、畳や障子のような日本人の生活で一般的な家具、着物や浴衣等は、外国人にとって日本文化固有の名詞として受け入れられるに違いない。

文化的概念を表す名詞の翻訳については、まず日本語の音をそのまま翻訳に導入する方

法がある。『無影燈』のロシア語訳を経由したベトナム語訳の“Đèn không hắt bóng”の中では、日本の料理名の「さしみ」、「すし」や日本の精神的な事物の「いけばな」は“sasimi”, “susi”, “ikebana”として訳されている。確かに、このような世界中に知られ、普及している日本の事物は、MT_露でもその音を模倣し、繰り返す翻訳法が徹底されていると考えられる。しかし、ベトナム語訳が出来あがった 1980 年代というのは、日本文化や日本の事についての情報が非常に少ない時代であった。そのため、翻訳者や多数の読者にとって、“sasimi”, “susi”, “ikebana”は具体的にどのような物事か、不詳で完全に捉えてはいなかったものと考えられる。

読者の理解を助けるために、日本独自の事物を指す名詞を訳すに当たり、事物を説明する注を加えて訳す方法も採用された。『雪国』のフランス語からの重訳である Ngô Văn Phú & Vũ Đình Bình 訳 (1995: 120)では、表 1 で見た通り、人名と地名の表記がかなり日本の原文の発音（ローマ字の読み方）に近いが、「芸者」という言葉の訳に対して以下の脚注がある。

TT_仏: “Geisha: Người đàn bà làm nghề dạy nhạc, múa, nghệ thuật tiếp tân cho các cô gái Nhật.”
(：芸者：日本の女性に音楽、舞や接客術を教えることを仕事にする女)。

この注の説明は、「芸者」という概念について明らかに誤解している。この「芸者/geisha」の解説は、ロシア語訳を媒介し出版された *Đốm lửa lạc loài -Truyện tình Nhật Bản* (1988: 13) という川端康成及び三浦哲郎の短編の翻訳集での、「geysa」の解説と同じである。つまり、『雪国』のベトナム語版の翻訳者は、おそらく *Đốm lửa lạc loài -Truyện tình Nhật Bản* の解説を参考にしたと考えられる。このような重訳の例では、誤った注が他の翻訳作品で採用されないとは限らず、日本文化の概念が間違ったまま伝えられる恐れがある。

このような文化の解釈の不足や不正確さは、日本に関する情報不足という当時のベトナム (1980 年代以前) にとってやむを得ぬことであったと推測される。それらの問題は三視点对照の翻訳法で克服できると期待して良いと考える。

6.3 三視点对照の翻訳法のメリットを表す事例

以上の論述に基づき、三視点对照の重訳は異文化理解の利点が活かせるとして重訳の新たな可能性を開くモデルではないかと考えられる。その論点を証明するために、この節で

は三視点对照の重訳・翻訳、いわゆる三視点对照の翻訳法は通常翻訳（すなわち二視点の翻訳）と一般的な重訳（すなわち二視点の重訳）に比べて、どの程度優れているかを示すために、実例により分析する。

ただし、三視点对照の翻訳法の事例の分析では、困難の一つは TT が実際に MT と ST からどの程度参照しているかということは明示されていないものである。それ故、確かな根拠を求めるために、翻訳本の表紙に載っている翻訳の情報や後書きでの翻訳者の「宣言」、研究者の意見に基づいて、参照した箇所を確認する。そして、文化的視点の参照・変換作業の効果をコメントするが、その翻訳作品の全体に及ぼした影響についての評価は控える。さらに MT の役割にも注目する。具体的に MT は TT にどのような影響を与えるか、ST の内容の伝達をどのように助けるかを検討する。事例の提示の順番は 6.1 で検討した問題点に応じて、次の観点に立って論述する。

6.3.1 誤訳やミスを制限できる効果

タイ・バ・タン Thái Bá Tân とニャット・チェウ の俳句の翻訳を例にしよう。タイ・バ・タンは英語訳の底本のみから訳した。ニャット・チェウも英語訳を底本にして訳したが、それに俳句についての英語・フランス語の研究書を読んだ上、また ST の漢字の単語を調べて参考にした。

《例 6》： 千代女の俳句「朝顔に つるべとられて もらい水」の二人の訳はそれぞれ以下の通りである。

Thái Bá Tân (2013: 470) では、" Từ rạng sáng/ Tôi cầm chiếc xô như cầm con tin/ Xin nước （早朝から/人質を持つように（？）釣瓶を持つ/水をもらい） " と訳された。まず、「朝顔」は「早朝」だと誤解されてしまった。これは、確かに英語訳の「Morning glory! / The well bucket-entangled, / I ask for water.」 から、訳者は「Morning glory」という花の名前が理解できずに、時間の表現だと判断していた。

そして、2 つ目の文章に「人質を持つように」という解釈を追加訳したが、この俳句の内容とは全く違う方向になったと言えるだろう。

ニャット・チェウ (1994:18) の訳 "A hoa triêu nhan / Chiếc gầu vương hoa bên giếng / Đành xin nước nhà bên （朝顔/釣瓶は井戸の花と絡んで/近所から水をもらい） " では、「朝顔」はきちんと「hoa triêu nhan」（朝顔の花）と認識して訳された。これは複数の底本（MT と ST）

の使用、及び文化的な参考資料を調べた過程の結果であるに違いない。

Thái Bá Tân (2013) の詩集訳では、他にも文化視点を誤解した誤訳がいくつも見受けられる。その原因は英語の語彙力のみならず、日本の文化・文学伝統の知識が欠けているにもかかわらず、先行する翻訳を参照しなかったためと考えられる。

また、『海辺のカフカ』のベトナム語版の *Kafka bên bờ biển* (2012) は、まず英語訳に基づいて訳され、その後フランス語訳を参考にしてチェックされた。さらにこの二つの底本で異なった箇所については ST を参照したものであり、つまり「三視点对照の重訳」である。Duong Tường ズン・トウンは翻訳の過程において、英語訳とフランス語訳の間で違いがあるとき、ST と対照して解決したが、それを 15 箇所の注で説明している。ここではそのうち次の二つの例を紹介する。

ズン・トウンは作品に出てくるクラシック音楽のタイトルを訳す過程について、「ここで、Philip Gabriel の英語版では “*Xô nát cung Rê trưởng* (ニ長調のソナタ)” とされ、Corinne Atlan のフランス語版では “*Xô nát cung Fa thứ* (ヘ短調のソナタ)” と訳された。我々は (友人の) スズキコトナさんにチェックを頼み、それで英語版が正しかったことが確認できた」と述べている (*Kafka bên bờ biển*, 2012:535)。つまり、ST を確認することでベトナム語訳では最終的に英語版の情報を採用する決定をして、「ニ長調のソナタ」に対応する “*xô-nát cung Rê trưởng*” と訳されたのである。念のため、ST と TT を挙げておく。

《例 7》: ST : 「フランツ・シューベルトのピアノ・ソナタを完璧に演奏することは、世界で一番むずかしい作業のひとつだからさ。とくにこの ニ長調のソナタ はそうだ。」(『海辺のカフカ』上: 190, 下線部は筆者によって強調)

TT 英・仏・日: “Bởi vì chơi những xô-nát cho piano của Schubert cho hay là một trong những điều khó nhất trên đời. Đặc biệt là bài này, bài xô-nát cung Rê trưởng.” (*Kafka bên bờ biển*: 2012, 128)

さらに、別の箇所で 「You’re a regular Linus」 と訳された所はフランス語版では 「Comme Charlie Brown, dans la bande dessinée, qui emporte partout sa couverture?」 となっていて、ズレが見られる。日本語 ST を参照して確認すると、英語版のメタファーは表現が短く、変更されていることが明らかになった。ST では 「それじゃまるで、チャーリー・ブラウンの漫画に出てくる男の子が肌身はなさず持っている毛布みたいじゃないか」(『海辺のカフカ』

下: 152) である。英語圏で有名な漫画の『ピーナッツ』の中で、**Linus** といえば、主人公のチャーリー・ブラウンの友だちであり、肌身はなさず毛布を持っている男の子のことが連想できるのである。よって、英語版も ST と意味内容は同じである。ただし、フランスやベトナムでは、**Linus** という隠喩がそれほど一般的に定着していないと考えられる。ベトナム語訳では、結局 ST とフランス語版での「チャーリー・ブラウン」という固有名詞を含む表現を採用した。

TT 英・仏・日: “Giống như nhân vật trong truyện tranh Charlie Brown đi đâu cũng mang chăn riêng theo (どこに行っても毛布を持ってチャーリー・ブラウンの漫画に出てくる人物のように) ?” (Kafka bên bờ biển: 359)

また、こうした例から、参照点として複数の翻訳がある際に、重訳の訳者には先行の訳者の誤訳や変更に対して、どちらの表現を採用するかに関して、より自由で積極的な選択肢が可能になると考えられる。これは TL の文化背景で最も受容されやすく相応しい訳法が採択されることとつながるだろう。

要するに訳している時、人物の気持ちや話の流れで少し不自然な所に翻訳者が気づくことで訳漏れ・ミスが発見され、直ちに修正できるわけである。このような時、ST や他の MT を参考にする、すなわち三視点对照の翻訳法を採用すれば、TT にとってかなり有効な翻訳ができると考えられる。

6.3.2 文化的に妥当な訳を導く効果

6.2.2 (B) 節で論述したように、漢語の翻訳では、漢越語をどの程度使うべきかは重要な問題である。全然使わないことも多用することも読み手の文化的理解に影響を及ぼすことになるからである。この節では三視点对照のベトナム語重訳において、漢語の使用頻度が文化的理解に与える効果について検討する。

まず原文から直接翻訳し、英語を参照した『金閣寺』のベトナム語訳では、原文から直接訳されて、日本語の人名と地名の音がそのまま保持されているものもあるため、現在読んでも不自然には思われない。その効果や読者に与える印象を次の節の「漢語の訳法」で改めて詳しく検討する。

『金 閣寺』	日本語	1970 年	溝口 東舞鶴 金閣寺	Mizoguchi ド・ン Đông Maizuru キン カック ツー Kim Các Tụ	→① =② (Đông ^{ド・ン} は東の漢越語) +① →②
-----------	-----	--------	------------------	---	--

例えば、英語版を介した『源氏物語』のベトナム語訳 *Truyện kể Genji* (1991) の最後の章のタイトルは MT の「The Floating Bridge of Dreams」に依じて、TT は *Chiếc cầu mộng mơ bông bênh* であった。原文での「夢の浮橋」を参考にした上で、ニャット・チェウは「Mộng phù kiều」という訳を提案した (NguyễnThị Thanh Xuân ed., 2008: 68)。「Mộng phù kiều」は「夢・浮・橋」の漢越語である。この訳語はベトナム語にはなかった単語であるにもかかわらず、「Mộng=夢」に「phù=浮かべる」「kiều=橋」との意味が十分に伝わっており、響きも非常に古典文学的な表現である。この翻訳法は、小説全体の文脈と漢字圏の国の文学によく使われる修辞技法を考慮すれば、ST の多義性を維持することが出来たと言える。この「Mộng phù kiều」のようなニャット・チェウの訳語は『源氏物語』や平安時代文学の世界を開き、ベトナムにおける日本文学研究のキーワードになった。

以上の例から、ベトナム語訳はこの漢語という東洋の文化の特色を転移する作業に、満足のいく結果が得られると言えるだろう。特定の場合では音をそのまま伝えることより、漢越語の音で訳した場合には、読者は連想し易くなるだろう。その上、漢越語を使う際には、荘重な色調 (ニュアンス)、優雅な色調、威圧的/抽象的な色調、古風な色調という婉曲語法の効果が出ると言われる⁴⁹。したがって、ここで東洋的な文彩を保とうとする翻訳者の意識は、読者が理解するためには有意義であると考えられる。典型的事例は次に挙げる『金閣寺』の訳に見られる。

『金閣寺』のベトナム語タイトルは漢越語の *Kim Các Tụ* (1971, Đỗ Khánh Hoan & Nguyễn Tường Minh 訳)キン・カク・ツと訳されたおかげで、ベトナム読者の頭に「黄金で作られるお寺」のイメージが浮かぶだろう。それに対して、MT 英 (1956, Ivan Morris 訳)を媒介し、ST を参照したベトナム語訳は *Ngôi Đền Vàng* (1990, Lê Lộc 訳) (『金でのお寺』) である。なぜなら英訳のタイトルは *The Temple of the Golden Pavilion*、そして文中の「金閣寺」

⁴⁹ ベトナム言語学研究のサイト(2007/01/09) , <http://ngonngu.net/index.php?p=203>

は「The Golden Temple」(*The Temple of the Golden Pavilion* p.3) を用いているからである。
この「Ngôi Đền Vàng」 というタイトルで、ベトナム人読者にはタイやビルマ等東南アジア国の黄金で作られるお寺という想像の方向に移してしまう恐れがある。

Kim Các Tự には漢語の上手な使い方の例を他にも見ることができる。

《例 8》: ST: 金剛院は名高かった。それは安岡から歩いて十五分ほどの山かげにあり、高岳親王の御手植の栢や、左甚五郎作と伝へられる優雅な三重塔のある名刹である。(『金閣寺』 p.22)

TT 日・英: Kim Cương Viên (完全漢越語の音で置き換えた) vốn vẫn lòng danh. Viên được xây trong một hốc núi cách xa thôn làng Yasuoka (日本の地名の音を保持) chừng mười lăm phút đi bộ và được người ta biết đến vì cây cừ do Thân vương Takaoka trồng (役名を訳し+人名の綴りを使用) và ngọn tháp ba tầng trang nhã mà người ta vẫn cho là công trình tạo tác của Hidari Jingoro. (*Kim Các Tự* p.12) (: 金剛院は元々名高かった。その建物は安岡から歩いて十五分ほどの山かげにあり、高岳親王による植えた栢や、左甚五郎作と伝へられる優雅な三重塔で知られている)

ベトナムでは日本と同様に、仏教は中国から伝来し、全国で仏教のお寺も多く建てられた。そのため、「金剛院」の漢字のベトナム語の音を付けるという仕方で、読者には意味が通じ、簡単にイメージが浮かび、親近感を抱かせるだろう。漢字文化圏の知識を共有しない英語訳ではあくまでも“the Kongo Temple” (*The Temple of the Golden Pavilion* p.15) と訳さなければならない。結果として、英語版のみを使ったベトナム語の TT では“chùa Kongo” (こんご寺) という英語訳のローマ字表記をそのまま保持した。この訳し方は読者に不必要な負担をかけるだろう。

Kim Các Tự (Đỗ Khánh Hoan & Nguyễn Tường Minh 訳) において、明らかに日本特有の人名・地名を保持しながら、文化的な概念は漢字の意味が少しずれても、漢越語での概念を一般化し、TL の読者にとって馴染みがある名詞で置き換えるという柔軟な訳法が用いられ

る。要するに、原文と媒介翻訳を参照できることは、翻訳者により多様で豊富な表現の選択肢をもたらすことが、三視点对照の翻訳法は有効である証拠とみなせよう。

6.3.3 文学的創造の可能性を広げる効果

重訳のプラス面について、齋藤（2010: 174）では「重訳はオリジナルから遠く誤解や間違いをより引き起こしやすい点で情報という面からはマイナスだが、そうであるからこそ、翻訳され、さらに翻訳され多言語が重なり合う過程で、自己から飛躍できる可能性が増える」と述べている。この意見で示した重訳の問題は本論文の 6.2 節で指摘したものと同様であり、多言語・文化間の「創作的可能性」も 5 章で紹介した三視点对照の翻訳法の有効性とも共通点があると考えられる。ただし、三視点对照の翻訳法の場合なら、TT の正確さを保ちながら、翻訳者に創造の余地も与えることが出来る。

具体例を見てみよう。芭蕉の有名な俳句の「古池や蛙飛びこむ水の音」は英語 (Donald Keene 訳) に次のように訳されている。

《例 9》: MT: “The ancient pond
A frog leaps in
The sound of the water.”

ニャット・チェウの訳は日本語と英語訳で作品の意味を把握してから、以下の通りである。

TT 英・日：

“Ao cũ (古い池)

Con ếch nhảy vào (蛙は飛びこむ)

Vang tiếng nước xao.” (響く水音)

俳句の翻訳では、意味が十分に伝わるが、どの形式に訳すべきかは難しい問題とされている。まず、ベトナム語は孤立言語⁵⁰であり、俳句の音素の 5-7-5 という数は守り難しく、または守ってもあまり意味がないと指摘された (Nhật Chiêu 2008)。その代わりに、ニャット・チュウは声調が豊かなベトナム語の特徴から、訳出法を考慮した。ベトナム語の詩にとっては音韻の対応すなわち文章の音楽性が大事であり、欠かせない特徴である。「水の音」はベトナム語の語順で「*tiếng của nước* (音／の／水)」であるが、この場合は「*của* (の)」

⁵⁰ 1語が1形態素に対応する言語の類型である。

という所有の表現はベトナム語にやや不自然である。それ故、ニャット・チェウは「của」を略し、「tiếng nước」と「vang (響く)」という組み合わせを使った。特に、「vào (バオ)」と「xao (サオ)」では複合子音の「-ao (アオ)」を反復するという使用は水の余韻を模倣し、音声的に特別な効果を持たせた。また、この音を発音する時、口を丸くしなければならないことで、蛙が池に飛び込んだことで作られた水紋が広がっているというイメージを読者に思い起こさせるだろうと翻訳者は考えた (Nhật Chiêu, 2008)。

6.4 まとめ

本章では、具体的な翻訳の事例を分析し、重訳に内在する問題点及びメリットを検討した。誤訳・訳漏れといった問題は直接翻訳にも発生する可能性が高い。重訳の主な問題は誤訳・省略・追加であり、媒介翻訳から受け継いだのが確認できた。また、欧米の言語を媒介した重訳では、漢字の語彙の意味合いを十分に再現するのは不可能に近いと考えてよいだろう。これは二視点翻訳の作品には克服できない欠点に違いない。他の問題は、異なる媒介言語による制約、及び時代的な制約によることも明らかにした。問題点の原因についてこう認識した場合、誤訳等は重訳の本質的なものではなく、「重訳が罪」という偏見が解けるだろう。事例の分析を通じて、三視点对照の重訳はこうした誤訳を含む解釈の限定といった問題を解消することができることが明らかになった。

一方、重訳の要素の含まれる三視点对照の翻訳法の最大のメリットは、TT が客観的に中立に翻訳されることを担保するところである。また ST、MT と TT の文化間の相互理解に役に立つことにより、翻訳のミスを抑制し、適切な翻訳を導く効果があると考えられる。そして、三視点对照の翻訳法は、翻訳者にも創造の余地を与えるため、重訳の有益な側面を開いたと考えられる。次章では、重訳の今後の動向、実践の翻訳に於いて重訳を用い、あるべき形式を検討することとし、その場合、著作権・翻訳権の問題等を確認しておく。

第7章 重訳の再概念化と今後の展望

本論文はベトナムにおける日本文学の翻訳のケースを分析し、重訳が世界の小国の文化交流・文学翻訳に有用であったことを主張する。本章では、前の各章で考察したことを踏まえ、重訳概念の再考と絡めて、重訳の有効範囲を検討する。具体的には、重訳のプロセスにおいて、ST・MT・TTの言語の組み合わせという点で何らかの傾向があるかどうかを検証していく。また、今後の重訳と三視点对照の翻訳法の実現に向けて、翻訳権等にも考慮を加える。

7.1 重訳の再概念化について

第2章で述べたように、重訳に関する従来の批判の要点は、「伝統的」観点に基づいて、重訳は原文からの直接翻訳より文学的価値が落ちるということである。また、直接翻訳ができない場合には、やむを得ず重訳をするという考え方が多い。このような批判は過去に行われた重訳（二視点の重訳）に当てはまるが、媒介翻訳が実際に使用される事例を見ると、従来型の典型的な重訳以外にも「媒介翻訳を参考にする」という現象もあることが分かった。従来の重訳概念では、こうした現象をうまく説明することができない。したがって、現実存在する重訳に関わる現象をより広く扱うためには、従来の重訳概念を脱して、改めて「重訳」を概念化する必要が出てくると考えられる。

重訳の新しい概念を模索する際に、次の2点に留意する必要がある。まず、すでに述べたように、世界での重訳の事例から見た場合は、重訳は文化・言語の交流史、翻訳史とは切り離せない現象であることが明らかになった。ベトナムにおいて、日本語からの直接翻訳が容易ではなかった2000年代以前は、重訳の作品を通して日本文学すなわち日本文化の一端がベトナムに普及していた。それらの重訳の作品を省くなら、ベトナムにおける日本文学の9割が消えてしまい、日本文学を通じてベトナム人読者に届けた日本文化の知識に大きな穴が開くであろう。同様に、世界文学の交流においても、重訳なしでは異文化・言語間の相互理解を促進するというグローバル時代の大きな動機も生じなかったか、あるいは長期間にわたり後れをとることになったかも知れない。それ故、ある重訳を評価するに当たって、そのTTを取り巻く歴史的・文化的背景等も考慮し、全体的に評価しなければならない。重訳の欠点（誤訳、訳漏れ等）はその時代の規範・水準の下でどのように説明され判断されたかを、現在の観点から見直すことによって重訳の再評価につながるものと考えられる。

さらに、Dollerup (2006: 86) が「重訳は翻訳の動態を強調する特徴」⁵¹と指摘したように、重訳は翻訳の可能性を広げる翻訳方法の一種である。文学翻訳の一種である重訳は、ある程度独立した文学作品として判定されるべきものである。重訳は目標テキストの文化において、いかに評価されたか、どのような影響をもたらしたかということを検討することが重要であろう。

そこで、重訳が異文化の理解を助けるという利点を発揮するようにという視点から、重訳を以下のように捉えることを提案したい。

重訳とは ① 翻訳者（または出版社等の翻訳の関与者）の意識的な選択であり、多文化・多言語を操作する翻訳方法である。重訳のプロセスの中には ② 潜在する働きとして、起点テキスト（ST）と媒介テキスト（MT）のテキスト・文化の三視点对照により、異文化の客観的理解を補助する効果がある。

① では、重訳が歴史的背景の下で必然に起きている現象であるものの、翻訳者（または他の関与者）によって常に何かの目的のもと、意識的に使用される行為と考える。その目的は翻訳経費を削減する経済的理由、あるいは馴染みのない文学・文化を目標言語の読者に紹介するため等様々である。これは重訳がやむを得ない最後の手段であり、避けるべきものというかつての偏見を修正する観点である。テキストという狭い範囲で重訳を評価することに反するやり方である。今まで無視されてきた重訳の翻訳者の独立的でよりポジティブな立場を認めることによって、目標テキスト（TT）をより客観的に評価することに役に立つ。

② では、ST や MT に極端に偏ることを防ぐ働きである。翻訳者は、媒介翻訳を参考にするという重訳の操作を用いることで、積極的に原文の不明な意味の解釈を確認したり、訳し難い箇所の訳出方法を参照したりして、自分なりの翻訳方略を選択できる。つまり、これは重訳を使用する三視点对照の翻訳法を意味するが、重訳プロセスは潜在的にこの働きを包含するものである。

7.2 重訳及び三視点对照の翻訳法の有効性

前章で見たベトナムのケースのように、ある国において、重訳で使われた言語の組み合わせについては、その国の歴史上の特定時期での媒介翻訳の選択肢が、社会・文学の規範で定められる場合がある。しかし、今後の重訳、並びに三視点对照の翻訳法を使う場合、

⁵¹ 原文：“Relay is a feature which highlights the dynamics of translation.”

どの言語の組み合わせの可能性が高いか、または有利であるか。これらは翻訳者の選択、及び世界言語の相対的な位置（Heilbron, 2010）という要素にも左右されると考えられる。

7.2.1 翻訳者の選択要素

媒介翻訳を参照する際に、どの媒介言語を選ぶかということは翻訳者の選択に委ねられる。日本語原文から翻訳が出来る、または日本のことを簡単に調べ参照できるようになった現在では、どのように翻訳の質を高めるかは、ほぼ翻訳者の資質や能力によると考えられる。

翻訳プロセスにおける翻訳者の選択に関して、Dollerup (2006:121) は次のように述べている。

実際に翻訳者は（翻訳を）ずっと再利用してきている。多くの国の文学翻訳の多くが既訳の改変版であることは、多かれ少なかれ隠しきれないものである。また、2 言語（A と B）以上の言語に精通している翻訳者にとっては、他の翻訳者が翻訳の難しい項目にどう取り組んだかを調べるために、（A 言語への）翻訳作業のために自分がわかる C と D 言語での翻訳を使うという実践は、知られていないことではない。

翻訳者がどの言語に精通しているかは、偶発的な個人的事情によるものであるが、普及度が高く国際的な場で通じる言語である可能性が高いことは否定できない。一方、ある社会における歴史上の特定時期での媒介翻訳の選択肢は、社会・文学の規範で定められる場合がある。例えば、ベトナムの場合は、日本語の翻訳者の不足という客観的な原因で直接翻訳が出来なかったために、重訳は入手できる原本（あるいは特定の媒介言語の本）を使わざるを得なかったと言える。

7.2.2 有効な言語の組み合わせ

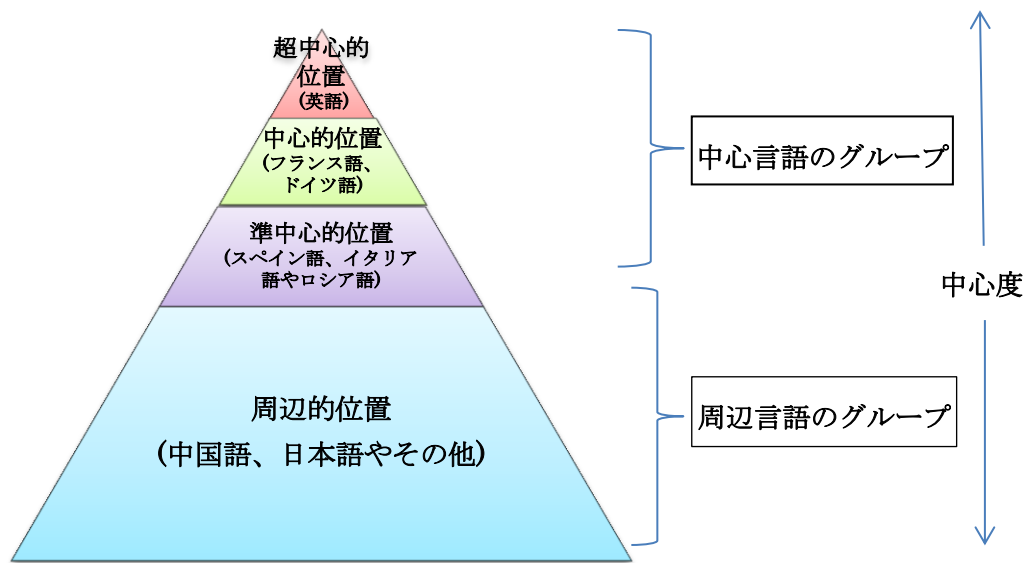
重訳はどの言語からどの言語に行われるかということは、翻訳者の個人的選択で偶発的でありながら、ある程度必然的な組み合わせがあると思われる。この節では世界の言語の体系という観点から、重訳において有り得る言語の組み合わせとそれらの有効性を論述する。

文化相対主義は、全ての文化が優劣で比べるものではなく対等であるとしているが、言語には政治的・経済的・文化的な影響力や使用者数において優位と劣位の差異が存在して

いる。De Swaan (2001)は、社会・経済学的観点からグローバル言語の階層性ある序列を提唱した。その中で、世界の5千～6千の言語のうち、その約98%が最下部に位置している。それらは人類の10%以下で使用する「Peripheral 周辺の」、文字を持たない口頭の言語である。言語の序列で二番目に低い位置の言語は、人類の95%によって（口頭と文字で）使用されており、多数のコミュニティの「Central 中心的」言語で占められている。それらは多くの場合、国の言語である。世界の言語システムの第3のレベルは、長距離・国際通信に使用される、いわゆる「Supercentral スーパー中心的」言語で構成されている。そのような言語の例としては、アラビア語、フランス語、スペイン語、ヒンディー語がある。スーパー中心的言語よりも一段高いレベルは、「Hypercentral 超中心的」言語である英語で占められている。それを踏まえて、Heilbron (2010) は国際的な翻訳のシステムには世界言語が4レベルに分けられると提案した。それは翻訳書の割合による分類で、翻訳率が圧倒的に多く、翻訳書の全数の約60%を占める英語はレベル1、超中心的位置（Hypercentral position）にある。レベル2は翻訳市場の10%を占めるフランス語とドイツ語であり中心的位置（central position）にある。また、レベル3は市場の1～3%を占め、スペイン語、イタリア語やロシア語のような準中心的位置（semi-central position）と分類される。最後に、残りの言語は、母語話者は非常に多いが、国際翻訳市場で小さな役割しか演じない中国語、アラビア語や日本語を含めて、周辺の地位（peripheral position）の言語である。

以上2種類の分類は専門用語と分類基準は異なるものの、諸言語の経済・政治・文化的な影響力や使用者数による、中心言語から周辺言語を高い順位から低い順位に並べている点は共通している。この2つのシステムは現在における世界の状態に過ぎず、過去と未来においては分類体系に変動が生じる可能性がある。また、Heilbron の分類法は単に翻訳市場の出版部数の統計資料に基づいたものであり、諸言語間の関係に影響を及ぼした歴史的事象には言及していない。特にレベル4では、世界の90%以上の言語が含まれるものの、微妙な関係や差異が見えなくなっている。

それ故、本論文では、重訳が有効である範囲を模索する際に、Heilbron (2010) のレベル1～3の言語を「中心言語」central language、レベル4の言語を「周辺言語」peripheral language という2つのグループに分けることにする。この分類体系はピラミッドで以下（図1）のように表すことができよう。言語の「中心度」は上に行くほど増加し、逆に下に行くほど減少する。



第7章・図1 世界の言語のグループ分け⁵²

なお、この分類は世界言語の位置づけの現状を反映するものであるため、歴史的時期に起きた重訳の現象を考察する際には、その時代に応じた修正が必要である。例えば近代のヨーロッパでは、ラテン語は権威ある言葉であり世界的に高い位置を有する言語であった。ルネッサン時期に、公用語と言われるラテン語での印刷物は70%を占めたという。次はドイツ語10.8%、イタリア語は8%、フランス語は5.7%という現地語が続く。当時文学の分野では、「現地語で（文学作品を）創作することは砂に書くようであり、ラテン語またはギリシア語で創作するのは大理石に刻むようなこと」⁵³(Beeby Lonsdale, 2009 : 86)と信じられていた。それ故15～17世紀、英語はたった0.8%を占め⁵⁴、かなり周辺的位置にいたため、英語の文学の *Paradise Lost* (Milton 著)はラテン語に訳され、Sheakespear の作品はフランス語を介して、より広い読者層に接近しようとした。また、アジアでは中国語は朝鮮、日本やベトナムという漢字文化圏の国々において、政治・文化・学問的に最も重要な言語である時代もあった。一方、周辺言語グループの中には、非常に数多くの言語があるものの、各言語の位置・相関関係はその国家の経済・政治的優位性によって常に変化しており、影響力・中心度が高い／低いによる序列の区別ができる。その場合は、また De Swaan (2001)

⁵² Graddol (1997, 2000) の The world language hierarchy の図形を基に作成。

⁵³ 原文：“In literature, ...writing in the vernaculars was like writing in sand, whereas writing in Latin or Greek was like working in marble.”

⁵⁴ “Incunabula Short Title Catalogue”, British Library, www.bl.uk/catalogues/istc/index.html, 2015年7月1日観閲。

の水準に基づいて、個別の言語の順位を決めることにする。

上述のことを踏まえ、文学翻訳の分野のみに絞り、言語の組み合わせの動向を考察することとする。文学の重訳には、起点テキストの言語（Source Language - SL）、媒介テキストの言語（Mediating Language - ML）と目標テキストの言語（Target Language - TL）という特定の3言語が関与するが、それらは歴史的関係や文化交流がある言語であると考えられる。この3言語に図1で示したような中心度の尺度を当てはめれば、歴史上の影響力・威力または普及度（使用者数・出版部数）が全く等位の言語はありえないため、3言語間の相対的順位が決まるだろう。中心度の高い方からⅠ、Ⅱ、Ⅲの降順に順位を割り当てれば、重訳での言語の組み合わせは、次の6つのケースに集約することができる。

- ケース①：SLの中心度はⅠであり、MLはⅡ、TLはⅢである場合
- ケース②：SLの中心度はⅠであり、MLはⅢ、TLはⅡである場合
- ケース③：SLの中心度はⅡであり、MLはⅠ、TLはⅢである場合
- ケース④：SLの中心度はⅡであり、MLはⅢ、TLはⅠである場合
- ケース⑤：SLの中心度はⅢであり、MLはⅠ、TLはⅡである場合
- ケース⑥：SLの中心度はⅢであり、MLはⅡ、TLはⅠである場合

（以上はSL、MLとTLの中心度が全てⅠ、あるいはⅡ、あるいはⅢである3つの場合を除いた組み合わせである）

以上の組み合わせは下表のようにまとめられる。

ケース	①	②	③	④	⑤	⑥
SL	中心度Ⅰ	中心度Ⅰ	中心度Ⅱ	中心度Ⅱ	中心度Ⅲ	中心度Ⅲ
ML	中心度Ⅱ	中心度Ⅲ	中心度Ⅰ	中心度Ⅲ	中心度Ⅰ	中心度Ⅱ
TL	中心度Ⅲ	中心度Ⅱ	中心度Ⅲ	中心度Ⅰ	中心度Ⅱ	中心度Ⅰ

第7章・表1 重訳における中心度による言語組み合わせ

表1では、重訳における有り得る言語の組み合わせを全て並べたが、これらは三視点对照の翻訳法にも通用する言語の組み合わせである。しかし、この全ての可能性が同じ頻度で生じるのではなく、実際には一定の傾向を示すであろう。

Heilbron (2010) は「周辺言語の間のコミュニケーションはより中心的言語を介している

ものだ。ある周辺の言語に何が翻訳されるかは、他の周辺の言語から中心言語に訳されたものに依っていることが多い。翻訳システムにおいて、中心レベルが高い言語ほど、周辺の言語間のコミュニケーションの媒介言語になる可能性が高くなる」と述べている。この指摘に基づいて、次のことが言えよう。ML の中心度が高いであるケース③・⑤（中心度Ⅰ）は実行の可能性が最も高い。さらに、ML が中心度Ⅱであるケース①・⑥はより限られた背景で行われると考えられるが、ML が中心度Ⅲである②・④は起こりにくいであろう。理由としては、翻訳できる人が少ない周辺言語の ML に比べて、中心言語であれば翻訳者の層が厚く、翻訳者への依頼が容易で経済的である。また、評価・編集の作業も行いやすくなるため、最終的に産出された TT の信頼度が上がると考える。結果として、ML は ST あるいは TT にとってより中心的言語（中心度が高い）であることが有利に働くことになる。実際においても、近年中心言語の小説を直接に周辺言語に訳すことが簡単になったことに加え、周辺言語の書物が中心言語を介して様々な言語に訳される例が多くなっているのもグローバル的傾向である。そのため現在では、中心度が低い言語の ML をケース②と④で重訳が行われてもその意義や合理性が認められにくいだろう。

要するに、ML が TL より「中心的」、或は図 1 のピラミッドの「より高い」位置にある場合は、実現性が高いため、重訳の最もあり得る組み合わせであろう。ケース①・⑥のように ML の中心度が SL より低い場合は、例えば世界言語でのテキストが地域の公用語を介して現地言語に訳されるという特殊な背景に起こる可能性がある。

またその中でも、特に周辺言語・文化の交流の架け橋として役割を果たす典型的な組み合わせはケース③である。ベトナムで英語とフランス語を介して紹介された日本文学はこのケースに当てはまる。ユネスコの翻訳書籍の統計（UNESCO Index Translationum）によると 2012 年現在、世界トップ 50 起点言語（SL）55の一覧の中で英語は 1 位であり、2 位のフランス語より 5.6 倍多いという(3 位はドイツ語)。それに加えて、英語は世界トップ 50 目標言語（TT）⁵⁶の一覧の中で 4 位である（1 位はドイツ語、2 位はフランス語、3 位はスペイン語）。このデータから、世界規模では英語をはじめ、フランス語やドイツ語等という中心言語からの翻訳、及びそれら言語への翻訳が比較的が多い。それら言語の多くの翻訳はさらに他の言語訳の原本になる比率も高くなる、すなわち周辺言語の文学を重訳する際

⁵⁵ <http://www.unesco.org/xtrans/bsstatexp.aspx?crit1L=3&nTyp=min&topN=50>

⁵⁶ <http://www.unesco.org/xtrans/bsstatexp.aspx?crit1L=4&nTyp=min&topN=50>

に、英語、ドイツ語やフランス語は媒介言語になっていると言えよう。

三視点对照の翻訳法の場合

とりわけ、(三視点对照の重訳及び三視点对照の翻訳を含む) 三視点对照の翻訳法の場合において、翻訳の組み合わせは次のように考えられる。まず、三視点对照の重訳では、基本的に通常の重訳と同様に、ML が中心度の高い言語である組み合わせ (ケース③・⑤) が最も可能性が高い。後者の三視点对照の翻訳は基本的に直接翻訳であるため、参照用の ML を選択するには限界がなく、どの場合でも有効であると考えられる。なぜならもう一つの参照点である媒介翻訳は直接翻訳での誤解を修正し、文化的な補充の役割を果たすため、翻訳者の精通する言語であればどの言語でも、翻訳の作業に利益を持たすからである。例え英語の小説を直接日本語に訳した場合でも、中国語訳や韓国語訳(もしあったとして)を参考にすることは有用であると考えられる。ただし、実際に参考にされた媒介翻訳を明記するかしないかは別のことである。これは重訳の実務上の問題として次節で検討する。

ここで、理想的な参照点の言語の組み合わせを考えてみよう。川田は「これまでよくおこなわれてきた東西文化の比較のように、二つのものの対比ではなくて、今の地球の時代には、東西に南の視点も加えた、三つの文化相互の比較によって、ヒトの文化を全体として、しかも主観による偏りを補正しながら、考えて行きたい」(川田, loc.cit.) と提唱した。確かに関係が近く、類似する文化、例えば漢字文化圏に属する国なら、参考にするのに有効であるとする見方もある一方で、文化を観察するには類似点はもちろん、相違点が分かれば、比較の視点を広げられる利点があるとの見方もある。この考えを三視点对照の翻訳の場合に適用したら、東の文化 (例えば日本語の ST) と西の文化 (例えば英語、フランス語の MT) と南 (ベトナム語の TL) という異なる視点を取った翻訳では、文化の差異がはっきりと出ると考えられるだろう。

とはいえ、三視点对照の翻訳の場合は、どの組合せを選択するかは、翻訳者の個人的な事情、及び言語位置の現状に縛られる。この点では、通常の重訳と三視点对照の重訳と変わらないのである。結局、ベトナムの現実で見たように、日本語の翻訳者の不足という客観的な原因で直接翻訳が出来なかったために、重訳は入手できる原本 (あるいは特定の媒介言語の本) を使わざるを得なかったという事情があった。また、現在英語・フランス語等の世界で普及している言語や、ベトナムと交流の歴史が長い中国語ができるベトナム人翻訳者が多い。したがって、その中の言語と日本語原文とを組み合わせる可能性が高いと

も言える。

7.3 今後の課題：重訳の情報が実務上公開できるように

第2章で論述したように、かつては重訳した書物を出版する際は、読者の反感を避けるために、重訳であることを隠す現象が見られた。現在、ベルヌ条約等国际法や諸国の法律で、翻訳本の著作権・翻訳権が厳密に定められているため、直接翻訳であるか重訳であるかが明記されるようになった。難しい問題となり得るのは三視点对照の翻訳法である。そこでこの節では、文学の重訳及び三視点对照の翻訳の場合において、著作権・翻訳権の処理の方法を確認し、今後の課題を検討する。

まず、翻訳権について整理する。一般的に翻訳権（すなわち出版権）は著作権の一部であると認識されている。日本の場合は、翻訳権・翻案権は著作権法第二十七条に規定されている著作財産権である。「著作者は、その著作物を翻訳し、編曲し、若しくは変形し、又は脚色し、映画化し、その他翻案する権利を専有する。」⁵⁷。現在国際条約であるベルヌ条約では、翻訳権について、次のように定める。「文学的及び美術的著作物の著作者でこの条約によって保護されるものは、その著作物に関する権利の存続期間中、その著作物を翻訳し又はその翻訳を許諾する排他的権利を享有する」⁵⁸（ベルヌ条約 第八条「翻訳権」）。

したがって、著作権によって保護される期間内の出版物は、著者から翻訳権を取得しなければならない。その期間は当該国の著作権法で短い方の期間に準じる。例えばイギリス（死後70年保護される）の本を日本（死後50年）で翻訳して出版するには、日本の死後50年の基準を当てはめることになる（宮田, 1995）。

一方、翻訳、特に文芸翻訳は相当な創造的な労力、労働と技術を必要とするため、ベルヌ条約の第二条では、「文学的又は美術的著作物の翻訳、翻案、編曲等による改作物は、その原作物の著作者の権利を害することなく、原著作物として保護される」としている（ベルヌ条約 第二条「保護を受ける著作物」）。つまり、翻訳作品自体が創作物として著作権を得る事が可能である。その場合も、原文の著作権を持っている著作者、会社、又は個人の許可を得る事は不可欠である。したがって、ある文学作品を翻訳する場合は、必ず翻訳権を原作の著者（または著者の代理機関）から得なければならない。その上で、文学翻訳には創作物の一種（二次創作物）として、翻訳者の著作権を認めるべきものとなっている

⁵⁷ 『公益社団法人著作権情報センター』のHP、http://www.cric.or.jp/db/domestic/al_index.html#028.

⁵⁸ 『公益社団法人著作権情報センター』のHP、http://www.cric.or.jp/db/treaty/t1_index.html.

ため、重訳の場合はさらに、媒介翻訳の翻訳者（または媒介翻訳の出版社）にも許可を得る必要があることになる。「重訳の場合は原作と媒介翻訳の両方の著作権が対象となる。そのため、原作の著者と媒介翻訳の翻訳者から許可を得なければならない」（Dollerup, 2006: 120）。

重訳版の場合は、底本とした **MT** を作成した最初の翻訳者が著作権者になるはずである。しかし、実際上の翻訳権は「ケースバイケース」で契約されることがあり、その契約の論拠は「国際法及び当事国著作権法及び契約に基づく」となっていることが分かった（著作権・翻訳権の代理店のアンケート調査による）。場合によっては、重訳（重訳に近い三視点对照の翻訳も含む）であったとしても、原著作者（著作権者）・原出版社のみの許諾を得て翻訳を得ているケースも実際にあるかも知れない。とりわけ、Dollerup が指摘したように、原作の著作権の有効期限が切れている場合には、出版社（及び他の関係者）は媒介翻訳の著作権を時折見逃すことがあるようだ (ibid.: 120)。

三視点对照の翻訳法には、三視点对照の重訳と三視点对照の翻訳がある。前者の三視点对照の重訳の場合は、翻訳権・著作権は重訳の扱いと同様に処理できると考えられる。主な翻訳の原本は媒介翻訳 **MT** なので、**ST** と著者は勿論、**MT** とその翻訳者の許可を取らなければならない。**MT** を翻訳しながら、**ST** を参考にして、特殊な部分をうまく変えているケースもあるかもしれないが、両者から許可を得ているため問題はない。しかし、後者である三視点对照の翻訳の場合はより複雑である。

三視点对照の翻訳は基本的には直接翻訳（普通の翻訳と同じ扱い）でありながら、媒介翻訳をどこまで参照したかによっては、重訳との境界線が不明瞭となる可能性もある。したがって、厳密に言えば、どの媒介翻訳をどの程度参考にしたかという情報を明記することと、どの段階で著作権の許可を取る必要性が生じるかという問題が現実にはあるだろう。ここではこれ以上この問題には立ち入らず、問題の所在を指摘するに留めておくが、重訳及び三視点对照の翻訳法を用いた翻訳の情報公開や翻訳権・著作権の扱いは、重訳と三視点对照の翻訳法に対する理解・評価に左右されると言える。今後重訳と三視点对照の翻訳法に対する認知度が高くなるとともに、情報公開や翻訳権・著作権の実行は改善されることが期待できるだろう。

7.4 まとめ

本章では、重訳の新たな概念を提唱した。それは重訳のプロセスにおいて、翻訳者の動

的役割、及び異文化の理解を助ける潜在的効果を重視するものである。また、重訳の可能性が高く有利な言語の組み合わせは、TL の歴史上の特定背景以外に、翻訳者の選択及び世界言語の相対的な位置という要素によっても決められることを確認した。一般的に、普通の重訳や三視点对照の重訳では、ML は ST あるいは TT より中心的言語（中心度が高い）である。特に、三視点对照の翻訳は基本的に直接翻訳であるため、参照用の ML を選択するには限界がなく、翻訳者の精通する言語であればどの言語でも、翻訳の作業に利益をもたらすと考ええる。

さらに、重訳及び三視点对照の翻訳法を用いた翻訳の情報公開や翻訳権・著作権の扱いは、重訳と三視点对照の翻訳法に対する理解・評価に左右される。重訳を用いる三視点对照の翻訳法を発揮するのに、重訳の著作権に関する問題の認識を高め、判断基準を設定する必要がある。

第8章 結論

以上、本博士論文は文学における重訳という翻訳方法について考察してきた。結論を以下の5点にまとめる。

第一に、重訳についての先行研究を整理し、存在している理論・実践的問題点を確認した。翻訳研究では、重訳についての定義・用語と分類は間接的に翻訳するという特徴を中心になされたものであり、文化的側面からの研究がなされていないことを明らかにした。重訳、特に文学の重訳に対する読者、出版社や研究者の評価は殆ど消極的である事实は、確かにこの重訳を「原文の複製である翻訳の劣った複製」とした理解から生まれ、偏っていたと考えられる。したがって、新しい観点から重訳を再認識することが必要となった。

第二に、重訳の典型的なケースであるベトナムにおける日本文学翻訳の社会・文化的背景を究明した。まず、ポリシステム理論を援用することで、ベトナムにおける文学の翻訳史と日本文学の特徴を体系的に捉えることができた。植民地や戦争という複雑な政治・社会・文化的背景の下で、翻訳文学はベトナムの文学システムにおいて、長期にわたり中心的ジャンルであり続けた。さらに、ベトナムの文学史では、時期ごとに中国の文化・文学、フランスの文化・文学、ロシアの文化・文学の影響力が強く、翻訳文学が主流になったことが分かった。したがって、日本文学は周辺的位置にあり、それらの中心的文学に影響されてきた。中心的文学は、日本文学翻訳の規範及び媒介言語を左右した要素と考えられる。

一方、ベトナムと日本の外交関係に支障が多かった時代には、媒介言語の翻訳に基づいた重訳は日本文学の有名な作品をはじめ、日本文化を普及するのに大きな役割を果たしたことが確認できた。その中で、それぞれの時期の社会・文化的背景は日本文学作品の翻訳の数及びジャンル・媒介言語に大きな影響を及ぼした。

このように、ベトナムにおける日本文学の重訳を通して、重訳はある国の文学では、直接関係・交流がない他の国との文学・文化交流の初期に、一定の役割を果たすことが分かった。また、その国の外国文学システムにおいて、重訳は周辺文学の翻訳で多発する現象であることが明らかになった。一般的に、重訳の媒介言語は文学システムに中心位置を占める中心文学の言語である。

第三に、重訳の理論を展開するために、ベトナムにおける日本文学の重訳という具体的

なケースを取り上げ、分析した。その結果、重訳を異文化理解の一手段として認めることができた。さらに、ベトナムにおける日本文学の経過を辿って、それに原文・媒介翻訳・重訳という三視点の関係に着目し、文化理解への有効性という観点から、重訳の形式の展開・特徴が確認できた。詳しくは TL 文化と参照点の関係に基づき重訳の分類を検討したところ、二視点の重訳、三視点の重訳及び三視点对照の重訳という三つの種類が確認できた。また、直接翻訳と通常重訳の隣接形式として三視点对照の翻訳も確認できた。ここで、三視点对照の重訳と三視点对照の翻訳を三視点对照の翻訳法と名づけた。異文化を解釈して表現する時の誤解や訳漏れ・誤訳を改善する上で、三視点对照の翻訳法が有用なモデルとして推奨できると提案した。

第四に、日本文学のベトナム語重訳版の具体例を通じて、重訳の作業における異文化・言語的要素の変換の問題点、そして三視点对照の翻訳法のメリットを確認した。日本文学のベトナム語訳の事例分析で検証することにより、ST と媒介翻訳という二つの参照点があるため、最終的な TT の質がかなり補正できることが分かり、他の種類の重訳より優越することを示した。

特に、重訳を活用する三視点对照の翻訳法は ST、MT と TT の文化間の相互理解に役に立つことを明らかにした。三視点对照の翻訳法によって、TT はより客観的で中立的に翻訳され、偏りによる誤訳・訳漏れを修正する効果が確認された。それに加え、翻訳者にも創造の余地を与えるという、重訳の有益な側面が新たに見られたと考える。

第五に、ベトナムの日本文学の重訳史に、小国の言語・文化の成り立ち・展開の過程と共通する特徴があるとし、三視点对照の重訳・翻訳の可能性を明確化した。文学重訳の今後の動向を見る際に、重訳と重訳の「改善版」である三視点对照翻訳法について、実行される可能性が高い形式を検討した。また、重訳と三視点对照の翻訳法を運用するに当たって、著作権・翻訳権の現状及び、残る問題点を確認した。

本論文の意義

翻訳理論の分野においては、本論文は次の理論的意義を持ったと考えられる。まず、重

訳の意義について解明し、重訳に対する偏見を学問的に排除しようと努めたことである。また、重訳を参照する翻訳法である三視点对照翻訳法とし、使用できるように理論を整えた。異文化理解といった新しい観点から重訳を見直したところ、重訳の新しい定義と分類が確定できた。その結果、重訳とは「翻訳者（または出版社等の翻訳の関与者）の意識的な選択であり、多文化・多言語を操作する翻訳方法である。重訳のプロセスの中には潜在的働きとして、起点テキストと媒介テキストのテキスト・文化の三視点对照により、異文化の客観的理解を補助する効果がある」と定義できた。この定義から導き出せるのは次の2つである。まず、重訳には多様な形式があるため、重訳を評価する際に、それぞれの変形が長所と短所を持ち、全部が「悪い」わけではないことを認識しなければならない。次に、重訳の利点を強調する観点から考察することで、重訳について多くの新たな研究を促進する上で有意義であろう。

一方、実践面では、既に存在している重訳は貴重な参考源として、再翻訳に用いることが可能であることを示唆した。ベトナムでは重訳された日本文学が約 90%を占めている。全てを再翻訳するには時間と手間とコストがかかると思われる。しかし、既存の重訳を参考源や手がかりとして利用すれば、原文からの翻訳プロセスを短縮し、促進するだけでなく、翻訳の質を高める効果が出ると考えられる。

しかし、こうした重訳の活用できる範囲はベトナムのケースのみに限定されるわけではない。ベトナム語や日本語のような周辺言語の場合は、他の国との文学・文化の交流の初期は、ほぼ媒介言語を介した重訳に依存しなけりばならなかった。言い換えると、歴史的には重訳は周辺の言語・文学が外の世界へ自分の文学・文化を発信する方略であると言っても過言ではないだろう。Heilbron (2010) の翻訳市場上の系統に基づいた分類においては周辺言語であっても、母語話者数が非常に多い言語、例えば中国語(約 13 億 7000 万人)、ヒンディー語(4 億 9000 万人)、アラビア語(2 億 3000 万人)やポルトガル語(2 億 1500 万人)(下宮, 2000)が存在している。それらの周辺言語からの翻訳、あるいはそれらの言語への翻訳を行う際に、重訳及び三視点对照の翻訳法の運用価値は決して少なくない。

研究の限界と今後の課題・可能性・展望

本論文でまだ十分に解決できていないこととして、次のような点があるだろう。今回の研究の分析対象は主に重訳の事例では英語、日本語とベトナム語の事例だった。これは、筆者の限られた言語能力のためである。今後の研究では、フランス語や中国語という他の媒介言語での事例も出来るだけ理解し、分析に多く採用したいと考える。また、ベトナムにおける日本文学の重訳のみならず、様々な国で周辺言語同士の文学的交流を考察し、重訳についてのさらに詳しい研究が必要であろう。それに加えて、文学は言葉の芸術であるため、訳者の文学的能力、すなわち TT での表現力も重訳の過程・品質に影響を与える一因と考えられる。したがって、文学作品の重訳の分析においても、そうした翻訳者個人の文学的素養といった観点も加味して、検討することは今後の研究課題にしたい。

他方、重訳という研究について、以下の問題を解決していく必要がある。

まず重訳を用いた翻訳法の今後の運用において最も大きな障害は、翻訳権・著作権の問題と考える。筆者は出版社が重訳であることを隠さず公開するべきだと主張したい。ただし、実際には、媒介翻訳の翻訳者の地位について国際法等において明確には定められていないため、このことが現実するのは難しい問題となっている。また、文学翻訳の著作権の諸問題が、翻訳の質や法廷での訴訟トラブルを発生させ、翻訳の出版にマイナスの影響を及ぼしている原因になっている。重訳及び三視点对照の翻訳法を用いた翻訳の情報公開や翻訳権・著作権の扱いは、重訳と三視点对照の翻訳法に対する理解・評価に大きく影響されると言える。著作権の問題が解決できれば、重訳の利点を発揮できる三視点对照翻訳法を勧めることで、原文に忠実でありながら多文化視点が反映した興味深い文学翻訳が生まれることが期待できるだろう。したがって、今後情報公開や翻訳権・著作権の実行を改善するには、様々な研究・理論を進めることによって、重訳と三視点对照の翻訳法に対する理解や認知度を高めることが不可欠と思われる。

もう一方、グローバル化時代ならではの現象として、多言語で創作する作家が存在している。彼らの創作過程はある意味で重訳を行うものとも言える。例えば日本人の作家の多

和田葉子⁵⁹は、ドイツ語で小説を書いて、その後同タイトルの日本語版を書く過程は、潜在的に重訳している（斎藤, 2010）と思われる。このような見方は重訳の拡大概念として、自己翻訳との近隣部分は出ており、これも非常に興味深い研究の展開方向である。このように、重訳という研究テーマはまだ豊かな可能性と発展性を秘めていることを改めて確信する。

最後になるが、現在ベトナムは日本との政治的・経済的関係が深まってきており、今後文化交流が進んでいけば、両国の文学翻訳の規模、及び文学翻訳の研究自体が拡大していくことが期待できるであろう。本論文が、ベトナムの翻訳の歴史、及びベトナムにおける日本文学史・重訳史に関心をもつ学生、研究者や一般読者のための参考になれば幸いである。

⁵⁹ 1960年生まれ、日本の小説家・詩人である。日本語とドイツ語で2ヵ国語の作品を創作し、芥川龍之介賞等文学賞を受賞した。

引用作品

- 川端康成 (1968) 『川端康成集』 (新潮日本文学 15) 新潮社:「雪国」 pp. 7-80. 「山の音」 pp. 157-319.
- Kawabata, Yasunari (1968). *The Izu Dancer and Others*, trl. by Edward Seidensticker and others., Tokyo.
- Yasunari Kawabata* (1989). *Tiếng rền của núi*, Ngô Quý Giang dịch, Nxb.Thanh Niên
- Yasunari Kawabata*(1995). *Xứ tuyết*, Ngô Văn Phú & Vũ Đình Bình dịch, フランス語版の ‘Pays de Neige’ (Armel Guerne&Bunkichi Fujimon, Albin Michel, Paris 1967) より, Nxb.Hội Nhà Văn
- Yusunari Kawabata & Testuo Miura*(1988). ‘Thủy nguyệt’ *Đốm lửa lạc loài-Truyện tình Nhật Bản*, Nguyễn Đức Dương dịch, Nxb.Văn nghệ Thành phố Hồ Chí Minh.
- Kawabata, Yasunari (2010) *Người đẹp ngủ mê* (『眠れる美女』), Quế Sơn 訳, 英語版の ‘House of the sleeping beauties and other stories’ (translated by Edward Seidensticker, Sphere Books Limited, London 1971) からの重訳、さらにフランス語版の ‘Les belles endormies’ (translated by R.Sieffert, Albin Michel, France 1970) 参照, Nxb. Thời Đại.
- 三島由紀夫 (2001) 『金閣寺』 (三島由紀夫全集 6) 新潮社
- Mishima Yukio(1971). *Kim Các Tự*, Đỗ Khánh Hoan & Nguyễn Tường Minh dịch, Nxb.Sông Thao.
- Yukio Mishima*(1956/1997). *The Temple of the Golden Pavilion*, trl. by Ivan Morris, Charles E. Tuttle Company.
- Yukio Mishima*(1990). *Ngôi đền vàng*, Lê Lộc 訳, Nxb.Thanh Niên
- 三浦綾子(1983) 『氷点』 朝日新聞社.
- Miura, Ayako (1972) *Băng điểm* (氷点), Liêu Quốc Nhĩ 訳, Sài Gòn, Nxb.Đông Phương.
- 村上春樹 (2003) 『ノルウェイの森』 村上春樹全作品 1979~1989 講談社.
- Haruki Murakami (1989) *Nowergian Wood*, trl. by Alfred Birnbaum, Kodansha.
- Haruki Murakami (2000) *Nowergian Wood*, trl. by Jay Rubin, Vintage International.
- Haruki Murakami (1997) *Rừng Na-uy*, Hạnh Liên & Hải Thanh 訳, Nxb. Văn học.
- Murakami, Haruki (2006). *Rừng Na-uy*, TrịnhLữ 訳, Nxb.Nhã Nam &Hội Nhà Văn.
- Murakami, Haruki (2007). *Phía Nam biên giới, phía Tây mặt trời* (『国境の南、太陽の西』), Cao Việt Dũng 訳, Nxb. Hội Nhà Văn.

- 村上春樹 (2002) 『海辺のカフカ (上)』 新潮社.
- Murakami, Haruki (2012). *Kafka bên bờ biển* (『海辺のカフカ』), Dương Tường 訳, 英語版の *Kafka on the Shore* (translated by Philip Gabriel, Vintage UK, 2005) より + フランス語版の *Kafka sur le rivage* (translated by Corinne Atlan, Belfond, 2005) 参照, Nxb.Nhã Nam & Văn Học.
- Murasaki, Shikibu (1976) *The Tale of Genji 1 & 2*, translated by Edward G.Seldensticker, Turtle Publishing.
- Murasaki, Shikibu (1991) *Truyện kể Genji Tập 1 & 2* (源氏の物語), (複数の翻訳者), Nxb. Khoa học Xã hội Hà Nội.
- Natsume, Soseki (2013). *Gối đầu lên cỏ* (『草枕』), Lam Anh 訳, 英語版の *Kusamakura* (translated by Meredith Mackinney, Penguin Classics, 2008), Nxb. Hội Nhà Văn.
- Nhật Chiêu (1994) *Nhật Bản trong chiếc gương soi* (鏡の中の日本), Nxb. Giáo dục.
- Thái Bá Tân 編訳 (2013). *Thơ Haiku Nhật Bản* (日本の俳句), Nhà sách Đông Tây & NXB Lao Động.
- 渡辺淳一 (1995) 『無影燈 上・下』 角川文庫 (改版六十三版)
- Watanabe Dzunichiro* (1986). *Đèn không hắt bóng (Vô ảnh đăng)*, Cao Xuân Hạo 訳, Nxb. Sở Văn hóa thông tin Nghĩa Bình.
- (*: 翻訳本と同じの著作名の表記にする。)

参考文献 (アルファベット順)

- Alves, A. (2003) (ed.). *Triangulating Translation- Perspectives in process oriented research*, John Benjamins Publishing Company.
- Beeby Lonsdale, A. (2009). 'Directionality', in M. Baker and G. Saldanha (eds.) *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, Routledge, pp. 84-88.
- Benjamin, W. (1968/1996). 'The Task of the Translator', in H. Arendt (ed.) *Illuminations*, Harcourt, Brace.
- De Swaan, A. (2001). *Words of the world: The global language system*, Cambridge: Polity Press and Blackwell.
- Delabastita, D. (2009). 'Shakespeare', in M. Baker and G. Saldanha (eds.) *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, Routledge, pp. 263-267.

- Dollerup, C. (2000). 'Relay and support translations', in A. Chesterman et al. (eds.) *Translation in Context*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, pp. 17-26.
- Dollerup, C. (2006). *Basics of Translation Studies. (First Edition: Romania)*. Iasi: Institutul European, pp. 75-92.
- Dương Tường (2012). *Kafka bên bờ biển* (『海辺のカフカ』) — 翻訳者の後書き, Nxb.Nhã Nam & Văn Học, pp. 534-40.
- Even-Zohar, I. (1978/2000). 'The Position of Translated Literature within the Literary Polysystem', in L. Venuti (ed.) *The Translation Studies Reader*, Routledge, pp. 193-194.
- Even-Zohar, I. (1990). *Polysystem Studies*, Special Issue of *Poetics Today* 11 (1).
- ファム・ヴァン・ホアイ (2011). 「ベトナム語における近代漢語とその起源」『日本語学』2011年7月号 岩月純一訳 明治書院.
- Franco, J. A. (1996). 'Culture-specific Items in Translation', in Roman Alvarez & M.Carmen-Africa Vidal (eds.) *Translation, Power, Subversion*, Multilingual Matters Ltd, 61-64.
- 藤濤文子 (2007). 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション—機能主義的翻訳理論の諸相—』 松籟社.
- 藤岡 啓介 (2000). 『翻訳は文化である』 丸善ライブラリー.
- Graddol, D. (1997/ 2000). *The future of English? A guide to forecasting the popularity of the English language in the 21st century*, The British Council, [Online] <https://microsites.bournemouth.ac.uk/business-postgraduate/files/2014/09/CIGBE-The-Future-of-English.pdf>, 2015年8月15日最終閲覧.
- Gurcaglar, S.T. (2013). 「Retranslation 再翻訳」 in モナ・ベイカー&ガブリエル・サルダーニャ編『翻訳研究のキーワード』 藤濤文子監修・編訳 研究社 pp.187-194.
- Hà Văn Lương (2003). 'Tình hình nghiên cứu và dịch văn học Nhật Bản ở Việt Nam' (ベトナムにおける日本文学翻訳・研究現状), in *Tạp chí Nghiên cứu Nhật Bản và Đông Nam Á* (日本東南アジア研究雑誌), số 4.
- 裴亮 (2011). 「周作人の「久米仙人」 翻訳に関する一考察—〈趣味〉、〈人情〉とく重訳をめぐって—」『COMPARATIO』比較文化研究会、九州大学大学院比較社会文化学府, 65-80, [Online] <http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/24640/p065.pdf>, 2015年10月15日最終閲覧.
- Heilbron, J. (1999). 'Toward a Sociology of Translation: Book Translations as a Cultural

- World-System', *European Journal of Social Theory*, 2 (4) 1999, pp. 429-444.
- Heilbron, J. (2010). 'Structure and Dynamics of the World System of Translation' UNESCO, International Symposium 'Translation and Cultural Mediation', [Online] <http://portal.unesco.org/culture/en/files/40619/12684038723Heilbron.pdf/Heilbron.pdf>, 2014年9月1日閲覧.
- 日地谷＝キルシュネライト, イルメラ (2001). 「村上春樹をめぐる冒険— 文学四重奏団の不協和音」 『世界』 第683号 岩波書店.
- 平子義雄 (1999). 『翻訳の原理—異文化をどう訳すか』 大修館書店.
- Hoàng Thúy Toàn (1999). *Không phải của riêng ai – Dịch văn học & Văn học dịch* (『誰も
の物でもない-文学を翻訳することと翻訳文学』), Nxb. Văn học & Trung tâm Văn hóa
Ngôn ngữ Đông Tây.
- Hoàng Thúy Toàn (2009). *NHỮNG CON ĐƯỜNG – Dịch văn học & Văn học dịch* (『様々な道—
文学翻訳・翻訳文学』), Nxb. Văn học.
- Hoàng Thúy Toàn & Đoàn Tử Huyền (2002). *Những người dịch văn học Việt Nam* (『ベトナムの
翻訳者たち』) Hội đồng Văn học dịch-Hội Nhà văn Việt Nam Trung tâm Văn hóa ngôn ngữ
Đông Tây.
- Idema, W. (2003). 'Dutch Translations of Classical Chinese Literature: Against a Tradition of
Retranslations', in L. T. Chan (ed.) *One into Many: Translation and the Dissemination of
Classical Chinese Literature*, Rodopi, pp.213-242.
- 川田順造 (2008). 『文化の三角測量—川田順造講演集』 人文書院
- Kittel, H. (1991). 'Vicissitudes of Mediation: The Case of Benjamin Franklin's Autobiography', in
H.Kittel and A. P. Frank (Eds.), *Interculturality and the Historical Study of Literary
Translations*, Berlin: Erich Schmidt Verlag, pp.25-35.
- 小林恵子 (2011). 『三世紀・三国時代 江南出身の卑弥呼と高句麗から来た神武』 現代思
想新社.
- Koller, W. (1989). 'Equivalence in Translation Theory', in Chesterman A. (ed.) *Readings in
Translation Theory*, Helsinki: Oy Finn Lectura Ab., pp. 99-104.
- Koskinen, K. & Paloposki, O. (2010). 'Retranslation', in Gambier & van Doorslaer (ed.),
Handbook of Translation Studies, John Benjamins Publishing, pp. 294-298.
- Lefevere, A. (1978). 'Translation Studies: The Goal of the Discipline' in Homes J. S., Lambert J. &

- van den Broeck R. (eds.), *Literature and Translation : New Perspectives in Literary Studies with a Basic Bibliography of Books on Translation Studies*, Belgium: Acco, pp. 234-35.
- Marin-Lacarta, M. (2008). 'La traduccion indirecta de la narrativa China contemporanea al castellano: sindrome o enfermedad? Revista de historia de la Traduccion' [Online] www.traduccionliteraria.org/1611/art/marin.htm, 13/06/11 閲覧.
- 宮田昇 (1995). 『新・翻訳出版事情 [著作権の周辺]』 日本エディタースクール出版部.
- 村上春樹・柴田元幸 (2000). 『翻訳夜話』 文春新書.
- グエンタム (2013). 「ベトナムにおける日本文学の翻訳についての研究」 神戸大学大学院国際文化学研究科 2013 年 1 月 17 日提出 (修士論文).
- Nguyễn Thị Thanh Xuân (ed.) (2008). *Văn học Nhật Bản ở Việt Nam* (『ベトナムにおける日本現代文学』) Nxb. Đại học Quốc gia TP.Hồ Chí Minh.
- Nguyễn Văn Hiệu (2007). 'Ý thức văn hóa trong dịch thuật văn chương ở Việt Nam từ cuối thế kỷ XIX đến năm 1945' (ベトナムにおける 19 世紀から 1945 年にかけて、文学翻訳での文化的意識), in *Tạp chí Nghiên cứu văn học* (文学研究誌) số 1-2007.
- Nguyễn Văn Hoàn (2007). 'Vai trò của dịch thuật văn chương và sự phát triển của văn học Việt Nam' (文学翻訳の役割とベトナム文学の発展について), *Tạp chí Nghiên cứu văn học* (文学研究誌) số 2-2007.
- Nhật Chiêu (1994). *Nhật Bản trong chiếc gương soi* (『鏡の中の日本』), Nxb. Giáo dục.
- Nhật Chiêu (1998). *Thơ ca Nhật Bản* (『日本の詩』), Nxb. Giáo dục.
- Nhật Chiêu (2000). *Văn học Nhật Bản từ khởi thủy đến 1868* (『起源から 1868 年までの日本文学』), Nxb. Giáo dục.
- Nida, E.A. (1964). *Towards a Science of Translating*, Leiden: E.J.Brill.
- Pieta, H. & Rosa, A.A. (2013). Indirect translation: exploratory panel on the state-of-the-art and future research avenues. [Online] <http://www.fb06.uni-mainz.de/est/51.php>, 2013 年 7 月 30 日 閲覧.
- Pieta, H. (2013). *On (In)directness in Literary Transfer between Cultural Peripheries: Portuguese Translation of Polish Literature as a case in Point*, oral presentation at 7th EST Congress Garmersheim August 31 2013, Indirect translation: exploratory panel on the state-of-the-art and future research avenues.
- Phan Mạnh Hùng (2012) 'Komatsu Kiyoshi và Cuộc tái ngộ' (小松清と『再会』). [Online]

- http://khoavanhocngonngu.edu.vn/home/index.php?option=com_content&view=article&id=3029%3Akomatsu-kiyoshi-va-cuc-tai-ng&catid=63%3Avn-hc-vit-nam&Itemid=106&lang=en,
最終閲覧日 2012 年 9 月 30 日.
- Reiss, K./Vermeer, J.H. (trans.Nord C.) (1984/2013). *Towards a General Theory of Translational Action: Skopos Theory Explained*, Manchester: St.Jerome
- Ringmar, M. (2007). 'Roundabouts routes: Some remarks on indirect translations',
<http://www.arts.kuleuven.be/info/bestanden-div/RINGMAR.pdf>, 2013 年 6 月 1 日閲覧.
- Rosa, A.A. (2013). *On indirectness in English-Portuguese Translation of Canonized Fiction*, oral presentation at 7th EST Congress Garmersheim August 31 2013, Indirect translation: exploratory panel on the state-of-the-art and future research avenues.
- 斎藤由美子(2010). 「重訳の試み—多和田葉子の作品『ボルドーの義兄』分析」 in 現代文芸論研究室論集, [Online]<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/51943/1/reny002011.pdf>, 2015 年 10 月 1 日最終閲覧.
- 下宮忠雄 (2000). 『世界の言語と国のハンドブック』 大学書林.
- 塩濱久雄 (2007a). 『「ノルウェイの森」を英語で読む』 若草書房.
- 塩濱久雄 (2007b). 『村上春樹はどう誤訳されているか—村上春樹を英語で読む』 若草書房.
- Shiraishi, Masaya (1994). *Quan hệ Nhật Bản - Việt Nam* (日本・ベトナムの関係), Nxb. Khoa học xã hội, Trung tâm Châu Á- Thái Bình Dương (VAPEC), Hà Nội.
- Shuttleworth, M. (2009). 'Polysystem', in M. Baker and G. Saldanha (eds.) *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, Routledge, pp.197-200.
- Shuttleworth, M. (2013). 「Polysystem ポリシステム」 in モナ・ベイカー&ガブリエル・サルダーニャ編『翻訳研究のキーワード』 藤濤文子監修・編訳 研究社 pp.149-155.
- St André, J. (2006). 'Travelling Toward True Translation: The First Generation of Sino-English Translators', in Polezzi L. (ed.) *Translation, Travel, Migration*, Special issue of *The Translator* 12 (2): 189-210.
- St André, J. (2009). 'Relay', in M. Baker and G. Saldanha (eds.) *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, Routledge, pp. 230-232.
- St André, J. (2013). 「Relay 重訳 (リレー通訳)」 in モナ・ベイカー&ガブリエル・サルダーニャ編『翻訳研究のキーワード』 藤濤文子監修・編訳 研究社 pp.180-185.
- Toury, G. (1995). *Descriptive Translation Studies and Beyond*, Amsterdam & Philadelphia: John

Benjamins.

Tran Thi Chung Toan (2010). 「ベトナムにおける日本文学の翻訳・出版・教育・研究—現在及び今後の課題—」 立命館言語文化研究 第 21 卷 3 号 pp43-52.

Vĩnh Sính (2000). *Về tác phẩm “Giai nhân kỳ ngộ diễn ca” của Phan Châu Trinh: nguồn gốc và ý nghĩa* (ファン・チュ・チンの『佳人奇遇』訳について：原点と意義), Kỷ yếu hội thảo quốc tế Việt Nam học lần thứ nhất 1998, Tập II, Nxb. Thế giới, Hà Nội.

その他の資料

広辞苑第六版 (2008). 岩波書店 p.1332.

大辞泉【第二版】上巻 (2002). 小学館 p.1725.

インターネット

- ・ 『社団法人著作権情報センター』の HP: 2015 年 3 月 20 日閲覧

http://www.cric.or.jp/db/domestic/a1_index.html#028

http://www.cric.or.jp/db/treaty/t1_index.html

- ・ UNESCO Index Translationum :

<http://www.unesco.org/xtrans/bsstatexp.aspx?crit1L=3&nTyp=min&topN=50>

<http://www.unesco.org/xtrans/bsstatexp.aspx?crit1L=4&nTyp=min&topN=50>

- ・ 電子新聞 :

http://ajw.asahi.com/article/cool_japan/style/AJ201305150070, 2015 年 10 月 30 日最終閲覧。

<http://www.nippon.com/en/column/g00144/>, 2015 年 10 月 30 日最終閲覧。

<http://www.curtisbrown.co.uk/news/haruki-murakami-now-available-in-50-languages#%23SITEURL%23%23%20haruki-murakami%2F>, 2015 年 10 月 30 日最終閲覧。

Nỗi buồn văn học dịch thuật (文学翻訳の悩み)

<http://dichthuat.pro.vn/noi-buon-van-hoc-dich-thuat/>, 最終閲覧日 2012 年 9 月 30 日

<http://www.ertc.com>, 最終閲覧日 2012 年 9 月 10 日

<http://chimviet.free.fr/vannhat/Avannhat.htm>, 最終閲覧日 2012 年 9 月 10 日

『2012 年度 日本語教育機関調査 結果概要 抜粋』、
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2012/2012_s_excerpt_j.pdf, 2015 年 9 月 1 日最終閲覧日。

Dịch giả Đỗ Khánh Hoan: hơn nửa thế kỷ vác đá leo đồi! (翻訳者ド・カイン・ホアン：石を持って坂を登った半世紀) [Online] [http://thaihabooks.com/tin-tuc/916/DICH-GIA-DO-KHANH-HOAN:-HON-NUA-THE-KY-VAC-DA-LEO-DOI!/,](http://thaihabooks.com/tin-tuc/916/DICH-GIA-DO-KHANH-HOAN:-HON-NUA-THE-KY-VAC-DA-LEO-DOI!/) 2015 年 9 月 1 日閲覧。

“Incunabula Short Title Catalogue”, British Library, www.bl.uk/catalogues/istc/index.html, 2015 年 7 月 1 日観閲。

インタビュー

2014 年 1 月 5 日、ホーチミン市、ベトナム、対面インタビュー。

参考資料

資料 1: 表 1. ベトナムにおける日本文学の出版書籍

未確認の情報は「*」と記す。

重訳の媒介言語：英語は「英」、フランス語は「仏」、ロシア語は「露」、中国語は「中」とする。

番号	翻訳タイトル	原作名・ 文献初出年	作家名	翻訳者	出版社	出版年	出版地	重訳
			翻訳書での表示					媒介 言語
1	Giai nhân kỳ ngộ (佳人奇遇)	『佳人之奇遇』 (1885~1897)	東海散士（柴四朗）	Phan Chu Trình	*	*(1913 年に雑誌掲 載)	*	O
			Đông Hải Tán Sĩ					中
2	Bên thi hài người vợ (妻の死体の傍に)	『絶後の記録亡き妻 への手紙』 (1949)	小倉豊文	*	*	1958	*	O
			Todofumi Ogura					露
3	Khu phố không ánh mặt trời- Núi đồi yên lặng (太 陽のない街・静かな山)	『太陽のない街』 (1929)	徳永直	Trương Chính & Hồng Bích Vân	Lao Động	1961	*	O
			Tokunaga Shunao					露
4	Người đàn bà trong cồn cát (砂丘の中の女)	『砂の女』(1962)	安部公房	Trùng Dương	An Tiêm	1962	Hà Nội	O
			Kobo Abe					英
5	Tàu nhà máy của hộp (蟹加工の工船)	『蟹工船』(1929)	小林多喜二	*	Văn học	1963	*	O
			Kô-ba-ya-si Ta-ki-ji					露
6	Mây gió Hakone (箱根の 風雲)	『ハコネ用水』 (1951)	高倉 輝	Trương Chính & Hồng Bích Vân		1963		O
			Takakura Teru					中・ 露
7	Cánh đồng Bansu	『播州平野』(1946)	宮本百合子	Hồ Dzếnh &	Văn học	1964	*	O

	(播州の畑)		Yuriko Miyamoto	Kim Lang				*
8	Sợi xích trắng (白い鎖)	*	水上 勉、春川鉄男、 西野 達吉、半田義之 等 Minakami Tsutomu, Harukawa Tetsuo, Nishino Tatsukichi, Handa Yoshiyuki の短 編集	Trương Chính & Hồng Dân Hoa	Lao động	1966		O 中・ 露
9	Thân phận con người (人間の宿命)	*	芥川龍之介 Akutagawa Ryunosuke	Diễm Châu	Văn nghệ	1966	Sài Gòn	O 英
10	Truyện của một người lãng trí (健忘症の人の 物語)	『河童』(1927)	芥川龍之介 Akutagawa Ryunosuke	Diễm Châu	Văn	1966	Sài Gòn	O 英
11	Lã sinh môn (羅生門)	『羅生門』(1915)	芥川龍之介 Akutagawa Ryunosuke	Vũ Minh Thiếu	Gió bốn phương	1967	Sài Gòn	O 英
12	Một bản tình ca (愛の歌)		* Harada Yassuko	Bích Kim	Cáo Thơm	1968	Sài Gòn	O *
13	Chết giữa mùa hè (真夏の死)	『真夏の死』	三島由紀夫 Mishima Yukio	Tân Linh	Phù Sa	1969	Sài Gòn	O *
14	Cô vũ nữ xứ Izu (伊豆の踊子)	『伊豆の踊子』 (1927)	川端康成 Yasunari Kawabata	Huyền Không	Trình bày	1969	*	O *
15	Em bé Phù Tang (日本の子)	*	* Ishoco & Ichiro	Trương Đình Cử	Lá Bối	1969	*	O

			Hatano					*
16	Ngàn cánh hạc (千羽鶴)	『千羽鶴』 (1952)	川端康成	Trùng Dương	Trình bày	1969	Sài Gòn	O
			Yasunari Kawabata					英
17	Xứ tuyết (雪国)	『雪国』 (1937)	川端康成	Chu Việt	Trình bày	1969	Sài Gòn	O
			Yasunari Kawabata					*
18	Năm dài tình yêu (恋の長年)	*	*	Phạm Quốc Bảo	Hồng Lĩnh	1969	Sài Gòn	O
			Yoichi Nakagawa					*
19	Kim Các tự (金閣寺)	『金閣寺』 (1956)	三島由紀夫	Đỗ Khánh Hoan & Nguyễn Tường Minh	An Tiêm	1970	Sài Gòn	日、 英
			Mishima Yukio					
20	Gót chân giang hồ (浪 人の踵)	『膝栗毛』 (1977)	十返舎一九	Trường Sinh	Hải Âu	1970	Sài Gòn	O
								*
21	Nuôi thù (敵を飼育)	『飼育』 (1958)	大江健三郎	Diễm Châu	Trình bày	1970	Sài Gòn	O
			Kenzaburo Oe					英
22	Cây đàn Miến Điện (ビルマの豎琴)	『ビルマの豎琴』 (1946~48)	武山道雄	Đỗ Khánh Hoan	Sáng tạo	1971	Hà Nội	O
			Takeyama Michio					英
23	Chiều hôm lỡ chuyến (午後の曳航に遅れ る)	『午後の曳航』 (1963)	三島由紀夫	Đỗ Khánh Hoan & Nguyễn Tường Minh	Sông Thao	1971	Sài Gòn	
			Mishima Yukio					日、 英
24	Góp nhặt cát đá (沙石を 集める)	『沙石集』 (1283)	無住道暁	Đỗ Đình Đồng	Lá Bối	1971	Sài Gòn	O
			Muju thiền sư					*

25	Hòa ca (和歌)	*	*	Nguyễn Tường Minh	Sông Thao	1971	Sài Gòn	
26	Tiếng sóng (波の音)	『潮騒』 (1954)	三島由紀夫	Đỗ Khánh Hoan & Nguyễn Tường Minh	Sông Thao	1971	Sài Gòn	日、 英
			Mishima Yukio					
27	Băng điểm (氷点)	『氷点』 (1965)	三浦綾子	Liêu Quốc Nhĩ	Đông phương	1972	Sài Gòn	O
			Ayako Miura					中
28	Luyến ca (恋歌)	*	*	Nguyễn Tường Minh		1972	Sài Gòn	
29	Ngàn cánh hạc (千羽鶴)	『千羽鶴』 (1952)	川端康成	Tuấn Minh	Sống mới	1972	Sài Gòn	O
			Yasunari Kawabata					*
30	Nỗi lòng (こころ)	『こころ』 (1914)	夏目漱石	Đỗ Khánh Hoan & Nguyễn Tường Minh	Sông Thao	1972	Sài Gòn	日、 英
			Natsume Soseki					
31	Thần thoại Nhật Bản (日本の神話)	*	*	Doãn Quốc Sĩ	Sáng tạo	1972	Hà Nội	O
								*
32	Về cố hương (帰故郷)	『帰郷』 (1949)	大佛次郎	Bùi Ngọc Lâm	Đất Sóng	1973		O
			Jino Osaragi					*
33	Yêu trong mùa thu (秋の愛)	*	*	Mặc Đỗ	Đất mới	1973		O
			Harada Yassuko					*

34	Rập rờn cánh hạc (微 かの鶴の羽)	『千羽鶴』 (1952)	川端康成	Nguyễn	Sông	1974	Sài Gòn	
			Kawabata Yasunari	Tường Minh	Thao			
35	Sau bữa tiệc (宴のあと)	『宴のあと』 (1960)	三島由紀夫	Tuyết Sinh	Trẻ	1974	Sài Gòn	O
			Yukio Mishima					英
36	Đường đến nguồn nước (水源への道)	『泉へのみち』 (1954)	広津 和郎	Xuân Bích	Lao động	1974		O
			Hirôtsuda Cadurô					露
37	Người đàn bà mà tôi ruồng bỏ (わたしが棄 てた女)	『わたしが・棄て た・女』 (1964)	遠藤周作	Đoàn Từ Huyền	Lao động	1984		O
			Shūsaku Endō					露
38	Tháng tám vắng bóng Nhật hoàng (皇帝のい ない八月)	『皇帝のいない八 月』 (1978)	小林 久三	Nguyễn Đỗ	Cửu Long	1985		O
			Ki-u-dô Cô-ba-ya-xi					露
39	Khuôn mặt người khác (他人の顔)	『他人の顔』 (1964)	安部公房	Phạm Mạnh Hùng	Đà Nẵng	1986		O
			Kôbô Abê					英
40	Vũ nữ Izu (伊豆の踊り子)	『伊豆の踊子』 (1927)	川端康成	Thái Hà	Tác phẩm mới	1986		O
			Yasunari Kawabata					英
41	Truyện cười Nhật Bản (日本の笑い話)	*	多著者	Nhật Chiêu	Cà Mau	1987		O
			Nhiều tác giả					英、 仏
42	Những năm tháng thu tàn (残秋の年月)	*	有吉佐和子	Hoàng Hữu	Phú Khánh	1987		O
			Sawaco Ariyoshi	Do				*
43	Cổ đô (古都)	『古都』 (1962)	川端康成	Thái Văn	Hải Phòng	1988	Hà Nội	O
			Yasunari Kawabata	Hiếu				*

44	Đèn không hắt bóng (影のない灯)	『無影灯』 (1972)	渡辺淳一	Cao Xuân Hạo	Nghĩa Bình	1988		O
			Watanabe Dzunichi					露
45	Đốm lửa lạc loài- Truyện tình Nhật Bản (場違いの 点在する火-日本のロ マン・ストーリー)	*	川端康成&三浦哲郎	Nguyễn Đức Dương 編集	Văn nghệ	1988		O
			Yusunari Kawabata & Testuo Miura					英・ 露
46	Khát vọng yêu đương (愛の憧れ)	『愛の渴き』(1950)	三島由紀夫	Phạm Xuân Thảo	An Giang	1988		O
			Yukio Mishima					英
47	Ngàn cánh hạc (千羽鶴)	『千羽鶴』(1952)	川端康成	Giang Hà Vĩ	Tổng hợp Kiên Giang	1988		O
			Yasunari Kawabata					英
48	Vùng băng tuyết (雪の 域)	『雪国』 (1937)	川端康成	Giang Hà Vỹ	Mùi Cà Mau	1988		O
			Yasunari Kawabata					*
49	Cậu bé thông minh Hikoichi (頭が良いヒ コイチくん)	*	*	Nguyễn Mạnh Hùng	Mãng Non	1988	TP.HCM	O
			Yukio Tsuchiya Araigoro					*
50	Năm người đàn bà si tình (好色五人女)	『好色五人女』(1686)	井原西鶴	Phạm Thị Nguyệt	Tiền Giang	1988	TP.HCM	O
			Ishihara Saikaku					*
51	Hẹn mùa hoa cúc (菊の季節の約束)	『菊花の約』(『雨月 物語』) (1776)	上田秋成	Nguyễn Trọng Địch	Văn học	1989		O
			Uêda Akinari					*
52	Chiếc chìa khóa (鍵)	『鍵』(1956)	谷崎潤一郎	Phạm Thị Hoài	Phụ Nữ	1989		O
			Tanizaki Junichiro					*

53	Người đàn bà tôi thương (我が愛する女)	*	谷崎潤一郎	Triệu Lam Châu	Nghĩa Bình	1989	Hà Nội	O
			Tanizaki Junichiro					*
54	Người đàn bà trong cồn cát (砂丘の中の女)	『砂の女』 (1962)	安部公房	Nguyễn Tuấn Khanh	Văn học	1989		O
			Kôbô Abê					英
55	Tiếng rên của núi (山の嘆き)	『山の音』 (1954)	川端康成	Ngô Quý Giang	Thanh niên	1989		O
			Yasunari Kawabata					英
56	Tình trong bóng tối (暗闇の中の愛)	『盲目物語』 (1955)	谷崎潤一郎	Nhật Chiêu	Văn nghệ	1989		O
			Tanizaki Junichiro					英
57	Truyện kể Heike (平家物語)	『平家物語』 (1212?)	無記名		Khoa học xã hội	1989		O
			Khuyết danh					英
58	Truyện ngắn chọn lọc (選定の短編集)	*	芥川龍之介	Lê Văn Viện	Văn Học	1989		O
			Akutagawa Ryunosuke					
59	Cô bé bên cửa sổ (窓際 の女の子)	『窓ぎわのトットち ゃん』 (1981)	黒柳徹子	Phí Văn Gùmg & Phan Duy Trọng	Kim Đồng	1989		O
			Tetsuko Kuroyanaghi					英
60	Người săn gấu và mèo rừng (熊ハンターと山猫)	*	宮澤賢治	Vương Trọng	Văn hóa dân tộc	1990		O
			Kenji Miyazawa					*
61	Ngôi đền vàng (金のお寺)	『金閣寺』 (1956)	三島由紀夫	Lê Lộc	Thanh niên	1990		O
			Yukio Mishima					英語

62	Người đẹp ngủ say (眠っている美人)	『眠れる美女』 (1961)	川端康成	Vũ Đình Phòng	Văn học	1990		O
			Yasunari Kawabata					*
63	Sấm xa (遠雷)	『遠雷』 (1983)	立松和平	Huỳnh Thị Chi Mai	Tác phẩm mới &Hội Nhà văn	1990		O
			Tatematsu Wahei					*
64	Kẻ lừa đảo (詐欺師)	*	*	Chu Trọng Thu	Văn học	1991	Hà Nội	O
			Matshumoto					*
65	Tình yêu không quên (忘れられない恋)	『それから』 (1909)	夏目漱石	Bích Phượng	Văn nghệ	1991		O
			Soseki Natsume					*
66	Truyện Genji (源氏物語)	『源氏物語』 (1008)	紫式部	多翻訳者	Khoa học xã hội	1991		O
			Murasaki Shikibu					英
67	Sự sụp đổ của gia đình Nire (ニレ家の崩れ)	『楡家の人びと』 (1964)	北 杜夫	Phạm Thủy Ba	Khoa học xã hội	1992	Hà Nội	O
			Morio Kita					*
68	Dòng sông sao (星の川)	*	*	*	Lao động	1993		O
			*					*
69	Gia đình (家族)	『家』 (1911)	島崎藤村	Hạnh Liên	Văn hóa dân tộc	1994		O
			Shimazaki Tôson					英
70	Bashô và thơ haiku (芭蕉と俳句)	*	松尾芭蕉	*	Văn học	1994		O
			Bashô Matsuo					*
71	Xứ tuyết (雪国)	『雪国』 (1937)	川端康成	Ngô Văn Phú & Vũ Đình Bình	Hội nhà văn	1995	Hà Nội	O
			Yasunari Kawabata					仏
72	Tự sát ngày đính hôn (婚約日の自殺)	*	*	Nguyễn Đức Thuần	Thanh niên	1996	Hà Nội	O
			Xâytor Maxumoto					*

73	Rừng Na-uy (ノルウェイの森)	『ノルウェイの森』 (1987)	村上春樹	Hạnh Liên-	Văn học	1996	Hà Nội	O
			Haruki Murakami	Hải Thanh				英
74	Giấc mộng đàn bà (女の夢)	*	*	*	Văn học	1997		O
			*					*
75	Một nỗi đau riêng (個人的な痛み)	『個人的な体験』 (1964)	大江健三郎	Lê Ký	Văn nghệ	1997		O
			Kenzaburo Oe	Thương				英
76	Lối lên miền Oku (奥への細道)	『おくのほそ道』 (1702)	松尾芭蕉	Vĩnh Sinh 翻	Thế giới	1998		
			Bashô Matsuo	訳と解説				
77	Nhà bếp (キッチン)	『キッチン』 (1988)	吉本ばなな	Trần Thị	Đại học Quốc gia Hà Nội	2000		O
			Yoshimoto Banana	Chung Toàn				英
78	Tuyển tập truyện ngắn R.Akatagawa (芥川の短編集)	*	芥川龍之介	多翻訳者	Hội nhà văn	2000		O
			*					*
79	Tuyển tập Y.Kawabata (川端の作品集)	*	川端康成	多翻訳者	Hội nhà văn	2001		O
			Yasunari Kawabata					英・ 露・ 仏
80	Đường lên ngân hà (銀河への道)	『銀河鉄道の夜』 (1961)	宮澤賢治	Nguyễn Đỗ	Trẻ	2002		
			Miyazawa Kenji	An Nhiên				
81	Những người Nhật bị lãng quên (忘れられて いる日本人たち)	*	*	*	Giáo dục	2002		O
			*					*
82	Câu âm ngân thơ (素直な坊ちゃん)	『坊っちゃん』 (1906)	夏目漱石	Bùi Thị Loan	Hội nhà văn	2004	Hà Nội	
			Natsume Soseki					
83	Tuyển tập tác phẩm Kawabata	*	川端康成	Nhiều dịch giả	Lao Động và Trung	2005	Hà Nội	O
								英・

	(川端の作品集)		Yasunari Kawabata	多翻訳者	tâm Văn hóa Đông Tây			露・ 仏
84	Biên niên ký chìm vụn dây cót (ねじまき鳥ク ロニクル)	『ねじまき鳥クロニ クル』 (1992-1993)	村上春樹	Trần Tiểu Cao Đăng	Hội nhà văn	2006		O
			Haruki Murakami					英
85	Đom đóm (蛍)	『螢』 (1983)	村上春樹	Phạm Vũ Thịnh	Đà Nẵng	2006		
			Murakami Haruki					
86	Kitchen (キッチン)	『キッチン』 (1988)	吉本ばなな	Lương Việt Dũng	Hội nhà văn	2006		
			Banana Yoshimoto					
87	N.P (N.P)	N.P (1990)	吉本ばなな	Lương Việt Dũng	Hội nhà văn	2006		
			Banana Yoshimoto					
88	Ngày đẹp trời để xem Kangaroo (カンガルー を見るための日和)	『カンガルー日和』 (1981)	村上春樹	Phạm Vũ Thịnh	Đà Nẵng	2006		
			Murakami Haruki					
89	Rừng Na-uy (ノルウェイの森)		村上春樹	Trịnh Lữ	Hội nhà văn	2006		O
			Haruki Murakami					英
90	Sau cơn động đất (地震のあとで)	地震のあとで(1999)	村上春樹	Phạm Vũ Thịnh	Đà Nẵng	2006		
			Murakami Haruki					
91	Trinh tiết- Tuyển tập truyện ngắn Akutagawa (みさお - 芥川の短編 集)		芥川龍之介	Cung Điền	Văn học	2006		
			Akutagawa Ryunosuke					
92	Bóng ma ở Lexington (レキシントンの幽 霊)	『レキシントンの幽 霊』 (1996)	村上春樹	Phạm Vũ Thịnh	Đông A - Đà Nẵng	2007		
			Murakami Haruki					

93	Kafka bên bờ biển (海辺のカフカ)	『海辺のカフカ』 (2002)	村上春樹	Dương Tường	Hội nhà văn	2007		O
			Haruki Murakami					英・ 仏
94	Mộng (夢)		夏目漱石	An Nhiên	Trẻ	2007		
			Natsume Soseki					
95	Người Tì vi (TV ビーブル)	『TV ビーブル』 (1990)	村上春樹	Phạm Vũ Thịnh	Đà Nẵng	2007		
			Murakami Haruki					
96	Phía Nam biên giới, phía Tây mặt trời (国境の南、太陽の西)	『国境の南、太陽の 西』 (1992)	村上春樹	Cao Việt Dũng	Hội nhà văn	2007		O
			Haruki Murakami					仏
97	Sau nửa đêm (アフターミッドナイ ト)	『アフターダーク』 (2004)	村上春樹	Huỳnh Thanh Xuân	Công an nhân dân	2007		O
			Haruki Murakami					英
98	Vĩnh biệt Tsugumi (さよならつぐみ)	『TUGUMI』 (1989)	吉本ばなな	Vũ Hoa	Đà Nẵng	2007		
			Banana Yoshimoto					
99	Vườn cúc mùa thu (秋 の菊の庭)	*	複数の著者	Nguyễn Nam Trân	Trẻ	2007		
			Nhiều tác giả					
100	Amrita (アムリタ)	『アムリタ』 (1994)	吉本ばなな	Trần Quang Huy	Hội nhà văn	2008		
			Banana Yoshimoto					
101	Đôi mắt ấy vẫn ở trên giường (その目はまだ ベッドの上に)	『ベッドタイムアイ ズ』 (1985)	山田詠美	Lương Việt Dũng	Nhã Nam- Hội nhà văn	2008		
			Yamada Amy					
102	Giáo sư và công thức toán (教授と数式)	『博士の愛した数 式』 (2003)	小川洋子	Lương Việt Dũng	Nhã Nam- Hội nhà văn	2008	Hà Nội	
			Ogawa Yoko					
103	Màu xanh trong suốt	『限りなく透明に近	村上隆	Trần Phương	Văn học	2008		O

	(透明なブルー)	いブルー』 (1976)	Ryu Murakami	Thủy				英
104	Người tình Sputnik (スプートニクの恋人)	『スプートニクの恋人』 (1999)	村上春樹 Haruki Murakami	Ngân Xuyên	Hội nhà văn	2008		
105	Ring -Vòng tròn ác nghiệt (残酷なリング)	『リング』 (1991)	鈴木光司 Suzuki Koji	Lương Việt Dũng	Văn học	2008		
106	Say ngủ (眠る)	『白河夜舟』 (1989)	吉本ばなな Banana Yoshimoto	Trương Thị Mai	Văn hoá Sài Gòn	2008		
107	Sống lưng của Jesse (ジェシーの背骨)	『ジェシーの背骨』 (1986)	山田詠美 Yamada Aymi	Thủy Dương Na	Văn hoá Sài Gòn	2008		
108	Thần lẩn (とかげ)	『とかげ』 (1993)	吉本ばなな Banana Yoshimoto	Nguyễn Phương Chi	Văn học	2008	Hà Nội	
109	Tottochan- Cô bé bên cửa sổ (トットちゃんー 窓ぎわの女の子)	『窓ぎわのトットちゃん』 (1981)	黒柳徹子 Tetsuko Yanagi	Anh Thư	Lao động	2008		O 英
110	Trẻ em trong ngọn lửa chiến tranh (戦火のなか の子どもたち)	戦火のなかの子ども たち (1973)	いわさきちひろ Chihiro Iwasaki	Đoàn Ngọc Cánh	Phụ nữ	2008	TP HCM	
111	Xuyên thấu (ピアッシ ング)	『ピアッシング』 (1994)	村上龍 Murakami Ryu	Lê Thị Hồng Nhưng	Văn học	2008		
112	69 (69)	『69 sixty nine』 (1987)	村上龍 Murakami Ryu	Hoàng Long	Văn học	2009		
113	Socrates đang yêu (ソクラテス・イン・ラ	『世界の中心で、愛 をさけぶ』 (2001)	片山恭一	Minh Châu & Uyên Thiêm	Hội nhà văn	2009	TP HCM	

	ブ)		Katayama Kyoichi					
114	3 đêm trước giao thừa (大晦日の前の3ツ夜)	『インザ・ミッスー プ』 (1997)	村上龍 Murakami Ryu	Song Tâm Quyên	Văn học & Bách Việt	2009		
115	Bên trong (中)	*	複数の著者 Nhiều tác giả	Trần Thuỳ Mai	Thuận Hoá	2009	TP HCM	
116	Chuyện đồng thoại Nhật Bản (日本の童話)	『姪に読ませる物 語』 (2009)	緑川紳一郎 Midorikawa Shinichiro	Phan An	Kim Đồng	2009		
117	Đẹp và buồn (美しさと哀しみ)	『美しさと哀しみ と』 (1965)	川端康成 Yasunari Kawabata	Mai Kim Ngọc	Văn hoá Sài Gòn	2009		
118	Ngầm (地下)	<u>アンダーグラウンド</u> (1997)	村上春樹 Haruki Murakami	Trần Đình	Văn hoá Sài Gòn	2009		
119	Nhật ký mang thai (妊娠のダイアリ)	『妊娠カレンダー』 (1991)	小川洋子 Ogawa Yoko	Lương Việt Dũng	Văn học	2009		
120	Phía sau nghi can X (容疑者 X の後ろ)	『容疑者 X の献身』 (2005)	東野圭吾 Higashino Keigo	Trương Thùy Lan	Văn hoá Sài Gòn	2009		
121	Rắn và khuyên lười (蛇と舌のピアス)	『蛇にピアス』(2004)	金原ひとみ Kanehara Hotomi	Uyên Thiêm	Văn học	2009		
122	Thử vai (オーディション)	『オーディション』 (1997)	村上龍 Ryu Murakami	Trần Thanh Bình	Văn hoá Sài Gòn	2009		O 英
123	Trò đùa của những ngón tay (指の戯れ)	『指の戯れ』 (1986)	山田詠美 Yamada Amy	An	Văn học	2009		
124	Vòng xoáy chết (死のらせん)	『らせん』 (1995)	鈴木光司 Suzuki Koji	Võ Hồng Long	Văn học	2009		
125	Vùng nước hắc ám (仄暗い水)	『仄暗い水の底か ら』 (1996)	鈴木光司 Suzuki Koji	Phong Linh	Văn học	2009		

126	Bí mật của Naoko (なおこの秘密)	『秘密』 (1998)	東野圭吾	Uyên Thiêm	Thời đại	2010		
			Higashino Keigo	& Trương Thủy Lan				
127	Cái lưng muốn đá (蹴りたい背中)	『蹴りたい背中』 (2003)	綿矢りさ	Nguyễn	Hà Nội	2010		
			Wataya Risa	Thanh Vân				
128	Khu vườn mùa hạ (夏の庭)	『夏の庭』 (1994)	湯本香樹実	Nguyễn	Văn học	2010		
			Yumoto Kazumi	Thanh Hà				
129	Người đẹp ngủ mê (ぐっすり眠れる美人)	『眠れる美女』 (1960)	川端康成	Quế Sơn	Thời đại	2010	Hà Nội	O
			Yasunari Kawabata					英・仏
130	Người đón tàu (電車を迎える人)	『鉄道員』 (1997)	浅田次郎	Phạm Hữu	Văn học	2010		
			Asada Jiro	Lợi				
131	Phong vị tuyệt vời (素晴らしい風景)	『無銭優雅』 (2007)	山田詠美	Hương Vân	Văn học	2010		
			Yamada Amy					
132	Trăng du dương (野風の月)	『極道な月』 (2004)	天藤湘子	Nguyễn Bảo	Phụ nữ	2010		*
			Shoko Tendo	Trang				
133	Xứ sở diệu kỳ tàn bạo và chốn tận cùng thế giới (ハードボイルド・ワンダーランドと世界の終り)	『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 (1985)	村上春樹	Lê Quang	Nhã Nam-Văn học	2010		O
			Haruki Murakami					英
134	Anh chàng xe điện (電車の男)	『電車男』 (2004)	中野 独人	Trương Thủy	Hội nhà văn	2011		
			Nakano Hitori	Lan				
135	Cuộc săn cừu hoang (野良羊の狩り)	『羊をめぐる冒険』 (1982)	村上春樹	Minh Hạnh	Văn học	2011		
			Murakami Haruki					

136	Mắt trần (裸の目)	『旅をする裸の眼』 (2004)	多和田葉子	Thu Hương	Phụ nữ	2011		日、英
			Tawada Yoko	Thanh Tâm Cầm Nhung				
137	Ngực và trứng (胸と卵)	『胸と卵』 (2007)	川上未映子	Song Tâm	Phụ nữ	2011		
			Mieko Kawakami	Quyên				
138	Nhảy, nhảy, nhảy (ダンス・ダンス・ダンス)	『ダンス・ダンス・ダンス』(1988)	村上春樹	Trần Văn Anh	Hội nhà văn	2011		
			Murakami Haruki					
139	Thất lạc cõi người (人生の喪失)	『人間失格』(1948)	太宰治	Hoàng Long	Hội nhà văn	2011	Hà Nội	
			Dazai Osamu					
140	Lấp lánh (きらきら)	『きらきらひかる』 (1991)	江國香織	Phạm Quỳnh Nga	Văn hóa-Văn nghệ HCM	2011	TP.HCM	
			Ekuni Kaori					
141	Quán trọ hoa diên vĩ (アイリスの宿)	『ホテル・アイリス』 (1996)	小川洋子	Lan Hương	Văn học	2011		
			Ogawa Yoko					

資料 2 質問票 (日本語訳)

ベトナムにおける日本現代文学の翻訳に関するアンケート

この調査は神戸大学大学院国際文化学研究科言語コミュニケーションコースの学生が実施するものです。近年、両国の友好関係が進んでいると共に、ベトナムでは日本の代表的作家や作品が紹介されています。調査の目的は、みなさんがそのような日本現代文学（ベトナム翻訳版）をどのように読み、日本文化についてどのような印象を持っているかを明らかにすることです。このアンケートは2つのパートから成り立っています。それぞれの指示に従い、回答を記入して下さい。

これはテストではありませんので「正解」も「不正解」もなく、名前を記入する必要もありません。また、この調査結果は研究目的のためだけに使用されますので、個人の回

答や名前を公表することはありません。ご記入の際には、信頼性の高い調査結果を得るために、全項目に答えたことをご確認ください。

次の項目の□にチェック✓を入れるか、空欄に回答を記入して下さい。

名前：

性別：☐男性☐女性

年齢：_____

職業：☐大学生* ☐大学院生* ☐教師・研究者*

☐会社員 ☐その他：

(*)がある職業の場合、ご専門は

日本語の能力：☐初・中級 ☐上級 ☐できない

日本文学を読むことについて：

1. 日本文学は何の媒体で読んでいますか。当てはまるものすべてにチェック✓印をつけてください。

☐書籍 ☐ウェブサイト

☐その他：

2. 日本現代文学はどのくらい読みましたか？

☐ 0 冊 ☐ 1～2 冊程度

☐ 3～5 冊程度 ☐ 6 冊以上

3. 知っている日本の代表的な作家と作品を述べて下さい。(何人・何作品でもよい)

作家：

作品：

日本文学の重訳について：

①日本語から直接的に翻訳された本と他の媒介語から翻訳された本のどちらが読みたいで

すか。

☐直接日本語から

☐媒介語から

☐どちらもよい

それはどうしてですか。

② 日本文学の本はできるだけ原作で読みたいですか。

☐はい

☐いいえ

- それはどうしてですか。

③ 3.で述べた作品は何語を介してベトナム語に翻訳されたか、分かりますか。

☐はい。 _____ 語からだと思います。

☐いいえ、よく分かりません。

——ご協力ありがとうございます——